1990

大正十三年一月二十九日 第三種郵便物認可
大正十五年十一月一日發行（毎月一回一日發行）

京城雜筆

永樂町人 編輯

十一月號

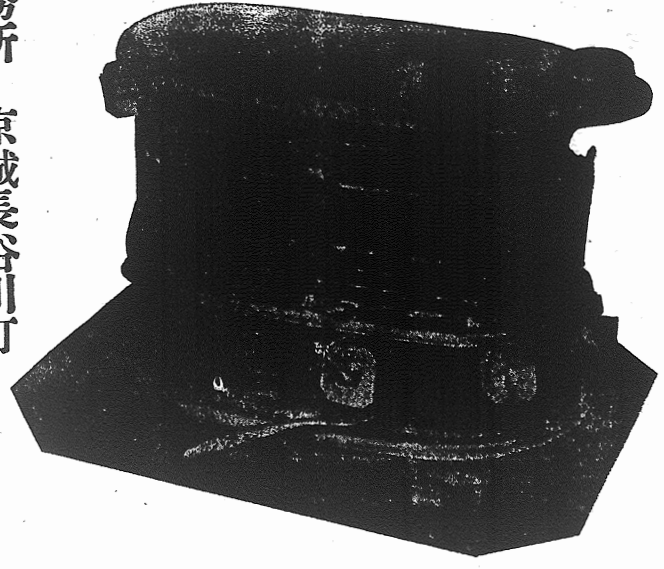
【第九十三號】

富永式特許暖爐

歐米風の
生活樣式から
我等の文化生活に
ピッタリ適合して
遺憾なき迄
改造された
眞に
革命的暖房具
富永式暖爐

五大特長

其一　燃料の一大節約
（冬期中練炭一個乃至一個半）
其二　絶へて灰塵飛散の患なし
其三　一般炊事に利用して尤も輕便なり
（飯炊きでも燒肴でも）
其四　毫も火災を起すの虞なし
（イクラ焚いても爐壁灼熱せず）
其五　煙突掃際を繰返すの要尠なし



組合事務所　京城長谷川町
朝鮮商工株式會社　京城出張所　電話本二二二一　同一六九

發賣所　京城本町二丁目
青々園茶舗　電話本千百十一番

陸軍文庫

田中時計店

京城本町二丁目

電話本局二五七番

店主 田中三郎

三菱商事株式會社京城出張所礦油販賣所

礦油問屋 田中時計店礦油部

京城若草町三六

電話本局二六二七番

營業科目

シリンダー油
エンジン油
ダイナモ油
タービン油
マシン油
スピンドル油

內燃機關用油
自動車用油
變壓器油
鐵道用油
船舶用油
グリース類

内地への御土産
お手近の御贈答品
日常の御使用品には

鮮内産品使用御奬勵の
御思召を以て

三和高麗燒
漢陽高麗燒
三和編

製造元
富田商會へ

御下命願上げます

京城南大門通三丁目
電本三三〇九

同本町二丁目
電本五五四

均質牛乳

牛乳界の大革命

日本最初の試み

均質牛乳の特徴は

脂肪を粉碎して居ります故に消化が宜しく風味の佳良と獸臭のない事は一度召上つた方には直覺せられます長らく腐敗しませぬから小兒や病人の方々にはこの均質牛乳に限ります品質本位でありますから値段の競爭をせないのは弊場の主義生命であります。

朝鮮總督府病院特定御用

陸軍衛戍病院御用

京城府各病院御用

平山牧場

電話光化門一三三番

京城東小門外

金剛煎餅　金剛山
金剛羊羹　金剛饅頭

金剛山産松實松花應用菓

金剛飴

金剛柏子（松の實鹽炒り）　金剛おこし
金剛柏子菓（朝鮮式松の實菓子）　金剛しるこ

京都二城本町二丁目
亀屋商店
電話二十七番
本局四七五番

十一月號目次

蓮花似六郎……細井肇氏
秋興……西鮮日報社長谷川義雄氏
柳橋……殖産銀行高久敏男氏
すゞきもんどの奇遇……川上喜久子氏
團栗……赤十字本部佐々木正太氏
瞳……朝鮮新聞社野崎眞三氏
ロイド眼鏡……警務局薄田美朝氏
全鮮爭覇ゴルフ戰……遼東新報支社高畠種夫氏
芝居……朝鮮佛教團前田昇氏
金風……瀬戸外科瀬戸潔氏
荒木先生……日本警察新聞田村直一氏
手紙……木浦碾田有造氏
目のない魚……朝鮮釀造協會山村翠氏
碁……鐵道協會岩本善文氏
將棋……東京將棋八段土居市太郎氏
關ヶ原……朝鮮銀行古田廉三郎氏
花（洋畫）……和田香明氏
忘れ得ぬ言葉……山口銀行田口耕平氏
千里眼……李王職醫局池部義雄氏
課室……小川徹氏
長……總督府善生永助氏
しもやけ……總督府島崎末平氏
出版界苦言……總督府圖書館梅田吉郎氏
無線の話……遞信局保阪久松氏
簡易生活……京城中央電話局伊藤憲朗氏
書……覆審法院片岡喜三郎氏
齊……元町小學校今村鼎氏
考……
首……
鼠……
兩……
端……
訴……京城府圖書館早田伊三氏
ふるの書……
食物と迷信……京城帝國大學佐藤剛藏氏
岐部將軍……工藤重雄氏
雜筆に關する件……渡邊得司郎氏
生死……東拓支店井上要二氏
愚存二三……女子技藝學校（社告）
海から陸を見る……遞信局松崎嘉雄氏
迷惑冗記……京城二昔會藤村德一氏
杉浦君の追懷……平北道廳谷多喜磨氏
柿……佛教慈濟會小水眞二氏
雜……井上收氏
筆……酒井婦人病院酒井一郎氏
京城婦人病院訪問記……
新しい東京女……東京建鐵會社堀一知郎氏
秋……朝鮮新聞社久松前平氏
一日……朝鮮鐵業會德野眞士氏
策……士……渡邊皮膚科渡邊晉氏
眞の雜筆……殖産銀行守屋德夫氏
京城つれつれ草……鐵道局鈴木孫直氏
懷來の秋……戸田溫氏
秋日雜吟……京城高商吉岡彦氏
十句の秋……川……久氏
金六夜話……仁……廣江澤次郎氏

蓮花似六郎

細井肇

○

方銘畫伯が短冊にスラ〳〵と蓮を書いた。まだ蕾の、之からパチリと開かうといふところ。題して『蓮花似六郎』

○

蓮花、六郎に似たり――ハテナ、六郎とは何だらう。花の王は牡丹だつたね、すると、蓮が大臣級、まだ蕾で開かないから次官の格で、六郎かな。六曹衙門といふのがあつた。屹度、次官の意味だらう。

湖南の才人が恁らした解釋を加へてゐるうちに、方銘畫伯は、次のやうに書いてゐた。

六郎面粉白美少年之稱

○

エッ?美少年!?

みな、意外のおもひで顔見合はせながら、中には、カマクラ、ゴンゴラウ、カゲマサの事など思ひ出してる向もあるらしかつた。生憎とそこには千石街の兵古先生が居合はさなかつたので――。

○

と、方銘畫伯、笑顔もせずに、北京から伴つた美しい夫人の側で、書きつゞける。

日本人最忌蓮花、而私ノ蓮花售與日人者不下七十點以上

すると、湖南の才人、直ちに筆を執つて應酬した。

日本人、非忌蓮花、蓮花者慈悲之相、佛者所謂愛也、忌之者俗人之鄙俗而已

大いに蓮花の功德を讚仰して、日本人をみんな俗人にして了つた。方銘畫伯、さうした社交的辭令の交換なら一枚上である。曰く

日本人謂、梅、蘭、竹、菊四君子、而蓮爲君子獨不與群可爲蓮花恤之

までは、みな、覗き込んで、謹んで筆先を追ふ眼に默讀してゐたが、一轉

日人或因其面似六郎而不愛之乎、或默愛而不明愛之乎

――で、一同が、おもてを擧げるのと、笑ひを爆發させるのと同時だつた。洪きな笑ひが暫らくは息まなかつた。

【二】

◎世間ばなし

山口のぼる

○

京城在住の宣教師連が發起して動物愛護會といふものがつくられた。山縣俤三郎先生は、外人連と交游が廣いので、その會の肝入り役として、當日大に斡旋されたものだ。丁度その翌日、好伴侶があつたので、山縣さん一竿を肩にして、仁川へ鯊釣に行かうと、京城驛へ出るとバッタリ宣教師や、その夫人令孃などと正面衝突に及んだ。彼等はぬけ目はない。『山縣さん、あなたは愛護會員でございましたね』一劍サッとお突きを入れる。挨拶いたみ入つたものだ。が先生仲々へコマない『だが、親愛なる夫人よ、どうぞ御安心下さい仁川の海には、私の手並で釣りあげられるやうな魚は、一尾もゐません』これで、やつと急場を切りぬけたが、あとで氣がつくと兩方の脇の下には、萬斛の脂汗。

○

細井肇氏のところへ訪問して見ると、屏風も、掛け軸も、すべて氏の交游の範圍の人々の、手紙や封筒で貼られてある。富閣の人々もあれば、民間知名の實業家、文士、畫家、學者、女優、等、等、等。誰でもあッと目を瞠てる。細井さん曰く『斯うして置くと、御無沙汰をしない、思ひ出しては、つぎ〳〵に手紙を書くのでね』

○

南山町の片山病院長夫人は、讀書家として、有名な人である。小說や創作を讀む婦人は多いが、同夫人は科學書や、經濟書を好んで居られる。しかも大抵東京へ直接注文の、みつちり精讀したあとで『アナタも讀んでおくといゝわ』

位で、年利廻り二割若くは二割五

歩を徴へ、地主様々と尊敬せられ

めの惱みがある、哀れなる神經衰

弱の都會人よ、東京の眞ん中で朝

秋興

長谷川義雄

一

朝鮮は、東洋の樂園である、私は朝鮮に住んで居ることを、不仕合はせとも、惠まれざる生活だとも、何んとも思つて居ない。

二

私の家は、平壤の眞ん中にある坪數が四百五十坪で、園内には數十本の苹樹と桃と杏が植へられて居る、大審院檢事の宮崎九笑君から、去る頃句を予に寄せた。

樹を植へて子孫の計や王の春

サラ〳〵以てソウ言ふ次第ではない、土地は自分の住むとしては、餘りに廣過ぎるから、所望者があれば、何人にも讓り渡して好い、それ迄、空地として置くのも勿體ないから、樹を植へたのである、主人甚だ以て無精者で、何等樹の手入れもせぬが、年が立てば矢張り結實し、此の秋には珠玉の如き林檎が、累々として鈴なりに生つて居る。

累々として技もたわゝの林檎哉

句になつて居るか、どうかは知らぬが全く以て實況である。

三

朝鮮は農業國である、殊に米作地として知られて居る、汽車の窓から見ても沿線の米は、一粒萬倍豐作を物語つて居る、内地では工業の勃興と共に、勞資の爭議が絶へぬ、小作爭議も頗る深刻を加へて居る、ソコになると、朝鮮は樂天地である、一反歩、三百圓の土地もあるが、普通五十圓から百圓位で、年利廻り二割若くは二割五歩を數へ、地主樣々と尊敬せられて居る、經濟的に見ても、朝鮮の農業は、投資家に取りて、慥かに安全な地帶である。

四

衞生上から見た朝鮮は、極めて健康地である、私の友人は嘗つて臺灣に官遊し、二三年辛抱したので、稍々小金も蓄つた、イザ官を辭して歸らうと言ふ時に、マラリヤに罹り、蓄へた小金もスッカリ藥餌の料に代へられた、居ること二三年にして再たび罹病し、久しく病院の御厄介となつたので、數年の辛抱も水の泡と化し、終ひに意を決して朝鮮に轉住し、現に或官廳に奉職して居るが、其後は絶へて病氣した事なく、顏色もつや〳〵した健康體になつて居る、南船北馬は、男子の常で、必らずしも南と北とを撰ぶ必要もないが、日本人の健康は、熱帶よりも北進に適して居ることは、事實の證明する所である、刺すような冬の寒さは稍々身にしみ込む感もあるが高朗たる秋の天空は、何人も朝鮮の秋を讃美せずには居られまい、同じ明月ではあるが、朝鮮の月は内地よりも澄み切つた如何にもスッキリとした鮮かさだ、私はこれを捨てゝ、せゝつこましい焦燥な氣分に圍まれた、内地の都に歸らうとは、どうしても考へられない

五

金があつたら尙ほ更ら好いが、無くともサラ〳〵歸心は起らぬ、東京の人口六百萬と稱せられ、大阪も亦た都市の擴張により大々阪の人口東京と匹敵し、兩市の人口千二百萬、日本總人口の十分の一を占めて居る、ソコには血腥くさい生活の鬪爭があり、生きんが爲めの惱みがある、哀れなる神經衰弱の都會人よ、東京の眞ん中で朝鮮の松の葉を喰はねばならぬとは、何たる悲慘な生活ではあるまいか

六

平壤は牛肉、粟の産地である、地底に藏する六億の黑色ダイヤモンド、溶々たる大同江の水、牡丹臺の秋の眺め、食膳には名物のすき燒、食後には鎭南浦、黃州の林檎がある、明麗な風光地としても將た亦た將來に多望なる工業地としても、平壤は最も天惠に富んだ地である、私は朝鮮に住み、平壤に居を存して居ることを幸福だと思つて居る。

◈いろ〳〵帖

平田久雄

○

藤原秘書官も、ゴルフは熱心だが、小河秘書官も、それに二をかけた位には熱度は昂い。御兩所とも、暇があると、ステッキを逆に握つて、姿勢を正して、ヒュー、ヒュー、しかもそれがお役所の部屋の中だから、課員は棒を呑んだやうに眼を白黑。

○

この間上海に行つた菊田君が、御注文のゴルフ道具を買つて、歸ると、大喜び『うむ、これだ〳〵君ッ鬼に金棒ぢや……』

○

近ごろ南山麓に出來た、營林署のお大西口氏は、大邊な豪傑だといふ評がある。劍道五段といへば以て猛虎の尻ッぽをつかんでさかさに振る武勇傳中のお客樣だが、も一ッ敬意を表するのはその酒量一夜にしてよく一斗を平らげ『ウーイ、今夜の酒は、どうもおちつきが惡い！』

【四】

京城雜筆

柳橋

高久敏男

僕の郷里前橋の北部に神明町といふ屋敷町がある。それを横斷して流れる廣瀬川に昔から柳橋といふ長さ十間ばかりの木橋が架かつて居た。話は今から卅五六年前に遡る。多年の星霜に此橋の桁も欄干も大方朽ち果てゝ通行に堪へなくなつたが、町にはこれを改築する費用が無いのと、當時此橋は一般の交通上餘り重要でなかつたところから廢橋に決せられようとした。これが廢橋になつては言ふまでもなく神明町の一大事である。僕の家の屋敷が此橋の直ぐ側に在る關係もあつたからであらふ、僕の父は寄附金を募つて此橋の架け替へを爲すべく決心を固めた。川の向ふ岸の橋の側に屋敷を有つ某氏と申合せ、二人が發起人となつて架橋の許可を受け、寄附金の勸誘に廻つて兎も角も豫定額の約束が出來た。

工事が進みて工費を支拂ふ場合になつたが約束の寄附金が中々集まらない。此集金は父の命を受けて僕達兄弟がこれに當つて居た。學校から歸ると直ぐ領收書を持たされて日沒迄町内の各屋敷を廻るのである。一度で渡して呉れる家は甚だ罕れで、大概二三度行かなければならない。いろいろの事故を述べて四度も五度も足を運ばせる家もある。子供心に憤慨して父に對し集金の使を斷つたことも一再に止まらなかつた。其の時父は『橋を架けることは世の中の爲に善いことである、善いことの爲に働くお前達が其樣のことで挫折してはならない』といつも僕達を激勵するのである。勇を鼓して翌日又集金に廻る。

斯くて橋は竣工し、開通式も無事終了した。父が董其昌風の書體に揮毫して、親柱に刻り付けた柳橋の二字は胡粉の色白々と橋に一段の氣品を添へた。架橋の完成に父の滿足は言ふまでもないが、僕も亦爾來此橋に對する毎に僕達が苦心して集金した金で出來たことを回顧して、心中無量の快感を覺ゆるのである。

昨年の春である、父母の展墓を爲すべく郷里を訪ひ、數年振にて懷かしき柳橋を渡つて見た。橋下の清流は今も舊時と變らないが、橋は巾を廣げて、鐵筋混凝土の欄干を附けた堂々たる現代式のものに改造されて居る。そして大前橋建設の第一期計畫として市を南北に縱貫して敷設された新道が此橋上を通つて居るのである。自然附近の狀態が著しく變化して殆んど屋敷町の俤を止めない。此橋から以北一帶の地域は精糸工場が一層の隆昌を期待されて居る。其昔廢橋の運命から此橋を救ふた父は定めし同橋今日の發展を地下で喜んで居るであらふ。僕も亦僕達が苦心の集金に依つて架けられた此橋の出世を衷心より喜ばずには居られなかつた。

秋風抄

玉井小次郎

秋立つや纜か九尺の廻り椽
秋立つや大安賣の障子紙
立つ秋や綴る文さへ淋しかり
不孝せし親の石塔や今朝の秋
秋立つと知るや指輪の指の冷え

【四】◇ニセ札の話

吉田莊一

○或る晩、鮮銀の若殿原が、旭町の某料亭で、しづかに盃をあげてゐると、中年増の或美人が『旦那、ほんとですか、鮮銀では古いお札を、庭の隅で燒く、といふのは？』『それはほんとだとも、なんなら君に見せてもいゝ』と膝乘り出すと『まあ、もつたいないわね、私たちはそのお札のため、この年まで斯うやつて……』先生感慨無量の態。

○それを見た茶目のI氏『君、そこでな、その札を燒く時には、きつと何處かの坊さんに來て貰つて、札供養をする、札は罪の深いもんだからな』『まあ、旦那ほんとですか、へー、よかつたわね

○その後鮮銀では、これまで刷つてゐた、紙幣を、改めて内地で刷ることになり、お札の字面もいくらか變つた。或る時或る藝妓が『旦那、これほん物ですか』帶の間からつまみ出したのは、新しい内地での刷出紙幣。からかふつもりで『イヤ、これはニセだとも、それこゝん所が違ふ』――すると『A子ちやん、まあ呆れたし、あのお札ニセだんがな！』といふ騷ぎ。

○それはよかつたが、翌朝十一時頃になると、美人國三名。恭々しくI氏を銀行に訪うて『あたし達の貰つた中に、こんなにニセがありました、えら御手數かけまつけど、ついでにどうぞ燒いておくなはれ』風呂敷一包みを提出の、さつさと、引上げてしまつたので『サア、困つた、君とんだことが出來たぞ』暫くの間風呂敷は諸員評定のまん中に『どうする〳〵』

つけてゐれば帶止めも眞物と見ら　さい事件のために、三圓五十錢を

すゞきもんどの奇遇

——おぼえ書き——

川上喜久子

その夜彼女は無暗に樂しかつた。『永雨が降り』、『木枯が吹いてゐる』彼女の心にこんな明るさが訪れることは三年に一度位しかない。だから彼女は自分の心を不審に思ふことによつて、久振の明るさを失ふのを非常に恐れた。知人の急病を見舞つての歸るさである。町は晝のやうに白かつた。

彼女は呉服屋と小間物屋には滅多に用がなかつた。それらの店に這入ることは何だか自分にふさはしくないやうに思はれてひどく氣がひけてならないのであつた。しかしその夜は珍らしく氣まぐれ心が動いて或大きな小間物店に這入つてしまつた。氣まぐれはそればかりではない、彼女はそこの硝子箱の中の、燦然と耀いたすばらしいダイヤ?を塡めた帶止を購つたのである。價は三圓五十錢也。店員の勸めるまゝに帶に締めながら彼女はふと、彼女の夫がいつか

『お前のその指輪はダイヤモンドぢやあなくてスヾキモンドだらう』

といつてからかつたことを思ひ出した、僞ダイヤがスヾキモンドなら將にこの石はスヾキモンドに違ひない——だが、何とこのスヾキモンドはわか指のダイヤモンドと聊かの遜色もなく光ることだらう！外に出ながら彼女は何だか面白くなつた。この指輪と一緒に身につけてゐれば帶止めも眞物と見られるかもしれない。しかし萬一この帶止めを見破つた人が見たら忽ち指輪のダイヤまでスヾキモンドだらうと輕蔑するかもしれない。

かゝることは稀有の話ではないさうすれば彼女の心は自分の俗惡な趣味に對する憎惡で滿されるであらう事はわかりきつてゐる。電車に乘るとすつかり忘れてしまつた。空想が空想を生み、いつしか色濃い空想の世界に頭を突込んでゐた。さうしてゐるうちに彼女は正面に腰掛けてゐる支那人の樣な男がぢつと自分の帶止に目を注いでゐるのを發見した。その目は明かに驚異に輝いてゐる。彼女は滑稽な得意を感じたが氣にも止めず再び空想の中に溶け込んでいつた目覺めつゝ見てゐた夢をそつと抱いた儘電車を降りて、やゝ暗い廣い道路を横ぎりながら、ふと彼女はすぐ後に人の足音を感じた。振りかへる間もなくその人は小さい孤を描いて素早く彼女の前に辷り出た、そして殆ど哀願するやうな調子で彼女の帶止を指しながらわけの判らない言葉をのべたてた。

『この石を呉れつていつてるんだな』

彼女は躊躇なしに帶止めを外づして彼に與へた、黑い影は忽ち夜に沒してしまつた。極めて早い瞬間の出來事だつた、かの善良さうな電車の中の男だと思つたゝめか人一倍臆病な彼女でありながら心には一片の恐怖も殘らなかつた。

彼は、表面無聊な彼女のために『おちよつかい』を出したいたづらつ子の手のやうなものである、彼女の好奇心は種々な方面にのびた。探偵小說にもならないこの小さい事件のために、三圓五十錢を空費したかと思ふと可笑しくて可笑しくてたまらなかつた。

大空は無數のスヾキモンドを塡めた緞子のやうに無氣味に大きく搖らいでゐる。

◈うわさ雜記

吉田莊一

○京城醫師會の若手組では、斯う野球が流行つては、我々とても默つてスツ込んでゐる譯にも行くまいと、今本、一番ヶ瀬、渡邊（完治氏）といつたやうな所が音唱者となり、誰も來い、彼も引つ込めと、忽ちの間に立派な一團をつくりあげた。

○その顧問といふ顏觸れを見ると、渡邊晋博士、和田ドクトル、植村博士といふ中老組、毎朝六時といふ夜の引あけに、全員櫻井校へ集れ！の一令の下に、或は尻ツピリ腰で、或は娃股をウツとふん張つての勉强振り、近來大分ほん物らしくなつた、と大喜び。そのまた假裝敵といふのが赤十字病院總督府醫院といつたやうな藥臭いところ、櫻井校の先生達見物し乍ら曰く『イヨウ、しつかり〳〵』

○この秋の漢江の競馬に、一日も缺がさず見物にやつて來た仁川の大平、桑野兩氏、いづれも通者と見へ、四回が四回ともみんごと大當り、ふところをぶく〳〵させ乍ら『サア、お互の鑑馬力のために大に祝福しやう！』『ウ、御尤も！』南山町あたりへ祝杯あげに行つたはいゝが、何んでも儲けの十層倍の散財をしてしまひ『要するに、こんなものかな』兩公顏を見合せて……。

團栗

佐々木正太

夕食の膳に、秋之助と云ふ尋常三年の七男が見當らないので、どふしたのかと妻に問ふた。その答へに、秋坊は今日學校から歸ると直ぐ、お母さま、友達といつしよに新村に往くから、錢を三十錢頂戴よ、ネー往つてもいゝでしやふと云ふので、少さい子供連が、附添人もないのに、遠足をするのはよくないから、およしなさいと云つた。秋坊は不承知らしい、そふして曖昧な態度で、其の儘どこかに出懸けて仕舞つた切り、今に歸りませぬ。錢は渡してないから、もし新村に往つたとすれば、歩いたに相違ない。それとも、友達のうちに栗脚を持つてゐる者がゐて汽車に乘つたかもしれない。何でも、團栗を拾いに行きたいのでした。皆が飯をすまし、八時が來てもまだ歸つてきそふにもない。さあ、どふしたのか、不安が募つてきた。心配に堪へない。評議の上、秋坊と日頃懇意らしい友達の家に、電話を掛けてみると、宅の子供は今茲にゐるといふ返事なので、力を落す事甚だしい。どふしたらよいか、殆んど窮した。別に仕方がないから、新村驛に電話を掛けてみやふ。ヒョットすると、何かの消息を獲るかもしれない。まるで、雲を摑むやふな心地で、問い合せてみた。どんな返事があるのかと聞いてみると、コハソモ如何に！其の人は此所に居ると云ふ。どふも、一度聞いただけでは電話のことでもあり、安心ができない。更に、も一度確かめてみると、正しく秋之助は無事に其所にゐた。何と云ふ幸運なことであつたろふ。實に感謝の至りである。妻はたまり兼ねたか、秋坊を電話口に呼び寄せ、秋さん、お前は夕飯を喫べたかとやつた。無論、夕食なら濟してゐる筈もない。驛長の親切に依つて、一行五人連の子供は、乘車賃著拂の取扱を受け、京城驛迄送り届けらるゝことに成つてゐた。是れより先き、驛から各自の家に、情報を告げやふとしたが、電話はお話中なので、問合の方が先になつたといふことである。京城驛に出迎へた、イヤ子供を受取りに駈け付けた保護者の人々は、申し合せたやふに、皆五人分宛の賃錢を拂はふとした。

秋坊は、兄等に連れられて、九時半頃、無事に歸つて來た。母の命に背いて、多くの人に迷惑をかけたといふ弱點があるので、たとひ身心は疲勞してゐても、いつものやふに甘へることが出來ない。彼は眞面目な態度を執つてゐる母の顏を、盜むやふな目付で、だまつたまゝ、二度ほど見たのが、其挨拶であつた。彼は遂に空腹を訴へた。さもうまそふに夕食ならぬ夜食をたべた。此度は入浴を希望した。湯からあがるや否や寢床に就いた。後で聞いてみると、友達と約束をしてゐたから、遠足を見合はすわけに行かなかつた。錢がないから、ボツ〳〵歩いて新村に向つた。途すがら、團栗を採りつゝ進んだが、別れ道のところで、左方に往くべきのを誤つて右方に出た。どんなに歩いても、新村らしい處には到達しない。そふこふしてゐるうちに、日は暮れ、寒さ〻感じてきた。五人連れの小學生も、少し薄氣味がわるくなつて泣き出さんばかりであつた。頂度其のとき、左手に當つて、電燈の輝くのが目に著いた。あれは新村驛ではあるまいか、錢は持たないが、あれが幸に驛だつたら、何とかなるだろふと云ふので、急いで往つたら、果してさふであつたと云ふ。

その翌朝、枕邊近く、獨樂を廻すやふな音に、目を醒して見ると秋坊は昨日の團栗に、爪楊枝を穿き刺して遊んでゐるのであつた。

◈回顧四十年

吉田莊一

○前號の久松前平氏の『鄕士自慢』を讀んだ釜日社長芥川氏『實に感慨無量である』とて、下のやうな話をした。

○自分は熊本の出身で、明治十五六年頃東京に行くには、長崎縣西彼杵郡黑崎村（卽ち久松氏の鄕里）から汽船に乘つたもので、從つて篇中の宣教師ドローといふ先生も、自分はよく知つてゐる。否だん〴〵懇意になつて彼の宅にも再三泊まつたことがある。

○孤兒を養育し、農業部、販賣部などを作つて盛んにやつてゐた

○ドローは、佛國革命に遭遇し母國を脫れて日本に來た男で、自分は彼からしみ〴〵革命の慘禍といふ奴を話して聞かされたことがある。

○右は實に、明治十七八年ごろ今を去る四十有餘年の昔、今はからず久松君の鄕士自慢を讀んで、ありし昔を憶ひ起し、感慨油然、禁ずる事を得ない『どうぞ筆者によろしく傳へてもらいたい』と。

く、正しく其心の動搖を示すもの　視する瞳は眞剣な一瞬を持つ。正

瞳

野崎眞三

艶やかな皮膚、黒く長い睫毛、可憐な二重瞼の奥に輝く晴やかな瞳、寶玉のやうな瞳は美しい。乾き切つた皮膚、タルミ歪んだ瞼、ドス黒く濁つた瞳、瞳孔が擴大した瞳は傷はしい。

人々、イロ〳〵の瞳ほど興味深いものはない。瞳を凝視する事が私の性癖であり私の遊戯である。ドンなに平和であり平靜を裝つてゐても其内奥に閃めく心の動搖は其瞳に現はれずには居ない、貪慾淫蕩、悲痛、哀愁、歡喜、祝福と一瞬毎の心持がホンの輕い閃きでも瞳の色に現はれずに居ない。

瞳は人間のバロメーターである恐ろしくも悲しい浮世の種々相を映す瞳は又、雜音が錯雜する大交響樂の旋律をも現はす、瞳を通して網膜に映る線、形、色、光悉べてが瞳の藝術であり瞳の遊戯である。私の瞳は夜も晝も瞳を凝視し瞳の遊戯の中に、限りない快樂を樂しんでゐる。

武士道的精神のギゴチな教養を强られた日本人は、喜怒哀樂を率直に姿態に現はす事を禁ぜられて來た。此憶病な瞳は其心境をチッとでも表現しない事を正しいのだと信じてゐる。絶對に現はすまいと努めてゐる。にも係らず瞳の色は鋭敏な感光板の如く、ホンの輕いトキメキも響の聲に應ずるが如く、正しく其心の動搖を示すものである。表現、表情では非常に臆病な日本人だが、瞳だけはヨリ臆病でなく、其心境が無意識の中に去來する。私は此瞳を凝視する。

私の前後左右には無數の瞳がある、私は貪るやうに瞳を凝視し續けてゐる。此性癖を或人は無作法な然かも無禮な癖で非紳士的だと非難する。全く無作法で非紳士的な行爲かも知れないが、何と云はれても瞳の凝視は、私の唯一の愉樂である。瞳を通して網膜に映る魂の印畫は、限りない美の世界を哺くみ、藝術の世界を果しなく擴げて呉れる。或人が酒に親しむやうに、更に他の或人が戀に醉痴れるやうに、私は永久瞳の凝視を續けてゐる。男性の瞳より女性の瞳がヨリ私の心を捉へる。異性の瞳を覗き込む私は一種の戀態性慾者なのかも知れない、然し女の瞳は更に興深い、凝視するなら若い女の瞳に限る。デモ瞳を凝視する事が私の生きる途なのだから。

瞳の遊戯——戀態行爲とさへ非難される——私の性癖は、朝起ると子供達と妻の瞳から始まる、戸外を通る物賣、朝の街々を織るが如き行人、電車の乘客、通勤のモーダンガール、等、等、等。私の瞳に映る瞳は悉べて瞳の遊戯の相手である。遊戯の第一歩は正視である、幾分か眼球と眼瞼に力を入れて相手方を正視凝視する、此正視を以つて相手の心奥に挑みかゝるのである。ダーウキンの說く進化論に依ると、人間の祖先である猿——動物同志が向ひ合つた時、威嚇、猜疑、脅迫と瞳と姿態で相手を脅かしたと等しく、相互の正視する瞳は眞劍な一瞬を持つ。正視に堪へ得ないで瞳を伏せた者が尻尾を捲いて逃げるのである。私の正視から瞳を外らす人が多い、瞳を伏せたり瞳を外らしたりする人に對し、私の瞳は猶ジッと正視を續けつゝ、私は油然と湧く征服の快感、勝者の愉悅を感じてゐるのである。正視に堪へず座を起つたり視界から避けて行く哀れな後姿に私の心は躍り上がる。征服の愉悅——動物の昔からなる大き喜びがトキめくのである。

瞳の遊戯、征服の愉悅に次いで叛逆の快感である。一度正視の瞳から伏せる、伏せた瞳を次の瞬間から身動きもせぬ正視の幾秒幾分を續けた叛逆の快感は更に云ひ知れぬものである。之が更に、千古謎の如き青春の異性の瞳となると複雜した愉悅が身内に搖ぐ。瞳の遊戯は快いものである。

◈芝居道の話

平田久雄

○前田昇少將のお邸を訪ふと、その庭園の清雅なこと、その樹石の珍奇なこと、以て少將の高懷を窺ふことが出來るが、少將には今一ツ人の知らない道樂がある。

○それは、刀劍ではない、芝居だ——そも〳〵少將は、身いやしくも軍刀を帶する人だが、小中尉時代から大の芝居道樂——田口さんぢやないが、牛肉をばくづく金を節し〳〵、市村や木挽町と、そーつと覗いては流飲を下げたものだから斯道では通中の通人で、そのまた誰れの型は斯う、誰れのセリフは斯うと、記憶のたしかなこと、驚くべし。

ロイド眼鏡

薄田美朝

六年振りで秋田の田舎に歸つて驚いたことの一つはロイド眼鏡が普及してゐることである。草苅る翁も盆踊りする若者も、老眼も近眼も伊達も皆ロイド眼鏡でなければ夜もあけぬと云ふ流行振りである。流行と云ふものはさすがにすさまじいものだと感じさせられた

私が始めてロイド眼鏡をみたのは大正六年二度目に東京に出た時である。この時省線電車の中で早稲田の野球の選手が鼈甲ぶちの丸い大きいやつをしてゐるのを見た田舎者の私は危險なる競技だけに眼の保護の爲めに掛けてゐるのだと思つたが、それにしても顔一面眼鏡を掛ける物好きもあるものだと感心してみとれたものである。

春風秋雨十年の歳月が流れた、私も自分の金で飯を食はねばならぬ身分となつた。一日悪友が來て頻りに私の記念に貰つた秘藏の金縁眼鏡をこきおろす。總督府中で君の様な眼鏡をかけてゐるのは誰と誰と君と三人であると云ふ。私もとんだところで天下の三勇士にされたものである。流行がなんだなんて頑張らないで、鼈甲縁を買ひ給へ、僕が周旋してやる（この友人の家は眼鏡屋ではあるが）と云つて到々永い間私の體の一部分を構成しておつた……考へ様によつては小なる我であつた記念の眼鏡と別れることを餘儀なくさせられた。

私は最初の間はまだ金縁に未練をもつてゐたが、六年振りの歸省でこの執着は槿花一朝の夢？と消えてしまつた。

佐藤春夫氏の云ふところに依ると、ロイド眼鏡が歐羅巴に流行したのは、支那の李鴻章が歐洲に掛けて行つたのを向ふの風變りな伊達者が眞似たのがそも〳〵の始まりで、最近の流行は活動俳優からであるとのことである。流行と云ふものは怖ろしいものである、無條件で総てを征服して行くものである。ロイド眼鏡にしても普通の眼鏡にしてもとりたてゝの差異はない。唯ロイドの方は玉がやゝ大きい位が取柄であらうが、さりとて考へ様によつて顔と調和のとれない不恰好な鼈甲縁を、如何に流行とは云へ掛けねばならぬとは何んと云つても不可思議なことに相違ない。

後世の人は吾々の寫眞をみたら定めて其の物好きである現代人の愚を笑ふであらうと思ふ。ひとり眼鏡ばかりではない、形而上のいろ〳〵の問題でも同じ様なことが澤山あると思ふ。私は永い友人であつた金縁と別れて新しい流行の寵兒を迎えて益々この感を深くする。そして唯流行と云ふ以外に特別の理由もなくして永い友人と別れねばならない自分の愚を想ふて淺ましい氣持にさへなる。

【八】

◇高商たより

平田久雄

○

英語の横山先生は、小男だが、ぞん外痛快な先生である。或る時生徒に向て、諸君は保險に這入り給へといふ。どうしてですかと反問すると、マジメ臭つての曰くに僕が保險に這入つたとする。そして死んだと假定して見給へ。細君は受取つた保險金で、僕よりももつと若い、もつと好い男に嫁入出來る。亦女房が死んだとすると、僕はもつとキレイなもつと亭主思ひの、若いのを迎へることが出來る。これは冗談だが、子供などがあると、どうしてもヨリ多く保險に這入つてゐる方が良いよ、アハハ……。長く外國にゐた人で、苦學しただけ人間が出來てゐる。生徒の氣受けも良いのである。

○

近ごろ、人間の變つたのは、柴山先生である。經濟を受持つてゐるが、夏などは上衣を脱ぎ、ワイシャツ一つで、教壇の上にどつかと腰をかけ、講義を浪花節張りでやり、ヤンヤと滿堂を唸らせたものだが、この一二年は謹直そのものゝやうに一變した。訊いて見ると『君、例の震災で、僕の人生觀もすつかり變つたヨ』

○

運動部長は、三好先生がやつてゐる。昔テニス選手であつたといふだけ、今尚ほあざやかなもの。但しもつと〳〵運動に力を入れて欲しいといふ要求もある。

○

法律、取引を受持つてゐる兼安先生、一寸氣むつかしさうだが、膝を接して話して見ると、一等人間味が豐富で、生徒間では隱然信望がある。

○

鈴木校長は、數學では天才だ。高等數學は勿論、算盤もうまいし、特に胸算はズバ抜けたもんだ。

戰からオミツトの姿となり、中村か元山に奪はるゝか更に異常な期

全鮮爭覇 ゴルフ戰

高島種夫

全鮮ゴルフアーの血を湧き立せた全鮮ゴルフ選手權大會は、昌德宮殿下御下賜の選手權把持者への優美な李花型大カップの爭奪となつて一層緊張味を漂はせるに至つたが。

その榮ある爭覇戰は十月三日半島特有のコバルト色に澄み切つた秋空の下、清涼里リンクで午前九時戰の幕は切つて落されたのであつた。

參加選手は大邱から强豪成安、河井父子、大橋、衞藤、張の諸氏元山からは小林、鳥居、馮濱、三宅の各猛者、それに京城のメンバー三十餘名、その何れもが天晴れ選手權カップの把持者たるべく衝天の意氣で、晩秋の肌寒い朝をつどひ、朝露繁き各コースを縫ふては林間に谺する快よい響を立てゝ競技は漸を追ふて進められた。が前日來練習に餘念のなかつた全鮮に强豪を謳はれて居る大邱の成安小河井兩君は愈々熟達した技は益々冴えて七十臺、八十といふ素破らしいスコアーを出したので當日の爭は結局京城の兩將中村（寅）武者對成安小河井の爭ひで、京城側では相當の脅威をも感じて居たのであつたが、當日の出來榮えは結局技の違いか天佑であつたか、午前の成績は中村（寅）八十一、小河井八十五、成安八十九、武者八十七といふスコアーで、元山の小林さんは前夜の不謹愼が祟つて百一といふ慘めな結果で、カップ戰からオミットの姿となり、中村（寅）小河井の兩者が鎬を削る事となつたが、熱し切つた兩者の面上、それに一方ハンデキャップ付で一等から十等迄の賞があるといふので、參加者約五十名の眉宇の間一抹必勝の凄味が流れて、揮らるゝクラブには血の出る程の物凄さがあり、殊に元山、大邱の遠征者には更にも燃えさかるやうな凄さがほの見えたやうであつた。

併し午後五時半さしもに物凄かつた戰の幕は閉ぢられて、リンクのそこゝ秋草を渡る微風につれて唧く蟲の音、暮靄松林の裾を繞る頃には勝敗の數は遂に決せられて戰士の面上には一種の倦怠と微笑と、凄慘悲痛な色とがスコアー掲示紙に刻々記入さるゝ各選手の成績を讀め入つては漂ふ。其の結果全鮮選手權カップは百六十二點で中村寅之助氏が把持する事となり、ハンデキャップ付成績では一等王世子殿下カップ以下

一等　篠田治策
二等　岡崎哲郎
三等　伊藤
四等　渡邊豐日子
五等　中村寅之助
六等　守屋德夫
七等　中村誠
八等　高島種夫
九等　川上十郎
十等　武者練三

といふ成績で、入賞候補であつた松本伊織君、平岡、三品、矢島、花園、飯塚、中屋の各氏が案外の不成績であつた事並に遠征者が一名も入賞しなかつた事は結局はコースに不慣れの爲めであつたか頗る遺憾であつたが、此の結果選手權カップは一年京城に止めらるゝ事になつた。但し明年大邱に行くか元山に奪はるゝか更に異常な期待を以て迎えらるゝに至るであらふと同時に、その紳士的立派な戰の跡を見て感慨無量のものがあるのである。

此の他此の熟した競爭中綽々としてビールがけをやつた二等の岡崎さん、元山組の前夜の愉快筋など、蓋し云はぬが華。

◇無駄ばなし

吉田莊一

○

中央電話局長の部屋は、場所もあらうに、同局の便所の近くにある。そこで、訪問すると、どんな豪傑でも、ハンカチで半面（實は鼻先）を掩ひつゝ、用談をする。それを見てとつた保阪局長、いつの間にか部室を表の方へ變へる。そこで最近訪問する連中『ふむ、よくなりました、局長これならあんたも當分つゞきます』聞く所によると、臭氣關係からだらう、前の局長は年中神經を尖らして、ガミ〳〵やつたものださうな。

○

法務局の土居さんは、折々刀劍會に顏を出すが、この人の刀劍蒐集法が面白い。相州上作とか、古備前諸作とかいふものは、我々貧乏人の野心を起すべきシロ物ではない。で、自分は豐後の出身だから、鄕黨の名匠の作を、集めたい——つまり高田物の各時代、各流派の代表作を、一通りそろへて見たい。今日刀劍家といへば、高田物などに目をつけるものは、一人もない。隨つて蒐集もし易い。もし理想通りにあつまつたら、位は低くとも、以て刀劍研究家に、多少の貢獻をなし得るだらうと、蓋し一見識である。

京城雜筆

芝居

——今昔思ひ出話——

前田昇

近來兎角旅行勝ちの爲め久敷誌上へ御無沙汰になりました。此頃ホテルで松本さんに御目に懸つて、何か東京土産があるだらふと、一本打ち込まれたが、サー全く無いでもないが、イッモ〳〵旅先の拾ひもの許りのやうで少し氣がさすから今度は方面を代へて少し芝居の事を書いて見やうと思ふ。ト云つた所で何も僕が文士でもなければ通人でもない。從つて敢て現代の劇通の書くやうな八ヶましい劇評や高遠な理想や或は劇の將來と云つたやうなそんな大それた謀反氣を出して徒らに諸君を苦しめはしない。唯現在の若い人達に三四十年前の東京に於ける芝居の模樣を御紹介するまでだ。尤も是れとても何も參考書一册辿る譯でもなく考證的な事を書くのでもない。ホンの記憶を辿る丈のことで自然間違や偏見もあると思ふ。お氣附があつたら御叱正を願ふ。

以前の劇場には嚴然たる資格があつて此有資格劇場を大歌舞伎と唱へ、夫れ以外には歌舞伎としては絶對に認めなかつた。それ故如何なる立派な劇場を建てゝも歌舞伎として認められず、又俳優も一流所は無論の事、名題下でも一旦歌舞伎以外の座に出演した時には直ちに破門される。如此劇場と俳優と共に嚴然と資格が岐かたれて在つて侵すことが出來なかつた。

元祿以前江戸の劇場常設地であつた堺町、葺屋町、木挽町が天保年間に淺草の猿若町に移轉を命ぜられ、爾來所謂三座全盛時代の事は知らう筈もないが、明治廿年頃までは今の市村座が唯一軒猿若町に殘つて居て、在りし昔の俤を偲ばしめて居た。其頃迄に歌舞伎として東京に在つたものは能くは記憶して居ないが、淺草の鳥越に中村座後に鳥越座となつたもの、其他に新富座や今の明治座の前身である中嶋座及び本郷座の前身たる春木座等の外本所の壽座、四ッ谷の桐座など云ふのがあつた。桐座は其頃頗る貧弱で女優や極低級の俳優が出演して居たから歌舞伎としては餘り世間の人から知られて居ないが、資格は確なものであつた。今の歌舞伎座の出來たのは稍々後の明治廿二三年と記憶する。

小劇場即ち無資格劇場は澤山あつた、其の二三を擧げると、神田の三崎町に三崎座（當地唯一の女優劇場）芝に森本座、赤坂に演伎座、牛込に赤城座、淺草の公園裏に今の宮戸座の前身である吾妻座や、六區に常盤座あり、中洲に眞砂座があり、下谷の二長町にも今鳥渡忘れたが、有名な小劇場があつた。

座に資格があると同時に、俳優の出場以外種々な制限があつた。即ち小劇場に許されなかつたものに第一櫓、第二引幕、第三花道、第四廻り舞臺等がある。

櫓は今日では一般に廢されたが以前は本歌舞伎即ち有資格座には必ず木戸の眞上に櫓を上げ、座の定紋を染め拔いた幕を張つたものだ。今でも劇場の附近を櫓下と云ふ稱呼が殘つて居る所がある。關西地方では今に此櫓を見受ける。

引幕は今日は一般に用ひて居るが、資格の八釜しかつた當時は歌舞伎以外絶對に許さなかつた。そこで小劇場では不得已所謂緞張を用ひた。彼の緞張役者の稱呼は勿論是れから起つた。所が今日では歌舞伎座や帝劇は勿論其の他でも最上等の幕で刺繍等を施したものは多く緞張式である。保存上から來たものであらうが妙なものだ。此の引幕の制限は鳥渡した氣分丈けのもので實演上大した支障もないが、次の花道の制限は實に酷なものであつた。

花道を附けないから無據花道の附け際から三角形に短い通路を辿り此處から出入りした。能に橋掛りの無いと同樣で是れ丈は詰まらぬ無理な制限をしたのであつた。夫れだから當時小劇場では自然狂言の範圍を狹まれた形ちとなり、行り度も出來ない狂言が幾らもあつた。例へば鞘當、忠臣藏の城渡し、先代萩の床下等は全く駄目だ夫ればかりではない、如何なる狂言でも花道の七三で多少の科白はある、是れが凡べて零と來ては其間の拔ける事一通りでは無かつた況んや幕外の引込など香ひも嗅げない譯だ。

廻り舞臺も引幕同樣實演上には大した支障も無く贅澤な半廻しとか蜷の目などは無くても濟む、其の他淺黄を落すなり道具を左右に引き割るなり適當に間に合はしたものだ。

其後何時とはなしに此資格問題は凡べて撤廢されて全く自由平等となつた。

總して文化の進歩に連れ何物も異常の發達を遂げたが、劇場なども隨分各方面に進歩した。今日から三十年前を顧みれば可也今昔の感に堪へないものがある、一般にられない情弊殊に變挺な門閥制や

◇小宮翁の事

感に堪へないものがある、一般に進歩と云ふよりも警澤になつた方が多い、實質の進歩は其の割合に尠いやうだ、畢竟彼の製園社界と云ふやうな特種の圈内には他に見られない情弊殊に變挺な門閥制や守舊弊やが動もすれば諸般の進歩を阻害する。オツト意見や理屈は言はぬ筈。モー少し昔話を書くとしやう（未完）

新聞閑話

長華汀

○

總督府廳舍落成式には、京城を中心として、地方の新聞社長も、大樞集つた。此れを機會に、京城の新聞、雜誌幹部の人々と握手しようと、芥川及予から申込むと、牧山、釋尾の二君が直ちに快諾し二君が世話役を務め、その夜咲良喜に集つた。此際文壇人の消息を叙するのも、亦た何かの參考とならうと思ふから、同人の最近消息を書くことゝする。

○

牧山君は、新聞記者としてよりも、最早政治家としての名の方が早分りするようになつた。最近筆は餘り執らぬようだが、その代り演說、座談頗る妙境に達して居る體軀は例によつて壯貫餘、力士としても引けを取らぬ體格である。

櫻藤、竹田津の兩君を左右翼とし社の第一線に起つて、朝鮮新聞の發展向上を圖つて居る。君は黨の代議士會會長と言ふ重要の職にあるが、政界の雲行き未だ急ならずと見へ、暫らく羽翼を朝鮮に收めて居る。

○

櫻藤君は、李王宮秘史の新著が好評嘖々で、頗る悦に入つて居る已に二版を重ぬる事となつたので懷具合も暖かくなつたさうで、八方から奢れ〳〵と肉薄せられ、内心嬉しいやら迷惑やら、複雜した心理狀態である。

○

元毎の西田君は、道評議員やら各會社の重役やらで、近頃、君一流の暢達した達意の文を見ぬのは遺憾である。その代り、懷具合が好いと云ふので、此れも奢れ〳〵と言はれる側で、君とても滿更らわるい氣持もしまい。

○

釜山日報の芥川君は、老來益々意氣旺んである。數月間溫泉に入湯し、藥餌に親んで居つたので、骨と皮ばかりの梅干爺さんの樣だらうと思つて居ると、入れ齒を通じて現れる君の熊本辯丸出しの辯舌は、滿腹悉く文章報國で、老志士の面目、例によつて躍如として居る。こう云ふ枯稿した肉體の中に、あゝいふ氣魂のつゝまれてゐるのは、實に不思議な氣持がする

○

入城した鮮内の新聞社長の分布狀態を見ると、熊本の人が多い、先づ當夜の會合中でも芥川釜日、宮部京日、吉川電通、松波全北、畑本咸南及西鮮の予を合はせ、熊本が三分の一以上を占めて居る。殊に宮部京日副社長の如きは、獨り文章に練達なばかりでなく、最も經營の才に長じ、大世帶の京日社を一人で切り廻はして餘裕綽々たる處は、熊本人の短所を長所として多量に所有して居る。

◇小宮翁の事

平田久雄

○

歷代の李王職次官中でも、小宮篠田と來たら、出色の人物である共に超邁の風格があり、共に一代の學殖である。あゝいふ所に据えるには、鳥渡すげ替へのない好箇のハマリ役である。

○

小宮さんは、今尙老健で、湘南の風光明媚の地に、悠々硯池に親しんでゐる。今では全くの閑雲野鶴で、何の野心、何の俗望もないが、書物は盛んに耽讀してゐる。折々詩を作るが、それは當地の舊知に、繪葉書でもつて示される。

○

この小宮さんには、一種の風骨があり、鳥渡他人の眞似の出來ないハナレ業をやつたものである。盆暮にはいろ〳〵の贈り物が玄關に届く。先生辭退せずに何んでも納める。贈つた側では、ホク〳〵ものでゐると、いよ〳〵官を辭し京城を去るといふ時、十餘臺の車馬で、これまで貰つた贈物——立派な机とか書棚とか、掛軸、骨董品——といつたようなものを、それ〳〵の贈り主へ、一つ殘らず御返しの、その翌朝『さらば〳〵』……凡百のおべつか連、口あんぐりであつたとは、少々罪が深い。

○

しかも、小宮氏の隱接の次の部屋へ行つて見ると、その貰つた品々へ、いち〳〵何年何月何日、誰々氏より届けらると、ビラが貼つてあつて、貰つた刹那から返附すべき運命を、いち〳〵指定してあつた。彼はこんな廉吏であつたのである。

京城雜筆

金屏風

瀬戸潔

○

A『此屏風はボロ〳〵だが金ピカが大部多いから金が可なりあると思ふが』

B『金は本金かな?』

A『之は昔物だし出處が出處だから本金は間違なしよ』

B『乃公長年の念願——金指環をこれで造るかな。一體何ぼなんだ』

A『貳拾兩!』

B『大前貳拾兩!、貳拾兩は高いな』

A『五十圓と云ふ奴を貳拾圓迄値切つたが、乃公獨りでは二十圓の都合がつかないので考へてた處だ、どうだ二人で十圓宛奮發して見ようじやないか、屹度儲かるよ』

B『金の指環——太いのが造れる程金がとれる見込があるか』

A『こんなに金がついてるのだから大部金がとれると思ふがな——マア買ふて見ようよ』

B『宜しい買ふよ』

A『買ふなら拾圓出せ——貳拾兩惜しいな』

○

之は三十年前の事實——今は時めく某市の兩ミリオネルの先代。當時は兩人ともタヽキ大工。品物は德川將軍家より某朝廷に贈られた稀代の名匠の作になる金屏風。

○

此兩人は繪など眼中にない事勿論である。此買取られた屏風は風の當らない樣な裏店の裏庭の隅で入念に二人の監視の下に焚かれた後で二人は其灰の内から目に付く限りの金の粒を拾ふて目方を量ると八匁目餘あつた。Bは雀踊りして喜んだ。直に四匁目の金無地の指環を造つた。Aは四匁餘の金を貳拾圓で賣つた。

荒木先生

田村直一

京畿道巡査教習所の劍道教師に荒木榮三先生と云ふ老師がある。

此先生少々變り物の方で最早六十になつて居ながら決して年を取つたと云はない、人より少々早生れであると申す、頭の毛などは未だ生え揃はないのだとのこと。

先生は曾つて試合に負けた事がないそうな、それかあらぬか同所には大智美、小泉等の五段や敎士を、筆頭に剛の者が、一樣に先生〳〵と敬つて居る。

先生は荒木文右衞門の後裔だと云ふ評判だ、其流儀は『本心一刀流』で現在の講道館や武德館の高段こそ持つて居ないが、免許皆傳の腕前、今の四段や五段には匹敵するであらう。

お面つと參ると頭がワンと鳴つて忽ち眼がくらみ、お籠手つと參らうものなら手先はしびれて竹刀はがらりと落ちる。但しそれは先生の著書武道大鑑の中に『この時籠手はしびれると云ふ』ことが記述してある。

先生仲々剛情で偶々擊劍に負けても俺は擊劍は下手だ、劍術なれば知つてゐると濟ましてご座る、幾らドヤされるも決して參つたなど卑怯なことは申されないそうだ。

そしてよく居合をやる、風を切つて白刃の飛ぶ勢、細首や疲胴の二つや三つカッ飛ぶに相違ない、一寸若手には眞似の出來ないところがある、又書を能くする。此の外、忍術に遠當の氣合と、物凄いものがある。けれどもこれは近頃物騷千萬な藝當とあつて、メッタに公開されぬ。筆者も不幸にして未だ拜見してゐない。

忍術に遠當の氣合、これは高等警察係や司法刑事に傳授したならば好いと思ふ。思想團體の密議の席にパッと現れてスッと消えてなくなり兇漢の逮捕や追跡に遠くの方から『ヤッ!』とやつて置いてシャチコ張つて居る奴を御用ッと來れば何の雜作もない、ピストルも爆彈も物の役には立たない。

先生今二三十年ばかり遲生れであつたなれば、今頃は南山の頂上邊で天狗飛切りの術でも研究される事であらうが、惜しい哉少々早生れの關係で、餘り亂暴な放れ業は近來止めて居られる。

然しながら尙綽々として血氣な敎習生に稽古をつける。遲生れの連中を捉へて怪氣焔を吐くあたり麒麟は老いても駑馬ではない。

◆天才兒の話

山口のぼる

ゴルフ道の元老飯泉さんの息五郎さん、本年やつと十三歳。しかしクラフを握ぎると、おとうさん以上の天才。球は秋空を縫うて、流星のやうに、スーッ。おとうさん遙に眺めて『うまいぞ、今のは誰だい?』

とは、自己の職責に鑑み、或る不

手紙

―或る若き創作家の惱み―

福田有造

音樂家は美しい音樂の樣な詩で祝福して下さいました。

詩人は長い詩の立場から私の仕事をアンダルゼン、グリム、メーテルリンク以上の尊い物だと明快に書いて下さいました。

あなたも私の樣に是非此の事に對して喜んで下さいませ。

あまりどころか少しも喜ばないのは父だけでしよう、話もしませんが何しろ金にならない仕事をする奴は不心得者で、私などにいゝものが書けたらば世界中の人間は皆大文豪だと申したことがありますから。

日本の社會では創作の事業に携はると云ふことは惠まれてゐないのです。その惠まれない所に若い者の惱みも苦しみもあります。

私が此の童話を出版することは日本にまだ創始されてゐない未知の世界を知らせたい熱い心の溢れなのです。

私には少しも金がなくとも世間では私が貧乏だと云つても通して呉れません。私等藝術家仲間はモット悲慘な生活をしてゐます。

どうか私の爲めでなく世界に日本から生れたいゝ素質を持つた作家だと云ふブライトの爲めに御たのみする次第です。

尤も此の出版は或は世に期待されないかも知れない、私の樣な思想を抱持してゐるものは一歩進んでゐますから。

尤もベトーベンが四十二才の時に苦しい思ひをして出版した第七ミサ曲は僅に七部しか賣れなかつたと云ふ世の中には不思議な事がありますが。

私の仕事がいよ〳〵高くなり尊くなればなる程、私は物質の苦しみを味ははなければならないでしよう。

日本にもワグナーを保護したバワリヤの王樣の樣な偉い方があつたらば私も決してワグナーなどに負けてはゐないでしよう。けれどもそれは想像もつかない困難な事であります。

近頃はどうしたものだか精神に苦しい悲しい事ばかり多くつてこんなであれば生れてくるのではなかつたと心から思つてゐます。けれどもこれとても如何することも出來ない宿命なのでしよう。

眼のない魚

山村翠

眼の無い魚と云へば、ハハア明太魚の乾したのだナと、直に斷定する位の智識は、朝鮮に住む程の內地人は持つて欲しい、鮮人の事情に就ては良かれ惡かれ、總て無關心の狀況では頗る心細い。

給料に生活する人々に對して、世態人情を研究し、若くは社會的智識を養ふべく望むのはケト無理かも知れぬが、朝鮮に於ける事情の不徹底は、何事にまれ齟齬を生じ易い、齟齬の生じ易いことは聽て自分の執りつゝある職務に缺陷あるを物語るものである。

尸位素餐など云ふ熟語は最早現代に通用しないかも知れぬ、併し朝鮮に住むで朝鮮事情に通ぜぬことは、自己の職責に鑑み、或る不安を感じ、若くは志す事業に關し成否の岐路に立つ場合が無いとも云へぬ。

今日朝鮮の土地に一種の懷しみを持ち、相當の基礎を築いて居る人々に就て檢討するときは、恐らく事情通曉が一因を爲したることを見出すであらう、併し又一面から觀れば彼等も同化の賜であるとも言はれる。

同化はお互に自我の拋棄である又お互に謙讓の顯はれであり、又犧牲的精神の發露であるとも言はれる、此貴ぶべき行動が所在盛むに實現すべく思惟さるゝに拘らず事實は却て之に反し、在鮮內地人の多くは此境地に到らずして止むか、或は輕侮を以て彼等に臨み、終に破綻を見るのは實に遺憾に堪えぬ。

必ずしも朝鮮草鞋に馴れ、濁酒の味を喜び、ビンデに免疫性を得るのを、尊重すべきではないが、要するに今少し朝鮮人に對する理解が深くありたい。

◇若武者物語

平田久雄

○十月初めの全鮮ゴルフ大會に大邱から參加して、潁りに京城組を惱ました若武者がある。名を河合戸四雄といひ、本年とつて十九歳。例の民報社長河合朝雄君の令息。

○大袈裟でも何んでもなく、中村武者兩氏に次ぐ腕前。もう二三年もすると、全鮮を代表して、日本的試合に出るのは、この少年だらうと、淸凉里あたりで專らの取沙汰。

圍碁

岩本善文

私は將棋のことは皆目、それこそ全くの門外漢であるが、碁の方は少しばかり知つて居る、知つて居ると云つても、是もほんの僅かで鏞業會の德野さんに四目、加藤松林君に二三といふところだから知つて居るといふ部類に屬すか屬さないかは、偏へに讀者の賢察に委すといふ代物である。

だが、其技倆が薄弱だからと言つて、碁の趣味を味ふことに平等の權利を傷けられるものでない、碁の技倆と碁の趣味を味ふのとは別物であるといふ見地から、私はこゝで碁の趣味を高唱したいと思ふ、と何も斯んなにまでして碁のことを書かねばならぬ理由はないが、先月あたりから雜筆社の原稿督促急にして、嫌といふことの出來ない破目に陷つた窮余の策として、ふと考へ付いたのが此の標題である、で、筆を執つて書かうとすると、何だか僭越らしいやうな內心の羞恥を感ずる、それを振り切つて文責をふさがうとすると、つい斯うした前置が必要になつて來る、これやがて名譽記者の慘憺たる現實暴露の悲哀であらねばならぬ。

そこで漸く本文に到達する順序となつた。

私は思ふに碁には一種の哲理を包藏する。圍碁ぐらゐ玄妙なものはない、だから古人も『碁を知るは則ち易を知るに等し』と言つて居る、又『碁は易數なり』『碁は河圖洛數より出づ』など言ふのも碁の玄妙なる理法を感知した讃嘆の言葉である。殊に

禮儀廉恥の紳富國强兵の道皆な碁に備はる。

文にして而して武に武にして而して雅なる者唯碁のみあり

宇宙の理陰陽の衆人事の道凡て碁に存す

と言ふに至つては碁は實に『聖なる哉』と言ひたくなるが、碁を惡むものはさうは言はない、『碁は親の死目に會はぬ』とけなし、貝原益軒も『圍碁將棋すごろく等凡て盤上の遊びは益なくして害ありと述べて、これ求道の途でない』と力說して居る。

だが、その弊害は碁を打たずして碁に打たれるからである、碁に溺するは碁のそものゝ罪でない、碁は悟なりで盤石の外に於て別に工夫徹底する量見を持するに於て碁の弊害は除去されると言はねばならぬ、だから碁の趣味を正當に解することに依つて、碁は勝敗を外にして何ものかを吾人に與へるものであると言へる。

理屈は拔にして私は碁と言ふものを一つの藝術と見れば好いと思ふ、一局の碁は則ち完全な一箇の藝術的作品である、そして其藝術品は平面的に碁子の羅列に依つて其形が現はれるのみならず、一子〳〵の投下に潛む對手と對手との心の働きは、形を外にして其處に無形の立體的型像を描き出す、而もそれが對手と對手との綜合的作品であるだけに、其型像は實に神變不思議である。

斯くて碁は心の形を彫むものなりとの結論に到達する、しかしそれは有ゆる藝術品に共通する素質であるが、碁は對手との綜合に成るだけに靜的でない、又其形が自由であるだけに變化に富んで居る。

盤面乃ち是れ宇宙、棋子乃ち是れ萬象、碁理の窮まりなきは猶眞理の極まり無きが如し。

碁は又他の藝術品に比して更に優越せる特徵がある、他の藝術品は形を他に假託して自己の心を描くのであるが、圍碁は則ち自己の心そのまゝを盤面に刻むのである。そこには假託もなければ粉飾もない、勿論虛僞も誇張も何ものもなく、赤裸々の心が最も露骨に描き出される。そして心の波汶は遺憾なく因果の理、命運の機微を吾人に指示する、若し此の心を以て自己の碁局を凝視する時、そこに記性、精力、智慮、手腕、品性の明らさまなる醜骸が暴露せられて、慄然として肌に粟を生ぜない譯に行かない。

圍碁は實に心の鑑鏡なり

と言ふことが出來る、若し此理を知らずして百戰百勝するとも、未だ碁を知れる者とは言はれないだらう。

圍碁の興趣は實に子々に刻み上げる心の型像が、躍々として子々に流動奔波する時、之を我心の反影と見て始めて、其眞髓に觸れることが出來ると思ふ、故に

其の碁を見ずして其人を見よ

思慮なき者とは對局すべからず

未知の者とは猥りに碁を打つこと勿れ

と曰ひ

良友と共に碁を圍むは獨坐書を讀むに勝る

碁は讀書の難と用兵の奇とを兼ぬ

とも言はれて居る、圍碁の哲理は處世の哲理と相共通する、而も圍碁の時間は短く處世の時間は長い

此短を以て長の縮圖と見れば、圍碁

くても誇り得る碁が打ち度いと思

此短を以て長の縮圖と見れば、圍碁の興趣は深刻なる戲曲を見るにも勝る場合がある。私は斯うして圍碁を禮讃する、禮讃しながら覺束ない藝術品を頻りに製造するが滅多に勝つたことはない、勝たなくても諦り得る碁が打ち度いと思ふが、それも醜陋限りない形骸を盤上に曝すに止まる、でも何時かは會心の作品を作りたいとだけは常に心に念じて居る（一五、一〇六）

將棋

八段 土居市太郎

◎碁の力同じければ、先手必ず勝つべきか、答ふらく年齢同樣にて、其日の氣分も同樣、而して碁の力同じければ先手の者勝たんと之れは本因坊道智が時の將軍の問に對しての答なり。曲淵甲斐守之れを評して曰く流石上手のお答也と。少しく棋を解するものより見れば、平凡至極の答辭と云ふべきのみ。

◎年齢も同樣の一句中には、體力の相違尠き意味も含まれ居るならん。長時間の對局となりては、體力の差が勝敗を決する一大要素となる。大阪の高濱五段は、思案深き點に於いて有名也、初盤に飛車先の歩を突懸けられて、約一刻の思慮を費せりとは嘘のような話なれど、實見者の談也。往年宮松六段この人と對局中、旅の疲れもあり。長時間の正座に堪へず。一寸休息致すとて、相手の思案中に一と寢入りす。高濱氏の一手を下すに及んで急に呼び覺まされ、乃ち駒を動かす。睡魔未だ去らざる時の事とて、思ひの外の惡手にて是れが敗因となれり。

◎其日の氣分次第にて强弱の差起るは、筆者の如きヘボにも經驗あり、高段同士の對局に於いてその影響の特に甚しかるべきは想像するに難からず。明治名家の手合の中、小林廉次郎對小松定吉の一局に面白き評あり。曰く小林は今度五段に昇級（明治二十年）佐久間との手合にも勝ち込み居る故。今回小松と平香交り二番の手合に及びたるが、小松は若手也、二番の內香落番は必ず勝つならんと皆々思ひし所、案外にも敗となれり小松の力左程劣れるにはあらねど同人は近頃外の遊戲にも耽り、此道に不精なる爲め不出來と人々話し合へり、平手の分は香落の響にて最も不妙なりきと。外の遊戲にも耽りの一句、頗る妙。

◎平手の分は香落の響にて最も不妙なりきとは、負け越したる手合の、敗者に不利なるを指摘せるなり。五段中一の稱ある金子氏も木村氏との對局には固くなり過ぐる嫌あり。ヂリ〳〵指込まれたるが爲めに、氣分の平靜を缺く故也他にも同例多し。

◎通例棋士の最盛期は、廿五六才より四十才位の間と見做さるゝも人によつて五十才にして毫も衰へざる事もあるべし。天賦の體質と平素の心懸けとによりて、指し盛りを延長し得るなり。大酒、他の遊戲、家庭の苦勞、業務の繁忙等、一々勝敗に影響す。棋聖宗歩の如きに在つても、女道樂は多少の禍を爲せしならんか、早世の一因も恐らく其處に在りしならん。

◇さま〳〵帖

吉田莊一

○

京南鐵道技師長の竹內君といふと、鐵道界切つての快漢であらう。鳥渡見ると、黃金町あたりの、中店のあるじといつた風貌。これが東大出の、技術上スバ抜けた手腕の特主とは、どう見ても受取れないのである。

○

しかも膽氣の据つてゐること、決斷の速かなること、ヤッつけろ主義の徹底してゐること、眞に驚くべきもので、一二年も前十八哩の廣軌線を『ハアようがす、やつゝけませう』と受合つたが最後、たつた十一ヶ月で完成し、爾來少しも故障がなかつたといふ。

○

十八哩といへば、官線でもあると、正に三年は大丈夫懸るのである、しかも平氣でやつゝけて、エヘン〳〵と、そつぽを向いて、咳拂をしてゐる。

○

人物が實に愉快なところがあつて、往年岡村鐵道技師から引立てられたので、今以て同氏を忘れず談一たび氏のことに及ぶと、どんなにへべレケに醉つてゐても『一寸待つた』とすわり直すのである部下に對するのも、同じ式で、どなりつける代りには、亦實によくその面倒を見る。

○

京南鐵道では、竹內君は『生きた社寶ぢや』と大に重寶がつてゐるが、君は曰く『コンナ社寶があつてたまりますかい、朝寢はするし、お酒は飲むしヘッヘッヘ』と、蓋し珍らしい痛快漢である。

【一五】

居る、又『碁は易數なり』『碁はであるが、碁は對手との綜合に成碁の時間は短く處世の時間は長い

關ヶ原

古田廉三郎

秋の夜長の徒然なるまゝに書きちらしたる古き書き物など整理する中に、關ヶ原の戰況を面白く書きたるがあり、陳腐と云はゞ云へまた當時を追想するも益なきことにはあらじと左に摘錄せり。

美濃から以西は大抵西軍で、尾張から東は大抵東軍で、天下の形勢は二分した。毛利輝元は大兵を擁して已に大阪城まで上つて來て居る。石田三成等は伏見城を乘取つて兵を美濃大垣まで進めた。岐阜の織田秀信も西軍に應じた。東軍の先鋒は已に尾張清洲まで來た今一つ木曾川を渡れば此に戰爭が始まるのである。

東軍の先鋒井伊直政、本多忠勝福島正則、黑田長政等は清洲にあつて日に日に家康を待つたがなか〳〵來ない。漸くにして使は來たが其傳言は意外であつた『諸君先づ戰を開いて其二心なきを明にせよ。然らば戰利なくとも直ちに出馬せん』と云ふことであつた。二心とは果して何事であるか諸將は驚いた。

併し雖心勃々たる正則長政等のことである、何かは猶豫すべき、直に兵を進めて二日間に岐阜城を攻め落し、急に使を關東へ立てゝ尙も兵を西に進めた。

西軍の主力は大垣城にあつた。城の周圍は四面低地にして容易に寄付けさうにない、加ふるに征韓前役の總大將であつた浮田秀家や新憲に韓人の贈を寒からしめた島津義弘を始めとし行長三成等の面々其多くは征韓の役に八道を蹂躪して來た猛將である。それに五萬に近い兵が之に據つてゐるのであるから容易に攻め寄せやうもない。家康が東軍陣地大垣の北二里なる赤阪に着いたのは九月十四日である。東軍の氣焰は大に揚つた家康は直に大垣城の地勢を窺つたが、迚も容易に落ちさうにないと見たから敵を誘つて平野に戰を決しやうとした。即ち兵を分つて城に備へ、自らは直に西して近江に入り石田の根據佐和山城を衝かんとする樣子を示した。

關ヶ原——美濃から近江に入る境に關村がある。之は昔より京都から東國に出る要所で不破關もこの邊に立てられたのであつた。仰げば伊吹山高く北に聳えて三條の大道が關村から分れて其麓を横ぎつて居る。一は北國街道で一は中仙道である。伊吹の餘脈はこの街道を越えて偃々として近江の境を限り伊勢に向つて居る。道の南にこの餘脈の一つが突出てゐるのが南宮山である。伊吹南宮二山の間關村附近一帶の小原野が即ち關ヶ原である。

西軍は倔强の地としてこゝで喰ひ留めやうとした。即ち夜に乘じて大垣城を退却することに決した島津義弘は家康の陣を探つて夜襲の策を立てたが三成は聞かず、明日の捷は必然であると信じて居つた。而して西濃に集まれる東軍は八萬餘で、西軍は八萬だつた。

西軍は急に令を傳へて其夜の七時頃から順次に大垣城を立つて關ヶ原方面に退却した。其夜暗さは暗し雨さへ加はり西軍の離散は名狀すべからざる程であつた。

【一六】

家康が此報を聞いたのはその夜十時頃で、直に號令を傳へて急に進發の準備を命じた。誰か今日平野の戰に於て我に西敵すべきものやあるとは、此時家康が侍臣に語つた言葉であつた。先鋒已に赤阪を發し家康自ら笠を戴き馬に跨り莞爾として西を指したのは正に未明の頃であつた。明くれば

慶長五年九月十五日

前夜來の雨は小やみになつて來たが、濛々たる濃霧は原頭を籠めて、未だ全く散せず、兩軍次第に接近して相知らず衝突は先づ浮田の隊と正則の隊とから起つた。正則已に敵の近きにあるを知つて正に攻擊を始めんとす。一隊正則勢の横合から出て浮田の陣に向つて戰を開いたものがある。之れ即ち井伊直政が家康の第六子忠吉を率じて此日の先鞭を着けたのである正則の兵爲めに擊退せらるゝこと數町、正則怒り奮戰して漸く舊位置を回復した。

黑田長政は此日必ず三成を獲て日頃の怨恨を晴さんと驀地に三成の陣へ向つて兵を進めた。三成の勇將島勝猛菱縅の具足に淺黄木綿の羽織を着太刀を横へ士卒を指揮し、彈丸雨注の間を物ともせずに除々と黑田隊に向つて進み來る。長政の兵稍動搖の色あり、細川忠興加藤嘉明等も此日三成を獲て甘心せんとし等しく石田の隊へ兵を進めた。勝猛は終に黑田隊の彈丸のために重傷を負つたが、勝猛と共に石田の猛將と呼ばれた蒲生郷舍は能く戰つて容易に屈する色はない。

小西隊も島津隊も各前面に敵を受け兩軍十四萬の健兒は潮の如く寄せてはかへし奮鬪數時に渡つたが勝敗は何れにつくとも見えない

三成は戰機の熟するを見て烽火北に向ひ、大谷吉隆の隊に向つてことに決し、馬標を折り旗を卷き

京城雜筆

三成は戰機の熟するを見て烽火を擧げて、松尾山（關ヶ原の西南隅）の小早川秀秋に向つて横合から進擊すべき命を傳へ、遙に南宮山の毛利秀元、吉川廣家に通じて家康の後方へ進擊すべきを傳へたが秀秋は動かない。使者をやつて促がしたが尙動く色ない。南宮山の方も一向無効である。西軍の計劃は齟齬し初めた。秀秋は戰以前已に款を東軍に通じたので戰酣なる時側面から攻擊する筈であつた家康も亦戰機の熟するを見て使をやり之を促したが一向に動く色はない。此時まで本多忠勝は南宮山の敵に備へて居たが前面の戰益劇烈稍もすれば味方に退却の色あり南宮山の敵動かず又山を下るの樣子なきを見て轉じて側面から浮田隊をつき、その大勢を挫折して小西島津へ向つた。

時已に正午に近く勝敗未だ知るべからず。而して秀秋形勢を傍觀して尙未だ動かず。東軍は終に數度の催促効なきを見て部兵をして小早川隊に向つて射擊し始めた。以てその動靜をためしたのであつた。

浮田の大勢已に挫け東軍の射擊頻りなり、そこで秀秋意を決して北に向ひ、大谷吉隆の隊に向つて突擊を始めた。吉隆は始めから秀秋を疑つて居たが、之を見て直ちに前面の敵を捨てゝ小早川隊に向ひ、之を擊退すること數町に及んだ。秀秋怒り叱咤して自ら吉隆の隊を衝いた、吉隆戰死し秀秋の兵勝に乘じて浮田隊に向つた。あはれ松尾山の反擊は正に今日の運命を決した。西軍は崩れ立つた。

小西の隊先づくづれ、秀家の隊ついでくづれた。石田隊は蒲生郷舍が之を指揮して尙支へて居つたが終にくづれた。秀家はふみ止つて自ら秀秋と決鬪せんとしたが部下に止められて西へ向て落ち、三成も伊吹の方面へ向つて落ちた。

西軍の敗兵島津隊に集るや、義弘令して我隊を亂る者は味方と雖も斬らんと、三成の軍もくづれて東軍島津隊に集るや義弘高きに上り、遙に南宮山下の金扇馬標を指して今や全軍敗れて又如何ともすべからず、後に伊吹の險あり前に東軍の充滿するあり、余も亦老いて險を越ゆべからず、彼所の一隊正に內府なるべし最後の思ひ出に麾下を衝かんと、自ら馬を驅らんとしたが老臣頻に諫めて、敵中を突破して西南に向つて血路を開くことに決し、馬標を折り旗を卷き全軍を集めて一團とし、南へ向て落ちた。福島小早川井伊の兵追擊益急に、義弘の兵大略死傷し、餘すこと僅に八十餘人。

秀忠（家康の子）は宇都宮から三萬餘の兵を師ゐて中仙道を上つたが、信州上田の眞田父子の爲に遮られてこの戰に會することが出來なかつた。

東軍は全勝で大勢は此に定つた毛利輝元も降り家康は大阪城に入つて賞罰を行ふことになつた。

これは商銀頭取和田一郎氏夫人香朗代標から最近頂いたものであります

◈土を樂む人

山口のぼる

○

鮮銀の古田さんは、銀行家としては、仲々の喧まし屋ださうだがそれは氏の一面であつて、他の半面では、趣味の人、溫情の人最も友誼に厚い人である。本も讀むし歌や句も作るし、草花や盆栽は、氏の最も樂む所で、銀行から歸ると、一箇の農夫と化し、悠々庭いぢりに日を暮してゐる。

○

その古田さんは、今度突如として、東京支店詰となる。實にお名殘惜しい次第であるが、氏が東京に行くとなれば『銀坐夜話』や、『小石川植物園見物の記』など、實に氣やすく、喜んで書いてくれると思ふ。謹んで御健康を祈つて置く。

○

本莊幽關といふ女豪が、また京城に舞ひもどつてゐる。女史は實に近世變態性慾史上の花形らしく曾てその社に傭つてゐた靑柳南冥氏なども、大におそ毛を振つてゐる。何んでもその精力絕倫振りはタイしたものらしい。

忘れ得ぬ言葉

田口耕平

靜寂なる秋の夜、机に凭りてそこはかとなく思を廻らせば、太い線を表はして忘れ得ない二つの言葉が、くつきりと浮んでくる。私はもとより哲人でない、こう書いたとて、千古の眞理を浮べたと限らぬ。世俗の私自身にとつて有り難い言葉の記憶である。

一つは、私が初めて家庭を持つ時のことである。築地精養軒で新郎として（今こう云ふと頗る樂つたいが）私は主人席に坐を占め。前には加藤子爵（在野黨總裁時代）が主賓として坐られた。正直に白狀すると、場合が場合であり加ふるに加藤さんの前といふことで益畏縮してゐた。況んや度量を表徵した樣な眼光の瞳がぐるぐると何者の眞底も徹透するが如き働き、御手のものゝナイフ、フォークの鮮かな振、早い話が獅子の前に置かれた鼠その者であつたに相違ない。

仲人の型の挨拶があつて、加藤さんはやをら身體を起され、政治家といふより大哲學者と云つた眞摯な態度で、例のお祝の言葉を下さつて、其後に『世路は決して坦々砥の如きものでない、或は山あり河あり、艱難もあれば慰樂もある、此時人は家庭に於て互に樂しみ互に慰めそこに力を生ずるのである』と云はれた。言葉は平凡であるかも知れぬ、然し家の門出に頂いたこの言葉は一生忘れ得ない。一本氣な卒直な眞面目な加藤さんの言葉として、永久に忘れ得ないものである。

其の二は、私が初めて京城で現任の時、前下岡政務總監から賜つた言葉である、圓味あつて心よい透徹ほるしかも底に威力を藏する語調にて『……は未だ春秋に富むと見受くる朝鮮財界の爲に長く努力せられんことを祈る』云云である。

吾々は內地に立つた一本の木の云はゞ枝葉の一の神經を守るものに過ぎない。然しながらその枝葉が一尖端としても朝鮮の光を受けてゐる以上、否その朝鮮の光に培はるゝ枝葉のみ掌る以上、明け暮れ朝鮮といふことを考へるに於て、幹は何處にあつても異りはないと自ら信じてゐる。下岡さんは大度の方である。熱誠眞情の人であつた。私如きものをとらへ、一つの挨拶と云はば云へ、かゝる言葉を下さつたと思へば、追憶毎に新なる有り難さを感ずると共に、私は下岡さんが產業第一を提唱し、朝鮮の根本の幸福を增進することの熱誠の迸が、些少なる末梢枝葉の微神經に迄此言葉を送らるゝに至つたものと、私は衷心考へてゐる。

× × ×

顧ればこの二つの言葉を頂いてから春秋そも幾于、私の頭に言葉は恒に新なりと雖も、言の主二偉人は既に今亡し矣。秋の夜の感慨いとゞ無量、深沈たる夜更くると共に時計の刻徒らに小人の言の如く勿忙と耳朶に響きて私にとつての忘れ得ぬ言葉を益强く對照せしめてゐる（一〇、九夜一時）

聯して有力に作用する事を發見し　行しつゝ同邸を訪づれたのです。

千里眼

池部義雄

ソレは私が十八歳の春、まだ學生時代の事です。フトしたことから非常の重患となつて、生と死とが旦夕に爭奪を競ふ樣になりました時、私の心のドン底に、生來曾て意識した事のない、或種の力が添加されて、遂に死から遠ざかつたのであります。或種の力――ソレは伊太利の詩聖ダ氏の說く『オゾ』とか、萬國心衆學會（英京劍橋大學內）の表看板たる『心靈』とか、それ程神秘化されたるものではないが、同系の端くれに置かれる位は科學を離れたものと信じて居ます。而して私は殆ど死を堵して惠まれたる此の或種の力を修養によりて擴大すると云ふ事が私の生存を意味づける唯一の使命ではあるまいか、生物の素を究めよといふ使徒の一人として生まれたのではあるまいか、ソレなれば麓に戻りて道を變へなければならぬと、從來の目的に三下り半を叩きつくべく幾度か父に交涉して見たが、徒らに憤怒の亂筆をいただく丈けで、決裁が得られませず、已むなく屠所の羊となつて欠伸し乍らノート生活を繼續しました。されど生死の窮地に於いて惠まれたる糧の味は、忘れやふたつて忘れられるものではありません。從つて其後『生』の孤線に自立してもセメテ其力の銷磨を防ぐ迄もと思ひ、與へられたる機會を利用しては此種の人々に接觸して居ます。而してソレが直接私の職業にも關聯して有力に作用する事を發見してから、一層興味に愛らるゝ樣になりました。

有名無名の僧侶の方や又は職業化して居る濱口熊嶽氏や太靈道の田中守平氏、氣合術の江間氏、乃至最近問題の三田氏など、相當の廣さに接觸の人を有つて居ますが最も私をして無條件に服從せしめたのは明治聖代最後の年――北韓山の裾より流れた秋が京城の街に漂ふ頃でした。

寂として靜けき涼闇の天下に一つの驚異は波紋の如く擴がりて科學の根底を搖つたといふ事です。ソレは三船長尾の兩夫人によりて成功されたる『透視』の術です。博士福來氏は之が爲めに助教を鄭つて東大より高野山に轉籍するなど、眠れる時代としては相當偉大なるショックでありました。素より前述の心衆學會の會報などには米のパアパ夫人などは透視は云ふまでもなく念寫念動、甚しきは靈の交通までやるといふ事は遙かなる國に於ける一つの記事として夢の如く受け取つて居りましたが、母國人の此成功にはどふしても眼を見張らずには居れません。されど悲哉生活につながれた紐をゆるめる事の不可能なる私は、只日々の新聞に虛實を爭ふ記事を見入るのみで實際的に歸依する機會が與へられなかつたのです。然るに一夕某知友が見へて、日出町の遞信官舍にS氏といふ同局の一課長が催眠術に就いて造詣が深いとの事で、スキな道ゆへ明日ともいはず直ちに當夜訪問したのでありますが成程看板を賣物にする人と異り、理路井然として說かるゝ中に、一語は一語より自分は引き入られて居ましたが、丁度其時一青年が跛行しつゝ同邸を訪づれたのです。S氏はこれを迎へると共に

『此の君は重症の脚氣症で此頃迄歩行不能でしたが、施術の功果は日を追つて現はれて居ます幸ひの好機會ですから、早速施術して見せませう』

と、同氏は起ちて同君の前に正座して凝視一分すれば被術者は完全に催眠されて居る。疾病に對する二三の暗示を與へた後、眠より醒めた青年はS氏に一禮すると共に

『先生私は數日來自己催眠をやつて見ましたが、どふやら透視が出來さふです。一つ試驗して下さいませんか』

『ソレはステキですナ、もしも出來たら時代の寶物ですよ、早速やつて見ませふ』

これは面白い、ナンといふ今日は祝福の日であらふと、宛かも初戀の處女が心臟が高鳴る樣に自分の胸にも進行の曲が慌ただしく調子づきました。隣室に起たれたS氏がやがて元の座に復したのち、三寸方形の箱を出して

『サア透視して見給へ』

と青年をうながせば、青年は瞑目二三分時にして自己催眠に入り、右方より左方より松王の首實驗ではないが、所謂ためつ、すがめつ約五分間の後

『キの字形に卷煙草が入つて居ます』

『さふかネ、今一度試つて見給へ』

S氏の言に再び見直し？すること三分にして

『どふもそれとしか思はれません』

それではと、靜かに伸ばされたS氏の手により箱の蓋は除かれた、見ればマッチの軸が三本、キの字

京城雜筆

形に並べられてあります。

『完全ではないが可能性は確かにある、今一度試つて見給へ』

と、S氏は其箱を別室に持ち去り再び準備して出られた。青年は以前と同型に催眠に入つて約三分時

『角力取の踊人形が二個、東方力を頭にして入つて居ます』

S氏により開れたる箱の中は、透視を裏書し過ぐる程完全の者でありました。最後に今一回の試驗としてS氏の懷中物を試驗した時

『マッチが一個』

と、鮮かに的中されました。

S氏と私は云ひ合はせた樣に、青年と握手し乍ら、暫時歡喜の沈默が續きました。私は此試驗をば無言で信じます。ソレは不紳性……欺罔的手段……を疑ふにはアマリにS氏が人格者であると云ふ事と、場所と云ひ時といひ、何等手段の必要を見出さないと云ふ事であります。

口角泡沫を飛ばし舌端火を發して千里眼の虛實を爭ふうちに、敢然として其可能を絶叫し得ると云ふ人は、極めて小數の輩であると思ひますれば、これに參加し得べく資格づけられたといふ事は、人生行路上の收獲として、偉大なる者の一つであると、自分が日誌の一節に『祝福』の二字を時に朱書に認めました。而して私が有する或る種の力も必ずや有形の上に機能し得らるゝものと思ひまして、內觀的自己信仰をくり返へして居ります。

課長室

小川徹

△

庶務課長のXは、噛んで吐き出すやうに、△△△社の外交員を、鎧袖一觸、追ッ拂つてしまふ。

『君、とに角あんな奴が、一日に七八人も來るんだからな、庶務課長も樂ぢやないよ』

昂然として、僕に手並のほどを、拜見に及んだかといふ顏色。

△

そこへ、不幸にして○○新聞の外交部長といふ男が來る。

どつかと椅子へ大あぐらの

『近ごろどうです？』

庶務課長、威勢俄に衰へる。

『へ、へ不相變ですよ』

『この間來たが、あんたがゐないので自社のあれをさ、他會社との振合も考へて、僕がうまく計らつて置いたから、今日はお禮をいつて貰はうと思つて……』

『結局、どうなります』

『これで文句はあるまい、そこでついでに金を貰つて行かうと思つて……』

領收證を出す『二金二百圓也……』

『二本ですか』

『けち〳〵しなさんな、これでもあんたに免じてあるんだ』

『難有い仕合せで、だが、これはチト手嚴しい』

『グズ〳〵いひなさんな、今日は忙しい、まだ二三軒用がある早くたのみまつせ』

△

外交部長の悠々と去つたあと

『君、前のはたつた十圓で、あれだけペコ〳〵して、かあいさうに君から二圓ばかり取られた。今のは二百圓でしかも事後承諾、ちと不公平ぢやないか』

『ふむ、さういへばね、しかし長いものには卷かれろさ、○○新聞は手剛いからね』

『といふと畢竟强い者勝かね』

『僕等は、どつちでもいゝが、上の方ではね。雜報二三行でもそりや頭痛鉢卷だからね』

『アハハハ……』

『フ、フ、フ……』

見聞記入帳

平田久雄

○

京南鐵道副社長の秋本氏といふと、その識見手腕のすぐれてゐることは、定評があるが、亦これ位身のまはりを構はぬ人も珍らしい

○

往年官を罷めた時などは、いつも丹前で『××君、居るかね』と何處をでも訪問するので、夫人は『主人には、ほんとに困りますよ』

○

この癖は、今になほらぬと見へて、この間入京した時にも、雁の鳴くのに麥稈帽子、同行の井上支配人が、ハラ〳〵して『秋本さん帽子を一ッハヅミませうや』『うう、君、よろしくたのむ』その晩記者が訪問すると『君、いゝだらう今日井上が買つてくれた、何んでも最新流行さうだよ』

○

往年三十七八の壯年理事官で、鎭南浦を創成した意氣で、京南及び溫陽經營を企畫しつゝある。その成果を見るのは、こゝ兩三年の後だらう。

やうに芥箱をあさつて、殘物を求むる人の多いのは、人生慨參の極たので、私は家族とともに、しば

『へ、へ不相變ですよ』
『この間來たが、あんたがゐな
れだけぺこ〳〵して、かあいさ
うに君から一臓された。今のは
の成果を見るのは、こゝ廣三年の
後だらう。

京城雜筆

霜やけ

善生永助

○

うす霧のなかにあまたの御佛のほゝ笑み給ふあさぼらけかな

或る秋、慶州より佛國寺に到り、早朝、石窟庵に詣でたことがある朝霧うすくこめたところ、海のあなたに浮び出た太陽は、岩窟の中にまばゆき七彩の光りを投げ込み如何なる巨匠の彫りし石佛か、仰ぐ御像の美しいこと、尊いこと、私は敬虔の念にうたれて、しばし夢の如くに立ち盡くして居た。

○

賣られ來しわかき女が身の上をかこつ夜半かも秋の雨ふる……

ところは南鮮の晉州、晩酌の相手に出た女の、國訛りなつかしき儘に、事情を問へば、私の鄕里とは程遠から所から、遥々賣られて來たと云ふ、袖すり合ふも何とやらまして同縣人たる薄倖なる女性、豈に同情せざる可けんやだ。箱を形づけて彈かず唄はず。しみじみ語るを聞けば、蟲の音をり〳〵、秋の夜の雨、さても淋びしいものかな。

○

野分ふく場末の街に芥箱をあさる人あり暮の鐘鳴る

乞食の多いことを以て、大京城の名物と云へば、怒鳴り込んで來る人があるかも知れぬが、京城郵便局前の廣場から朝鮮ホテルの附近へかけて、袖乞ひする者の尠くないことは確に文明國の恥辱でありまた市街の到るところで、痩犬のやうに芥箱をあさつて、殘物を求むる人の多いのは、人生悲慘の極である。府廳の新築、市區の改正小公園の設置、その他、都市の改造を計ることも大切であらうが、救貧防貧の施設は、更に一層深刻にして緊急の問題であるまいか。

○

秋の夜の濤音悲し旅に來て
ひそかに物を捨つる棧橋

長旅をして群山へいつたとき、そこで新らしい猿股にはきかへた、初給ならねど一首なかる可らず。偶々大杉榮氏が伯林の下宿で、便所へ猿股を捨てゝ失敗した話を思ひ出し、關東の大震災の時にも危險を冒して私と共に、餘燼尚ほ熾んなる燒跡へ乘り込んだなどの戰歷を有つ、いはゞ名譽の古猿股を私は勇士の最後でも弔ふやうな氣持ちで、新聞紙に包んで宿を出で夜陰に乘じて群山港の棧橋よりソツト水葬を行つた。折から雨雲低くたれて風は冷めたく、冲にかゝつて居る船の燈火は明滅して、淵聲とろりとろり、そゞろに旅の哀愁が湧く。

○

豚おほく繩につなぎて市に行く
白衣の人にポプラ散るかな

朝鮮の經濟と生活とを代表して居るものは、かの市場であると思ふが、殊に秋はいづこの市日も繁昌し、市場に通ずる街道は人の往來が頗繁である。私はポプラやアカシアの並木の間などを、樣々の人が荷を運んで通るのを見ると、朝鮮の田園情調に何とも云へぬ感興を覺ゆる。

○

朝鶴の晴れし裏山落葉ふみ
のぼるわがまへ鶴の走る

この秋は、きのこが非常に多かつたので、私は家族とともに、しばしば老人亭から賈谿寺附近の山へ行つて、多くのばつたげをとつて歸つた。秋の山遊の興味は格別で單調なる京城の生活には大なる色彩であり慰安である。あの裏山の眼ふ實況を見たなら、ブルジョア諸君は、茸狩のシーズン丈けは、能ふる限り市民の爲めに山を開放して欲しい。

○

北漢山いただきすこし白うなり
わこはしもやけかゆがりにけり

秋漸やく老いて、そろそろ寒い多が近づいて來る。溫突一つない貧、弱な私の借家生活は、冬の來る毎に、由來健康でない家族が、或は別府溫泉へ逃げたり、或は東京の留守宅へ引揚げたりして、いつも安住するに至らなかつたのである。しかし今年は、小供の學校の關係で、そんなことも出來さうになく、また嬰兒もあることゝて、實に多こそは、私達の家庭に取つて大なる脅威である。

もみぢ落つ

平田久雄

漢銀の堤さんが俳句をやる。しかも仲々とゝのつたものだとは聞いてゐたが、先生頗る自重して、仲々世にしめさないのである。ところが、このうち大和町の廣江邸に遊び、ついハメを外づして、一句やつたものだ。それが、筒ぬけに雜筆記者の耳に這入ることは、何んの變哲もないことだ。なるほどうまいものだ。

廣江邸即興

雀飛んで紅葉落すや秋の庭
見つむれば淡き雲あり秋の空
夕燒に峰の松の樹數へけり

京城雜筆

出版界苦言

島崎末平

七月號に『出版界無駄口』を書いたのが緣となつて又何か書けとの催促だ。明けても暮れても書物ばかりいぢくつて居る僕には矢張り書物のこと以外は蔭張り分らぬと言ふと本屋さんか學者かのやうに聞えるがそれでない似て非なる樣の下の力持ちライブラリアンである。是は有益な本か役にもたゝぬ本かと先づ著者に注意し次に發行所、序文、目錄、內容と言ふ順序で極ザット目を通して選擇をやる。それから分類したり目錄を作つたり存外忙わしい責任のある職掌だ。古書珍本になるとそんな簡單には片付られぬ。解題や批評や考證を必要とする場合も起つて來るが、近頃久しく斯樣なものに觸れる機會がないので一切種切れ、よつて又々新刊書についての極皮相な無駄口をたゝいて置く。其前に一寸斷つて置くが、凡そ通俗の公開圖書館では何れの國でも特種の圖書館を除いては其第一に蒐集すべき圖書は、外國の書物よりも自國の出版物であらねばならぬ。自國のものゝ中でも印刷されたものを先にするのがまづ普通である而して卑近なる讀者を相手とする圖書館では此印刷された書物の中でも近刊最新刊本を最も多く蒐集する。言ふまでもなく最新の智識は最も多く最新の出版物によつて供給せられるからである。玆に於て我國現下の如く出版物が多くては是等のうち良書の選擇は餘程困難であると共に一層重要な事で餘程慎重な態度で臨まねばならぬ。そこで無駄口も二つ三つ叩いて見たくなるのだ。

◇著述家の濫作——所謂ブックメーカーと誘らるゝやうなものゝ往々出てくるのは遺憾である。著作と言ふことを單に利益といふことからしては不純のものである。著者も出版者も營利一點張りでは困る。未だ研究が十分でないのに同じ材料で書名だけをかへて出版したり、或は表題と內容と餘りにかけはなれたものを刊行したりすることは讀者を失望させる事が少くない。同じ飜譯本を同一著者が少しばかり燒直して出版者を變へて幾種類も出したり、一度雜誌に出したものを集めて新らしい書名のもとに賣り出し、舊稿の訂正もせず其まゝ集めて印刷するから用語などの今日に適せざるものがあつても少しも改めてないなどは讀者を誤らせる。

◇豫約物の全集などは大方一度は單行されたもので、此の中の絕版ものを一部見たい爲に全部買はねばならぬといふ不便もある。處が價は中々安くない。願はくば書店標準の定價でなく讀者本位にせられたい。此等豫約物の中には申込金をとつて置きながら無暗に期限を遲らして平氣で居る某々刊行會や某書店もある。

◇校正の粗漏——校正の嚴密正確といふ事は最も大切な事で誤植の多いことは少くとも不熱心といふことを證據立てるものである。殊に古書の覆刊本などに於ては研究者を誤らせ結局役にたゝぬ本と言はざるを得なくなる。最近の或書物に正誤表か索引か年表か或は別の附錄でゞあるかのやうに卷末に附けてあつたのを見て驚いた。然し一寸も正誤表など附けずに誤植だらけで濟まして置く本よりか餘程增しだ。

◇裝釘の亂調子——裝釘は外觀の美と云ふことにのみ心掛けて頓と內容と伴はず、否寧ろ本文よりも裝釘美の方に價値あるものもある。本末轉倒も甚だしい。書物は實用的事務的であると同時に、半面裝飾的美術的であるは勿論であるが、然しそれは藝術的効果が有るからではない。書物保存上に於ける單なる裝飾と見るが至當であらう。さりとて餘りに粗末なクロースを用ゐて讀者に不快の感を與へるのでも面白くない。毒々しき濃厚な彩色を以て無恰好な繪など書いてある表紙などの本もよく出るがどうも感じが惡い。いづれ發行者の營業政策によるものも多いだらうが、內容に權威がないからとて裝釘を目立つやうにまでして讀者の購買慾をそゝるが如きは以ての外である。要するになるべく淸楚にして優雅な裝釘で有つたら申分はなからう（大正一五、一〇、一〇）

◇七人の遺兒

石川利夫

近ごろ銀行界には、不思議と不幸な、目に遭ふ人が多い。岬銀庶務の荒木さんもその一人。十月初めに夫人が七人の遺愛を殘して、ほんの數日の患ひで他界せられた。荒木さん曰く『この痛棒は、ほんとにしみ〳〵身にこたえました。私はこの苦い經驗を手記して、永く紀念にとつて置きたいと思ふ』と、眞に御同情に堪へない。

別符號で送信するのである。船はそれを聞いて危險物のあることを

(Radio Compass)

方向探知 無線話

梅田吉郎

無線局や放送局の空中線から出る電波は、其の空中線を中心として丁度車の矢の樣に四方八方に放射されるもので、其の各方向に進行する電波は、恰も光線の樣に眞直に空間を傳はつて行くものである。それで其の電波の來る方向がわかりさへすれば、無線局や放送局は何の方向に在るかはすぐわかる筈である。然るに吾人は燈臺の光を見て直に灯臺のある方向を知る事が出來るが、電波の方向は探知器と云ふものを使用して測られてゐる。

平たい枠を作り之に電線數回又は十數回捲きつけ、其の電線の兩端を受信機に接いで置けば、若し電波が其の枠の面に平行した方向から來れば受信機は最も强勢に感じ又枠の面に直角の方向から來れば受信機には感が悪いのである。故に此の枠を縱にし回轉出來る樣にして置けば、之を廻して電波の來る方向を知る事が出來るのである是は方向探知器の一例であつて、此の外室外に建てた五〇尺から一〇〇尺位の電柱の頂上から東西及南北の二方向に三角形の空中線を張り、其の電線をゴニオメーターと稱する器械に取付け、此のゴニオメーターに依つて方向を知る事が出來る方法もある、が玆には此の方向探知線の一般に就て極く簡單に述べる事とする。

無線方向探知局

（Radio Compass）

レディオコンパスは陸上の無線局に備付ける場合と、船舶上に備へ付ける場合とがある。

若し船が航海中濃霧や遭難のため自分の位置がわからなかつた場合、其の船に無線を有する時直に附近の方向探知局を呼んで自船の位置を測定して貰ふのである。陸上の探知局には船の無線と應答出來る中央局と方向探知設備のみを有する局とあつて、其等の間は有線電信で連絡してあるので、中央局からは其の旨を探知專用局に通知し、尙自分も探知するのである但し此の場合船の方からは絕えず或符號で送信して居るのである。故に各局とも同時に方向を測り其の結果を中央局にまとめ、海圖の上に各探知局を基點とし、探知器で測つた方向の直線を引き其の直線の交叉する點に船が居ることとなるのであるから、此の船に知らせるのである。但し測つた方向を船に知らせ、船で海圖の上に線を引き自船の位置を求める事も出來る。

次に船が若し探知器を有する場合は、特に探知局に依賴せずとも海圖上位置のわかつてゐる無線局が自船の船首の方向より何度の方向に當るかを測定する事が出來るので、船の羅針盤と比較してすぐ位置のわかつて居る無線局より何度の方向に自船が居るといふ事がわかるのである。

無線灯臺

（Radio Beaton）

レディオビーコントとは暗礁、岩礁等の航海上危險物の存在を知らせるため其の所に作られたるものにて、霧や雨のため遠方から見えない時、かねて公示してある識別符號で送信するのである。船はそれを聞いて危險物のあることを知り、又船に探知器を有する場合は其の方向もわかり安全な針路を求めるのである。

又狹い海峽や港灣の入口に數個のビーコン局があつて、何れも公示してある一定の符號を送つて居るので、船は其れを受信しつゝ濃霧中と雖も針路をとり安全に航海する事が出來るのである。

斯の樣に方向探知無線は航海中の船舶に對し非常に有益なもので遭難を未然に防ぎ又既に遭難中の船の位置を知り、急速に救助の方法を講ずる事が出來、一般の船に對しては灯臺が夜中の航海に必要缺ぐべからざると同樣に、今後益々探知無線の必要が唱へられる事と思ふ。

目下英米の海岸には多數の探知局があり、又船舶にも探知器を有し充分に利用されてゐるのである普通探知局の測量距離は約三〇浬以內位から二〇〇浬以內位で、方向探知に使用する波長も他の無線通信波長と異にし相互に混信妨害がない樣に一定の波長があてがはれてある。

◇持ち物の話

吉田莊一

○滿鮮開拓の權本（豐太郎）さん、流石に長く外交畑を泳いでゐただけ、一品一什悉く貴重な資料品ならざるなきには驚かされる。

○陸奥さんの袱紗、小村さんのカウス釦、林（董）さんの何、伊集院さんの何。そしてその由來ばなしに至つては、總てこれ日本外交の極秘史である。

京城雜筆

簡易生活

保阪久松

人間生活が苦患の谷である事を感じる人々の多い時代に於て、私共は何うしたら自己生活の安定を得て、更に一歩社會に盡す迄に至る事が出來るか。夫に就ては私共は多くの言はむとする所あるも、此處には友人の生活狀態を記して私共の生活難は斯くして超越し、進んでは社會奉仕をも爲し得るといふ事を考へて見たいのである。此の春故人になつたが、京城に永く牧師をされて居た井口彌壽男さんといふ方があつた。

井口さんの生活は頗る簡易で、晝食は壜に握り飯で、副食物は大抵無かつた。家族の方も皆一緒に握飯で濟ざるゝ事が多い。トマトは井口さんの大好物で、トマトの副食物のある時は大層な御馳走であつたのだ。井口さんは右の手に其の儘トマト、左の手に握り飯を持つてむしや〳〵と如何にも美味そうにたべられて居た。

井口さんには二等主計の軍人恩給年額八百圓以上もあつたが、新潟教會建築の爲め永く此恩給を捧げられて居られたが、教會建築も出來、其恩給が再び井口さんの手に這入る時が來たので、友人達は恩給もおはいりになる樣になつたから、もう少し生活のレベルを御引上げになつてはどうですかと言ふと、井口さんは生活程度は一旦引上げたら容易に引下げる事は出來ない。僕は何時でも一定の豫算で生活をして居る。家族には氣の毒だが收入が殖へても臺所の豫算は增さない。殖へた收入は何時でも增減の自由に出來る方面に使用する。收入が減じた時直に減らされる方面なら差支ないが、此れを臺所の方面に廻すと、收入の增減に正比例して行はねばならないから、其れで僕は何時も最低限度の生活をして居ると答へられたと。

井口さんが能く收入の少ない中から多くの社會奉仕をされたのも此の一面があつたからなのだ。

私共人間生活には常に苦患が伴ふと共に、其れを超越した時―そこに歡喜と幸福が必然と湧き出るのである。亡き同君の生活は私共に多大のヒントを與へるのである

書齋にて

伊藤憲朗

×

さらばいて歸れるいのち秋深み椅子に憩へばこれの書齋よ

×

いろ〳〵の雜事はかなし夜を更けてはる〴〵來しと思ふ書齋よ

×

『雜筆』のおやぢの目玉はつきりと秋のしじまに映じつゝわれ

×

風をなみ靜かに居ればこゝろはも秋のしじまを憩ふなりけり

×

ふと見れば足無し人形轉れり机の上の夜の冷たさ

×

足無しの人形見れは仄仄と眠れる兒等のいのちいとしも

×

人形をほうればまろぶ又まろぶ兒等のこゝろのいとしき獨り居

×

ともすれは兒と語らざる日の續く雜事にさらびて歸るなりけり

×

あはれさは兒と語らざるそれならず雜事にさらばふあはれなりけり

×

いろ〳〵の雜事にさらびこれの室歸り來たれど文は讀まなく

×

しかあれど雜事にさらぶこゝろなり文は讀まざるあはれなりけり

◈風流人奇話

吉田莊一

○

時實さん在任の當時、一日工藤武城さんが、知事官邸を訪ふ。すると、達磨の美事な木彫りがある『ふうむ』と感心してゐると、時實さん得意滿面『欲しがるな〳〵俺が死んだら君にやるよ』

○

それから二三ヶ月後、時實さんが工藤邸を訪ふと、華山のスバラしい人物畫『君ッ、これは何處で手に入れた』工藤さん昂然として『欲しがるな〳〵、ワイが死んだら、やるぞ』

○

そこで、兩雅客は相約して、おの〳〵夫人に命を傳へ『死んだらアレをやつてくれ』と、堅く遺囑したのはいゝが、一日工藤さん、日南ぼつこをやりつゝ獨言しての曰くが『年からいふと俺が一ッ下だ、さうだ〳〵、ふふん、しめたぞ〳〵』獨りで膝を叩いたのは、イヤお人がわるい。

參考品

—井上収さんへ—

片岡喜三郎

十人近くの子供の持ち主で、精力旺盛な井上さんからしば〳〵『後妻小母さん論』を聞かせられるのはいさゝかくすぐつたいやうな氣がする。が井上さんは情味たつぷりの人だからこの『小母さん論』も決して『いらざるお節介』だとは思はないし、ご尤な節々も多いやうに思ふのである。そこで體驗者の一人として參考品を呈したいと思ふ。

一體夫婦と云ふものは結婚の當初、死ぬときは一所に死なうと約束したものでないから孰れか一方がお先に死ぬものであらう。たゞ時期が問題になるだけだと思ふ。それで『のんきな父さん』氣取りで家事の萬端、子供の養育、凡てを任せきりにしてゐた人が俄かに妻に先立たれた場合も考へて見ねばならぬが、浮世の杖とも柱とも頼りにしてゐた夫が死んで多くの子供と共にこの世に取り殘され、未亡人と名稱の改まつた人のことも考へなくてはならぬ。甚だ申しにくいやうであるが井上さん御夫婦なぞも今でこそ何一つ不足不滿もなく多幸多福にこの世を送られてゐるものゝいつかは何れか一方が先にこの世を辭する事になるのは已むなき既定であると思ふ。たゞそれが既定でも八九十の老齡になつて子供は皆な立派に成人した後のことか、われ〳〵同樣の年頃に於てゞあるかが問題だけであるとかうしたことは萬一の場合だとは考へられないのであるが、萬一の場合であるなしに拘らずこの事柄に當面した人々に取つては容易ならぬ問題として日夜懊惱苦慮せねばならぬ事件である。まづ妻をなくした場合に死んで行つた妻の事は別問題として直下の憂慮の焦點は母を失つた子供らである。この世の凡ての子供らが最も大事なものなくてはならぬものとして何よりも慕はしくしてゐる者は自身の母である。世の中のいかなる立派な女でもこの母のうめ合せは出來ぬ。その大事な大事なつかしい母が失せてしまつたのである。明けても暮れても母を戀ひ慕ふのは無理がない、母をなくした子供の心情程悲慘なものはまたとあるまい。その有樣を日夜眺めてゐる父親の心持ちと云ふものは筆や言葉で盡せるものではない併し子供らがいかに泣いたとて死んだ人は出て來ぬ。たとへ後添の母が出來たとてそれは母ではないそれを母と思はせるのは無理である。さればと云つて他に方法はなし、誠に以て困つた問題でかう云ふ點では井上さんと同意見であるが『小母さん』はどんなものであらう。來て貰ふ方はいゝとして、今の世に人の妻となつて來たものがその子供らに終生『小母さん』と呼ばれて滿足できるであらうかそこで苦しまぎれに案出したのは『あきらめ』の心である。『ほんとの母ではないがほんとの母に代つて世話をして呉れる親切な人』と云ふ心持に子供を導く外なからうかと思ふ。

かうして妻をなくした男の頭は母をなくした子供のことで一ぱいである。子供を如何にすべきか第一義である。享樂欲求などは殆ど問題でない。そんなことは豐澤圈内に屬することゝしか思はれないのがこの場合の心情である。井上さんのご一考を煩したい點である。

けれども世間と云ふものはとかく中間宣傳が意外に多いものである。自分は妻をなくして以來宴會の席上などで必ず一二度は問題にふれさせられる。『どうだいつまで獨りで居るのかい。おれがいゝのを世話してやる。條件は大分むつかしいかな』と云つたやうなことが幾度も繰り返される。併しかうして世話して呉れると云つて手形を發行した人は醉ひがさめると忘れるのか適任者がないのか、要するに手形は不渡りになつてしまふ。手形の不渡は是非もないがいつのまにか『ありや中々條件がむつかしくてね』と云ふ宣傳が構成されてゐる。この條件といふ中には主として井上さんの所謂享樂欲求の分子が含蓄されてゐるやうである。かういつたことで男やもめと云ふものは思はざる痛くもない腹をさぐられる場合が多い。女にしたら尙更のことであらうと思ふのである。

◇煙のゆらぎ

山口のぼる

專賣局事業課長の中村さん、大にマジメ腐つて曰く『僕は書かんが讀む方は熱心だよ、君ん所の雜誌など、いつも二度まで、繰返して讀んでゐる。エライもんだらう』實際、中村氏は讀書家らしい▲東洋生命小林さん曰く『口でシャベルことなら、決して敵にうしろは見せんが、筆と來るとドウも性に合はんでネー……』

首鼠兩端

今村鞆

首鼠兩端を持する事は、新羅以來、朝鮮の外交國是として執つた唯一の方針であり、今日でも猶、此の餘臭が多分に潜在して居る。

大閤秀吉の征鮮に對し、應援の師を朝鮮に送り、爲めに國力を消耗して、明の天下が漸く傾かんとした時に、朝鮮の廟堂諸公は、斯る大勢を洞察するの明なく、明を天朝と崇め尊んで、是れより上の强い國は無いと思ふて居た、何んぞ測らん、常に胡虜北狄よと卑めて居つた、北方の雄愛親覺羅氏が崛起して、中原に明と天下を爭はんとし、風雲急を告げた。

初めの日は、朝鮮の廟堂諸公は秀吉の征戰の時と同じく、龍車に抗ふ螳螂の勇位としか考へて居なかつたが、事實に於て愛親覺羅氏が、着々と其實力を示すに及んで遽かにあわて出した。

此大勝負に付ては、朝鮮の向背云ふ事が、大局に軍大なる影響を及ぼすのであるから、双方から朝鮮に對して、武力を以て意志の決定を迫つた、一定の國是なく武力なき朝鮮が、此時程困つた事はなかつた、外交上慣用手段の首鼠兩端の發揮、夫れを走馬燈のよふにやつた。

遂に愛親覺羅氏は、明の天下を覆して都を燕京に定め、國號を清と號した、朝鮮は其の首鼠兩端方針が祟つて屢清の征討を受け終りに國王仁祖は南漢城に避れ、遂に清將の前に降伏して封冊を受けた

其時よりズット後迄、明は全く亡びては居なかつたから、降伏の後も猶、朝鮮は迷ひ惱みて、首鼠兩端を、全く捨てなかつた。

斯ふ言ふよふな、平凡な歴史の話を書く積りでは無いが、此れ丈は書いて置かんと、以下に書く話の意味が徹底せぬから——と思ふて書いた、是から書き出す物語は、此時分の時代精神と云ふよふなものを、後世に至つて、誰かが物語り化したものだと思はるゝ、無論事實では無い

× × ×

ある日、廟室で會議が開かれた國王の前には、大臣悉く參列して甲論乙駁して、事體が頗ふる緊張して、何時果つべくとも見へなかつた。

其の會議の要點は、今清國の正朔を奉じ、藩禮を取つて仕へて居るが、是れ迄に祀つて居つた、明の皇帝の位牌を、如何にすべきかと云ふ事であつた。

若しも此事實が、清朝に知れた時には、今に二心あるものとして咎を受けるであらふ……と云ふて若し此の位牌を毀つて、祭祀を止めるとすると……萬一明が天下を恢復した曉には、又た大變な事になる、片方立てれば身が立たぬ、兩方を立てゝ身の立つ工夫は無いかと、一同が有り丈の智慧を絞つたが、頓と名案が浮ばない。

其時、席末の一人が進み出で、『よい考が浮びました、此の問題は迚も我々の考には及びも付きませぬ、彼の有名な、朝鮮一の學者で智者で天眼通である、〇〇先生、あの人は今△△山の奥深く隱栖して風月を友として居らるゝ、あの人の智惠を借らばゝ屹度よき方案があらふと思ひます』

『夫れはよい所へ氣が付いた、夫れが一番よろしい』

一同贊成して、軈て二人の使者が國王の命を含みて、〇〇先生の許に派遣せられた。

使者は、山深く分け入つて、先生の栖家に到著して、案内を乞ふたが、生增先生は里へ出て行つて一人の童子が留守をして居つた、使者は應接の間に通されて、數時間待つて居る中、先生が歸つて來たけわひである、童子から都からお客さんがあつて、別室に待たしてある……と告げて居るが一向先生は顔を出さ無い。

暫くして、先生は童子と別室で雜談を初めた、使者は耳を濟して聽いて居た。

『今日は途中で面白いものを見たよ』

『へエー……夫れはドンナ事柄でありました?』

『夫婦喧嘩だよ』

『夫婦喧嘩なら農民共は始終やつて居ます、別に珍らしいとも思ひませんが』

『夫れが又運つた夫婦喧嘩だ』

『摺鉢と摺古木でも持出しましたか』

『そんな事では無い……斯ふ云ふ譯だ、何んでも其妻君は、前の夫が死んで二度目に、今の夫を持つたものらしい、喧嘩の起りと云ふのが、其の今日が丁度前夫の命日であるらしい、乃で前の亭主の位牌を出して、祭つて居つたのを、今の亭主が見付けて、怒り出したんだ』

『エライ悋餅屋と見へますね、何も死んだ者に、燒餅を燒かんでも、よさそふなものではありませんか』

『ソコダ!、ソコを妻君が言ふんだ……夫れが人情の美では無いかと言ふんだ、死んだ亭主に

立國となり洪武の建元まで、二百六十六年間に於て、公文書は清朝の三朝と同じ

くなるでせう。又免囚者を保護する者なかつたら社會の安寧は現在より以上に悪者ばかりの

清將の前に降伏して封冊を受けたば〻屹度よき方案があらふと思ませんか』

京城雜筆

『ソコダ！、ソコを妻君が言ふんだ……夫れが人情の美では無いかと言ふんだ、死んだ亭主には未練は無いが、一年でも、二年でも、同棲した人と思ふて祭るのは、人情だと云ふんだ』

『それでどふ成りました？』

『妻君の言ふ所に理があると思ふた、亭主は忽ち怒りが釋けたと言ふ譯さ』

此の問答を洩れ聽いて居た使者は先生の天眼通と明智に感心して、其儘出發して京城に歸り、一同へ此話を復命して、廟堂の難問題も忽ち解決した。

× × ×

此の小話はつまらぬものだが、朝鮮の味ぢと云ふものが、よく出て居る。序に附記するが、仁祖が清の封冊を受けて以來、獨立國となり洪武の建元まで、二百六十六年間に於て、公文書は清朝の正朔を用ゐたが、拗て建碑とか云ふ樣な、後世に殘り、人の見るものへは、明の最後の年號である、崇禎を用ゐ、崇禎紀元何百何十年と、實際に無い年號を使用して居た、如何に清朝に對する怨を、永く忘れなかつたと云ふ、弱者の心理を見る事が出來る。

過日光化門から出た上梁文に、同治四年と清の年號を使用して居たのを見て、自分は奇異の感を懷いたが、同治四年は、慶應元年に當り、大院君攝政時代であるから、清に對する思想が大分變つて居たと、見るべきであらふ。

訴ふるの書

早田伊三

皆さんは毎日、新聞に掲載されてある殺人、傷害、强盜、詐欺、橫領、贓盜等の記事をどんなに觀察せられますか、毎日のこと故視神經の感應が鈍い御方もありませう。然し靜に考へられたら險惡な世相を痛感せらるゝであらう。尙ほ澤山の不良事件は新聞の報道以外に毎日發生して居ります。新聞面の世相は其一端に過ぎません。

皆さん、なぜ人間は惡い行を爲すでせうか、其多くは生活の不安と無知のためであります。如何に思想善導を叫んでも生活に安定がなければ人心は險惡になります。故に吾々は人間の心を清くし、社會を平和にするには先づ生活の安定を與へよと主張します。生活の安定を與ふる方法は政治問題に觸れますから玆には申しませんが、要するに社會政策を改良實行すれば良いと思ひます。然し其効果は將來の事で現在の問題は別であります。今此の世の中には救助せねば社會の善と美を傷くる者が澤山居ります。社會事業は主として此等の人を對照として働きます。社會事業を簡單な慈善事業と思ふは時代錯誤であります。社會事業は社會事業連帶責任の觀念を基礎とした人世の美化作用であります。此社會に孤兒院がなかつたら、乞丐浮浪の徒は益々殖えて泥棒は現在よりも多くなるでせう。亦行旅病人收容所がなかつたら、道路のあちこちに病人が仆れて泣く者多くなるでせう。又免囚者を保護する者なかつたら社會の安寧は現在より以上に侵害せらるゝであらう斯樣に色々考へると社會事業の必要な事が御解りになりませう。

朝鮮に於ける社會事業としては和光敎園、京城佛敎慈濟會、救世軍育兒ホーム、鎌倉保育園、天主公敎會孤兒院、向上會館、釜山の共生園其他澤山あります。處が皆經費不足で經營者の思ふ樣に活動がでけぬ樣であります。そして私は皆さんの同情心に訴へます、社會事業の費用は一部篤志者の寄附金にのみ任せるものでありません社會事業に要する費用は社會全般の人が負擔すべきものであります皆さんどうか其心中に潛んで居る仁愛の精神を振ひ起して社會事業の經營を援助して下さい。

◈江湖風聞錄

吉田莊一

○朝鮮郵船の吉村氏といふと、變り種で知られてゐる男だが、この程も、西鮮日報社長の長谷川君を、たぢ〳〵とあとしざりさせたのだ。

○といふのは、逢ふとイキナリ三四遍ペコ〳〵と頭を下げたものだ。そこで長谷川君が、あッと驚いてゐると『君、もう一遍頭を下げやうか、僕もいよ〳〵頭を下げる商賣に變つたので、毎日この通りやつてるのだ、何んならもつと下げてもいゝよ』……に溫厚な長谷川君『イヤ、もうそれで、澤山〳〵』

○米田京畿道知事は、良二千石として評判の良い人だが、どういふものか到るところ綽名で以て通つてゐる。平壤では曰く『米甚さん』清州では曰く『甚太さん』

食物と迷信

佐藤剛藏

近年になり榮養方面の研究は實に盛である。從て食事に關し從來習慣として來たことが存外榮養上の根據のあることも認められ、捨て難い意義のあると思はるゝことが數々ある。一日と十五日に小豆飯（赤飯）を食べるとか、刺身にユズ、ケン　ツマ）を添へてあることゝか、ヒタシモノ（浸物）とか、又土用に鰻の蒲燒とか、小兒のオヤツ（御八）とか、數へ擧げると誠に多數ある。最近の說ではリボイドといふ榮養素の一種が子孫繁榮の上に大なる影響を及ぼすものと動物試驗で氣付かれた。この說では稍具體的にリボイドの一種なるヒヨレステリンといふものや、レチチンといつたやうのものが生體の血液の中に存在する割合比例によつて男が生れる又女が生れるとのことになるといふやうのことも述べて居る。然し之は目下の處猶多くの實驗を重ねざれば正確受合といふことは言ひ兼ねるが、スルメイカなどにも相當にヒヨレステリンが含まれて居る、古來祭日や祝日の席に必ず用ひらるゝ習慣あるは或は子孫繁昌の御目出度さと因緣がありさうにも考へられる。又正月に無くてならぬゴマメ（タツクリ）や數ノ子にも勿論若干のリボイドは含まれて居るであらうし、又之等にはビタミンAも相當にあるといはれて居る。Aビタミンは個體の發育生長に特種の關係がある點から見ても、數ノ子やゴマメは榮養上價値あるものであり、旁々正月早々から家內安全子孫繁昌を期することの喜びと結び付けて見られぬでも無い要するに食事に關する舊來の習慣の數々は悉く皆迷信からだとして終ふことは出來ぬと思ふ。

◈滑稽碁戰記

山口のぼる

釜日社長の芥川氏、朝鮮及滿洲の羂尾氏といふと、いづれも操觚界の元老で、口やかましいこと、天下周知の先生達である。

○

ところが、兩公とも碁の弱いこと天下無比で、さすがの記者も傍觀して、すつかり腹の皮をよらされてしまつた。

○

といふのは、兩公とも弱いくせに氣が莫迦に强く、互に相手を罵倒しつゝ、勇戰してゐたのはいゝが、昂奮のあまり、双方が双方とも敵のアゲ石をつかんで盛んに打つてゐる。これは變だと思つて見てゐると、羂尾氏『オイ、鳥渡待て、これはおかしいぞ』じろ〳〵局面を見てゐたが『ふむ、老公、これはやり直しだ』『莫迦いへ、事こゝに至つて……』『イヤさういふな、君も僕も白と黑とを途中から間違へてゐる……』そこで芥川氏驕つてぢつと手許を注視すると、座石にあるのは黑の石入れ、そして現に手につまんでゐるのはその蓋に中においた白――即ち敵のアゲ石なので『ハハーン、君がぼんやりしてゐるから！』

○

そも〳〵芥川氏は、奇骨稜々の士である。その昔有吉總監をつかまへて『アンタは、文化饅頭を食つたことがありますか』『ツイそお目にかゝつたこともない』『ソリヤいかん、ぜひ食つてごらんなさい、ちつとも壇ッ氣がなくて、あまつたらしいこと、正にあんたの文化政治、そのまゝです、オホン』芥川翁はこんな先生である。

藝當を舞臺でアザヤカに演じて見せた。兎も角四人分の飯を彈く間

我々八つも九つも年少の後輩に對してさへ決してゾンザイな言葉を

岐部將軍

——富雄サンの追憶——

工藤重雄

本誌八月號舍兄の『岐部お袋』の中に『其二男坊富雄サンの奇行は愚弟が書く筈だ』と、イラざる筆を走らせた。本篇は此厄介至極なる豫約の義務履行である。

岐部將軍とは富雄サン自ら稱し人も許した富雄サンの通稱である併し記者は幼い時から岐部サンで通した。岐部サンは時あつて征露將軍と號し、日清戰爭後は露國贈慍を以て終生の天職と自信して居た樣だ。併し不幸にして將軍は日露役には從軍の志を達しなかつた日露戰爭當時某氏は『征露將軍健在なりや』と題して讀賣新聞に掲載したことがある。

夏目サンの『我輩は猫』を讀むと、鼻子孃に新體詩を捧ぐる理學士が、連りに硝子玉を磨いて、ドングリのスタビリチーを研究する所を書いてある。アノ理學士は誰あらう現東京帝大教授理學博士寺田宣彥氏である。將軍は此の博士と五高時代の同年生で且つ親友であつた。日本のラヂウムの權威として尊敬せらるゝ木下理學博士も亦將軍の親友で下宿を共にして居たから、今將軍が生きて居たら年齢四十八九である筈だ。

岐部將軍は藩の劍道師範を父とし、怪力肥後藩士を匍伏せしめた所謂岐部お袋を母として生れ、六食三膳と稱し六人前の飯を平げ、三人前の副食物を平げる程の豪傑であつた。五高の紀念祭に各々隱し藝を演ずる折に、將軍は大食の藝當を舞臺でアザヤカに演じて見せた。兎も角四人分の飯を瞬く間に空にして、お櫃の尻を叩いて見せる所で幕となり、大向を喝采させたものだ。而も將軍の藝當の眞價は幕後に發揮せられ、水前寺餅八十、饂飩八杯を食つて飄然として散歩に出懸けた。

將軍は食ふことに於て無双の手並を見せて居たが、食はざることに於ても他人の追隨を許さぬ斷食者であつた。當時熊本濟々黌の生後は西南戰爭に從軍した猛者を師とし、舊士族の子弟を中堅とし、筋骨鍛錬の爲めに、一週間位の强行軍を屢々試み、宿衞地に着くや直に集合擊劍を行つて自ら壯として居た。斯の如き場合には、將軍は出發の日に一週間分の食物を喰ひ溜めして、行軍中は一切食物を攝取せず水丈け呑んで居た。隨分亂暴な教育であつたが、岐部サンには尋常の茶飯事、一向平氣であつた。岐部サンは時々腹痛に惱まされて居たが、其の折には腹中の虫が動かぬ程に押へ付けて遣ると言つて連りに喰つたものだ。蓋し腹痛は腹中の虫の震動に原因するとは將軍獨特の病理學である。又た時ありては一週間位の斷食を試みて腹の虫を餓死せしむる方法を講じて居た。要するに藥餌に親しむは人間の墮落で、武士の潔しとせざる所だと口癖に言つて居た。

岐部サンは美少年であつた、眼涼しく、鼻すゞ通り、丹唇皓齒、女にも稀な麗はしい顏立であつた時に其の聲は全然女性的で、而も如何なる場合と雖も物靜かに、熊本御家中上流の最大級敬語を用ゆることを忘れなかつた。兩親に對しては正坐して兩手をつき、顏は稍々俯向けて恭しく應對して居た我々八つも九つも年少の後輩に對してさへ決してゾンザイな言葉を用ゐなかつた。

將軍は濟々黌を卒業してから五高（其の時分迄は第五高等中學校と稱して居た）文科に入學した。入學して間もなく體格檢査があつた、檢査は持參の札の順に行はれた。溫良恭儉讓を坐右の銘とせる岐部サンは札を所定の位置に並べ部屋の隅に小さくなつて順番の來るのを待つて居た。そこへ鹿兒島產の魁偉なる體の持主が傲然として岐部サンの札を跳ね飛ばして自分の札を並べた。岐部サンはオトナシク札を拾つて元の所に置いた。魁漢は女にも劣る岐部サンに遠慮は無かつた。又撥ね退けた。此んな無禮が三四度繰返された。岐部サンは丁重に自分が先番である事を說明した。侮る魁漢は岐部サンの哀願を聞かなつた。其が魁漢一生の過り、魁漢は遂に岐部サンを相手に喧嘩せねばならなくなつた

虫も殺さぬ上品風の岐部サンは柔道汲心流の奧の手を出して急所に當身を與へた。大木の仆れるが如き響と、腹に泌みる氣合の聲とで、始めて喧嘩と知つた人々は驚いた。岐部サンは大の男に馬乘りに乘つて頸締め三昧に入つて居た友達がマーマーと止めても岐部サンは『此のお方のお果てになる迄絞めます』と言つて、平常の靜けさと敬語を用ゆることを忘れなかつた。後、魁漢は息吹き返し罪を謝して岐部サンの名前を聞いた時に、武士は自ら名乘つてこそ人の名を聞くが作法だと言つてたしなめた。魁漢は益々驚いて自ら性名を名乘つた時、岐部サンは『私は肥後の國飽田郡嶽村字芳野の住人、細川越中守の舊臣、岐部丹後守の

京城雜筆

二男、同苗富雄と申します、私はあなたの樣な無禮は男は嫌いで御座います』と挨拶した。

岐部の風格の一班は以上の說明を以て、讀者は略々推測し得ると思ふ。奇談奇行はそれこそ枚擧に勝へず、當時畸人第一位にあつた此の溫厚な美男の富雄サンは其の死するや甚だ奇拔であつた。

征露將軍と自ら名乘る程露國膺懲を志した岐部サンは、軍人になれなくて五高の文科に入學した、而も五高を卒へずして退學し、何を感じたのか臺灣巡査を希望して孤影飄然として去つた。何等の悲みも名殘もなく春風の如く去つた

臺灣では自ら希望して最も獰猛なる生蕃人部落、到底日本巡査の行き難き所、曾て皇化の及ばざる所に駐在した。話は之からである

鄉里に於ては近來の畸人、喧嘩無双の美少年位に評されて居た岐部サンは、喰人鬼の部落に入つて他人の摸し難き手腕を發揮した。虎の如き蕃民は猫の如く岐部サンに服從する樣になつた。岐部サンは彼等を弟妹の如く愛撫し、彼等の家を家とし、彼等の食を食とし彼等と起居を共にして、彼等を敎育した。畸人岐部サンの物靜かな態度は討伐軍の鐵砲よりも鐵條網よりも遙かに威力を發揮したのである。

所で巡査は辭令一本で勝手に轉勤させられる。岐部サンにも轉勤命令が來た。岐部サンは住み馴れた蕃地を引き揚げねばならなかつた。岐部サンは蕃族を集めて離別の辭と共に將來を訓誡する所があつた。けどれも蕃人は岐部サンの轉勤を好まなかつた。辭令の何たるかを知らぬ蕃人は彼の留任を嘆願し、哀願し懇願して止まなかつた。岐部サンも彼等の小兒の如き無邪氣な、純な愛情に惹かれて戀々として去り難かつたが、命令なれば已を得ぬ、盡きぬ名殘を惜んで、下僕一名を伴ひ山超へ谷超へ歸路に就いた。道は嶮しく、而も遠かつた。聽て黃昏かるゝ峠を急ぐ岐部サンは思ひ懸けなくも首狩する蕃人の待伏せるのに出逢つた

ハツト驚いた岐部サンは、待伏して居る蕃人が自分が多年愛撫した部落民だと氣が付いた時には更にビックリした。蕃人は跪いて岐部サンの袖を引いて、も一度部落に歸つて自分達と共に住むべく願つた。此處でも岐部サンは他日の再會を期するも一應轉任は已むを得ぬ事を諭した。蕃人の岐部サンに對する愛着敬慕の念は、岐部サンの諭しでは捨てきれなかつた。到底顧の聽かれざるを知つた蕃人等は岐部サンの轉任を岐部サンに任せて、其の代りに岐部サンの首を所望した。此間如何なる劇的光景を演出したかは誰も知らぬ。兎も角も蕃人の鎌刀は血に濡れて、彼等の首袋には岐部サンの首が藏められた。

岐部サンが生蕃人に殺された報知は下僕によりて總督府に傳へられた。之を聞いて最も憤慨したのは岐部巡査である。岐部巡査は岐部正之君の事で岐部サンの義弟に當り、筆者と同級生であつた。岐部君は岐部サンと正反對に武勇傳中の野武士を偲ばせる體格、容貌及び氣分の所有者であつた。兄の敵打自分に命ぜられたいと申出てた。申出は聽されて岐部君は若干の部下を伴ひ、傳來の大刀に反を打たせ、毛ムクジヤの腕を叩いて出懸けた。

岐部君は酋長を捕へて岐部サン慘殺を詰問した。酋長は慘殺行爲を肯ぜなかつた。彼は岐部君を蕃人が心を盡して飾り立てた石碑の前に案內して、これが岐部サンの墓だと說明した。蕃人は『岐部サンは、自分達の師父だ、神樣だ、岐部サンを他所に奪はれるのは自分等の恥辱だ、自分達は岐部サンに訴へた、願つた、けれども岐部サンは聽かなかつた、歸る途中迄も追懸けて縋つて見たが岐部サンは耳を傾けて呉れなかつた。これ程迄戀ひ慕ふものを、聞かぬ岐部サンが怨めしかつた。停めて停まらぬものならば、せめて首だけなりと停めて朝夕懷かしみたいと思つて、お祭りしたのがこれこの塚だ』と語つた。

岐部將軍の死、それは憎まるゝが故の死ではなかつた、愛せらるゝが故の死であつた。岐部サンの死は畸人の死として相應はしい最後であつた。其の死顏には苦痛の色なく滿足のホヽ笑みがあつたであらう。

◇金剛山から

山口のぼる

○李王職醫局の池部（義雄）先生は、溫厚な紳士で、言語態度極めてつゝましやかな人だが、前號の隨筆『妻の置き手紙』は、あらゆる知友を驚かした『新しいネ、奇拔だ、痛快極まるね、あのおとなしい人の胸中に、あゝした文字を貯へてゐるのは面白い』

○その池部さん、この程金剛山に遊び、書を本社に、寄せて曰く『一千六百米突、金剛第一の秀峰に立ちて、貴社の萬歲を三唱し、諸卿の御健康を祝す』と。そして一句ひねつて曰く、

一岳一臺も史を藏す萬二千峰

雜筆に關する件

渡邊得司郎

あまり芳しい見出しでは無いが何々に關する件相成可然哉を十年もやつて居ると、時々こんな言葉が口癖に出る。

▼僕は近頃の世相にほとほとあきが來た。怪寫眞が出ると、怪文書が飛び出し、政治もそつちのけに黨派喧嘩を始め、何ケ月も新聞は大切な紙面を埋め、場合によつては內閣の運命にも關するのでは無いかと思はしめると、怪漢鬼熊が現はれると大勢は之に沒頭し、怪寫眞の記事は影を潛めた。內閣の致命傷とも騷がれた問題が一寸した三面記事で鳴を靜めてしまつたなどは、如何に見醜い政爭が演ぜられて居るかを痛感せしめる。お隣の張作霖君が戰爭を飯よりも好きだなどは笑はれまい。

▼此頃京城ではお祭り騷ぎで醉つて居る。そろ〳〵季節がよくなつたかと思ふと、總督府の落成式を筆頭に山林大會、水道大會、曰く何々會議等々、いそがしいこと夥しい。神社の大祭を中幕に府廳の竣功式で打ち止めらしい。物によつてお祭り騷ぎは至極結構ではあるが、公益機關の會議などはじみであつて欲しいものだ。所謂お祭り騷ぎにどれほどの經費を使つたかは知らんが、山林大會や水道會議の費用の一部をさいて松毛蟲の驅除法とか地下水のこと等について一般から懸賞的研究を募るやうな事も面白いと思ふ。尤も井戸端會議なら別だが。これは失禮。

▼運動熱の盛んなことも現時代の產物だ。京城の街を通ると色んな運動の催しでポスターに埋つて居る。運動が體育に重きを置くものとせば近頃の遣り方は少し脫線的だ。あまりに觀客本位に傾いて來た。この弊は敎育界に於ても實業社會に於ても蓋し尠くないと思ふ。僕は若いもの許りに運動を獨占せしめないで、中年以上のものに大に之を奬勵すること丶家庭的に妻君連にも適當の運動をやらせることを提唱するものである。

▼寄附は『してやるものか』或は『さして貰ふものか』について話題にのぼつた。同じ寄附は寄附でもこちらから進んで申出るもので無くては難有味がない。ところが近頃の寄附は官廳でも民間でも殆んど强要的のものが多い。しかも官廳では寄附顧と云ふものを書かされ、民間では申込書をとられる。寄附を拒むと惡く云はれる。結論は自分のものでも勝手に出來ないと云ふことになる。

遠征戰記

高畠種夫

大邱クラブ主催の秋季全鮮ゴルフ大會は、十日琵琶山麓のリンクで三十六ホールメダルプレーで開催されたが、京城からの參加者篠田、李恒九、飯泉父子、中屋、川上、伊藤、花園、小生の九名、元山より小林キャプテン出場、之に大邱のメンバーを加えて約三十五六名、秋晴の碧空に夢みるやうな白雲漂ふ下、絕好のゴルフ日和に加ふるに萬頃の黃波穗る平野を一眸に納め得る闊濶な高臺、快よい響を高鳴らせながら一同最も氣持よく競技を繰返したが、特に大邱對京城のメンバーは去る三日の京城主催の大會の直後の事とて一層の緊張味が漲つて居たが、午後六時半臺議白く山裾を流るゝ頃極めて盛會裡に閉會した。その結果は

實打　一等　成安（大邱）
同　二等　小河井（大邱）
同　三等　大橋（大邱）

ハンデキャップ

一等　上內（大邱）
二等　成安（大邱）
三等　高畠（京城）
四等　大橋（大邱）
五等　小河井（大邱）
六等　伊東（京城）
七等　杉原（大邱）
八等　神澤（大邱）
九等　伊藤（大邱）
十等　徐（大邱）

◇洋行の必要

吉田莊一

○靑南柳冥氏の禿げッ振に就て一般禿頭論に及ぶと、高橋婦人科長『あちら（歐米）では、禿げの受けは好いですヨ、年が若くて、キレイに禿げる人は、親切で、安心してつき合へると、女の人が皆んな申してゐます』靑柳さん、ツルリ頭を撫でゝ『ドウしても、洋行の必要がある！』

○京城府圖書館長の上杉氏、繪筆を執ると、實にうまいもんだ。その達壓などは、實際筆勢跌蕩、どんな大家の作かと思はれる。聞く所に依ると、氏は年少繪畫に長じ、その十二三の時、數年間も、某大家の許で、畫家となる修業を專心やつたものだと。

生死（中）

井上要二

余常に思へり或機會に際會し、手術臺に乘りて大手術を受けん、而して自己の精神が如斯場合に如何なる狀態に活動するやを體驗せんと、今や植村博士の診斷の結果偶然大手術を受くるの機到來せるを思ひ、博士に對し大手術を受くることは多年の宿望なり悅んで手術を受く可しと答へた。

手術前二十四時間の絕食を要すとの事にて、入院後何物をも攝取せず一晝夜を經過せり、手術の時近けりとて、七月四日午後一時灌腸二回なりしも何物をも排泄せず聞く所によれば魔睡手術中糞便を排出する醜狀を呈し、或は放歌高吟する樂天的の動作、或は之に正反對の悲觀的の發表をなす者、或は平素秘密に附し居る事を暴露するなど種々の事あると、余は手術中斯る面目なき言語動作なきようにと心密に心願しながら手術臺に乘れり。大手術を施すには魔睡劑を與へらるゝことを知る、睡眠劑といふ、余は手術臺に乘りて其藥劑を與へらるゝまでは睡眠といふ愉快なる言葉あるため、氣持よく安樂に就眠することを得るものとのみ覺悟し居りたり。熱度高かりしため意識不明瞭にして其當時の記憶は朦朧たるものなるも、其睡眠に陷るために與へらるゝ藥劑は鼻に嗅がしめられたる如く感じたり。後日聞く所によれば網を以て造りたる『マスク』をあてゝ其上より魔睡劑を振りかけられたりとの事なり。睡眠に陷る時は口中へ口に入るゝ能はざる如き石のやうなる物を强ひて入れられ呼吸を壓迫せられたる如く感じ、其苦しかりし事、精神狀態朦朧たりし其當時の記憶として今尙忘るゝ能はざる所なり。

余は其時より思へり大手術を施す時、與へらるゝ藥劑を睡眠劑とか魔睡劑とか言ふ如き穩かなる言葉を用ゆるよりは、假殺劑とでも名づけたる方が適切なる名なるべしと思ふ。殺さるゝと言ふ事は苦痛なる事に相違なし、其覺悟あるべし、睡眠の言葉は適切ならずと幸に假殺せられ手術を施され手術終り、十二三歲の小兒の大聲號泣せるに目覺め手術場を引き出さるゝを覺え、手術終りたることを知り、自己の病室に運ばれ余の大軀を運搬車より寢臺に移すに當り看護婦數名大に難澁せるを見て自ら體軀を移したるを覺え、再び睡眠に陷りたり。數時間の後目覺め十數日間の背部の疼痛の苦痛と熱發の煩惱は洗ひ去られたる如く氣分爽快を感じ手術も苦痛を感ぜず相濟みたるを悅び、言句に發表する能はざる快味を感じたるを以て、連日余のために寢食をも忘れて看護に從事せし妻に對し其勞を謝し種々十數日間の談より手術前後の狀況等につき談を交へたるが、思へば大手術後は絕體的の安靜療養を要すと聞けり、今快く感ずるも談話などなすは宜しからざるべしと自覺し、安靜靜養せんとせしも神經亢奮せるものゝ如く就眠する能はず、嘔吐さへ頻りに催し來れり。この儘にて進まんか、手術後の養生法としては頗る宜しからぬ事なるべしと思ふ時、夜も漸次更け來りたるを以て催眠劑を飲みて眠らんとし、之を要求し嚥下せしに忽ち嘔吐し嚥下する能はず。後にて聞けば其の當時は余の病は頗る重態に陷り、脈搏の調子頗る惡しかりしにより、若し睡眠劑を嚥下せんか睡眠と同時に生命を失ひたるやも計り難しと。睡眠して精神の亢奮を抑へ病の進行を抵ぐため飲まんと欲して要求せしものは其當時の致死劑なり。而して之を求めて之を嚥下する能はざりしは天佑といふ可きか。これ余の生命觀に對する一體驗なり（續く）

◇德ちやん話

平田久雄

○文藝春秋十月號――芥川龍之介氏の『追憶』の中に、幼稚園に通つてゐた頃、本間の德ちやんがちよい〳〵自分をいぢめた――といふやうな條があつた。

○記者は、直覺的に、本間の德ちやん、ふむ、京城土木出張所長の本間（德雄氏）さんだなと思つて、逢つたら一番からかつてやらうと、機心勃々で待ちかまえてゐた。

○その晩丁度逢つた、早速『時に……』と例の問題を出すと、折よく傍にゐた本間夫人も『あたしも讀みましたわ、あれはきつと貴郎よ』贊成者が一名殖えた。

○すると、溫厚な本間さん頭をかいて、違ふ〳〵それは余く人違ひ、僕は高等學校時代、芥川君の一級上で、その時初めて同君を知つた位で……と固く執つて降參しない、そこで、記者はどうもそれらしく思ふが、併しこゝは本間さんの人格を尊重して、當分本件を留保しておくことにする。

二十五週年紀念

特價販賣

創業以來貳拾五週年の經驗を有し最も信用あるペーチカとして鮮滿第一と定評ある

宮崎式ペーチカは

今回商工省發明奬勵費交附規則ニ基ク發明表彰規定ニ依リ審査ノ結果優良ナル發明ト認メラレ有功賞牌及賞狀ヲ賜フ

特色と効果

一、放熱强大
一、完全燃燒
一、保健衛生
一、燃料半減

本年度新發賣三號型

在來品に改良を加へました陳列所も落成致しました實物御覽下さい

御申越次第カタログ送呈

京城府龍山驛前　電話龍山長八四二番

宮崎組本店

京城府本町三丁目電話本局二八八九番

同京城販賣部

十居八段主幹
月刊
將棋新誌
（一冊定價金三十七錢）
東京市橋區西紺屋町五
發行所
將棋新誌社

市内永樂町二丁目
木戸齒科醫院
院長
木戸虎藏

西洋料理
支那料理
東京へお出での節はどうぞお立寄りください
東京芝區新櫻田町一七
泰明軒

市内明治町二丁目
内科
小兒科
中島病院
院長
中島貞信

市内明治町二ノ七五
利根川齒科醫院
院長
利根川清治郎

市内旭丁二丁目
外科
皮膚科
瀬戸病院
院長 瀬戸潔

高級
京染
（新柄見本到着）
京城本町三丁目
あらぎ屋
電本三〇六八
振京五八三

人生の幸福は健康より
建康それは麥精の服用によつて解決します明日と云わず今日から而して人生の幸に向つて
（定價內用二十瓦入壹圓五十錢）
京城本町二丁目
總督府參與
特許賣元
貴生堂藥品店
電話本局一三八
振替京城七六二

市內鐘路一丁目
濱洋服店
電話光化門二四四

市內吉野町一丁目
內科
小兒科
木村醫院
電話本局七二五

◎銘仙と
毛糸◎

株式会社
ちゝ姫や

堀内滿輔

電話本局
八五五
九〇〇
〇六五
番番番

◎多少に拘らず御用命
の程を願ひ上げます

愚存二三

松本武正

政治時事の自由

本誌は、九月二十二日附の指令を以て、政治時事を、報導論議するの自由を與へられました。

併し私は、本誌を政治雜誌とする意志は、毛頭ありません。實をいふと、その種の雜誌は、この京城には、むしろ多きに過ぐと、私は考へてゐるのである。何を苦しんで、屋上更らに屋を架するの必要があらう。

また一面からいふと、本誌創刊三週年、この京城の知識階級に、清閑執筆の慣習を傳道すること幾千幾回。實にいふべからざるの慘苦を經驗してゐるのである。そして今ま現に三百六十有餘名の寄稿家を擁してゐる。どうしてこの苦慘の歷史と、血涙の地盤とが、一朝弊履のやうに捨てられやうか。

これまことに私の所懷なのである。

併し世に、不公と不正との種子はつきぬ。公論清議の必要は大にある。寄稿家は、時に臨んで、敢然蜂起せらるゝも、もとより妨げない。

たゞ私は、これを俗論の府としたくないと思ふのである。

一小社屋の計劃

本社のやうな立場、本誌のやうな性質から考へて、私は一小社屋をつくつて、これを同好の集會談話室とし、また讀書娯樂室としたいと思つてゐた。發程三年になるから、もうやつてもいゝと考へるのである。若し資力の十全を望んだら、決行の時は、これ百年河清であると思ふ。そこで、一方には借金をし、他方には篤志家の御援助を得。近くこれを實現したいと思ふ。他人の懷をあてにするなどは甚だ不心得であるが、私は金の點は零である。どうか笑うてさうしてお助けを乞ふ。

本號に對する御意向

ついでこゝに申して置く。本號は少しく模樣を變へ、表題等を小さくし、少しでも多く蒐集したいと計つて見た。併しお感じはどうであらう。面白くなければ、いつでも復舊する。どうか御意向をお聞かせ下さい。

◈ゴルフ奇談

吉田莊一

○

京城では、飯泉さんが親子そろつて、ゴルフをやる。大邱では、河合朝雄君父子が、轡を並べて奮戰に及ぶ。

○

その河合君のところへ、京城の高畠糧夫君が泊り込んで、酒間『大邱の連中には負けない』と、大にメートルをあげると、河合君年甲斐もなく『ウム、ちや明日俺と決戰しやう、負けた方が將來何處で逢つても頭を下げるといふことでどうだ』『よろしい、大に戰ひませう』

○

斯くて翌日、琵琶山下で、大に戰つたのである。そして武運拙く河合君慘敗したのである。スルト先生唇をそらして『オイ高畠君、君のやうな男はないぞ、タダで汽車に乘つて來て、俺のうちに泊り込みの、酒をうちくらうて、太平樂を並べ、それで大邱の賞品をブツタクリの、おまけに宿主の俺に將來頭を下げさすとは、天下の不合理もコヽに至つて極まる。もう一晩泊まつて、俺の勝つたところで、サツサと去にやがれ！』

○

その河合君は、性、最も客を好み、いつて行つても、五六人の客の絕へたことなく、宛然一箇のホテルで、汽車の發着するたび、來るもの、去るもの、玄關はゴツタ返してゐる。中には知人のまた知人が、そのまた、親戚な男をつれて泊まるので、主人と客とが風呂場で會つても、テンデお互に顔も知らんとは面白い。

海から陸を見る

松崎嘉雄

凡そ陸上生活の渦巻きの内に醞釀せらるゝ所謂浮世なるものも、海に住む者より眺むるときは、又一種色彩の異つたものに見ゆる。即ち海に住んで見て初めて陸上に住む難有味も分れば苦痛もわかるしかもそれは生れて以來陸にのみ住んで居る人には一寸氣の付かぬ苦樂である。人文の發達に伴ひ人類の棲息する區域も次第に擴大せられ、今や大空を翱翔する飛行機に生を營む人もある。海底を行く潜水艦に生活する人も出來た。そしてそれらの人々は、亦陸上生活を夫々異りたる眼を以て見て居る例へば飛行士は一旦滑走して大地を離るゝや、大川は銀製のピンの如く、山林花草は友禪縮緬の模樣を見るが如く、岸打つ怒濤はアンコロ餅にぶちかけた白砂糖の如く千古の神秘を藏したる富士山は喜んで握手を求むるが如く、或は夕燒けのする入道雲を眼下に見る等天地は恰も一幅の水彩畫を見るが如くに感じ、自分等の住んで居る陸地はこんなに美しいものかと驚くのが常であるといふ。之れ亦空行く人にして初めて解し得る陸上生活觀であらふ。それは生れて以來入地を離れたることのない吾人には想像もつかぬ境地である。恐らく潜水艦員も亦水中に於て陸人の氣付かざる或者を體得して居るであらう。例へば潜水艦の内部は無數の電線を以て連絡配置され、スウキチ一つで、開閉自在、一投手もゆるがせにすることが出來ない。而して室内容積に限りがあるから冗員は、一人も居らぬ。艦長初め海老のやふに小さくなつて居る。イザ潜航となれば上は艦長より下は水兵に至る迄、夫々配置につき、各分擔のスウキチ、バルブハンドルに全精力を傾倒する。若し一人が過失を起せば大變が起る例へば潜水に當つて入口の支水戸を閉塞するを過てば艦の沈没を來さぬとも限らぬ。だから全員は極度に神經を鋭敏にし、艦長の顔に不安の色が起れば全員不安を起すといふ眞に機械と人とが一團の活組織となつて水中を行くのである豈かくの如き緊張したる、團體的社會が曾て陸上にあるであろうか！。若し夫れ吾等社會が、上は首相より下は掃除夫に到る迄、一致如此緊張して居つたとしたならば一國の興隆は計り知るべからざるものがあるであろう。兎に角此等潜水艦員から陸上の社會組織を見たらおかしなもので、だらしのないものに見ゆるであろう。又テレスコープから見たる陸はどんなであろうか？。

扨て海に住む部類にも帆船、汽船、漁船、軍艦等種々目的の異なる船舶に住む所謂船乘家業もあれば、絶海の孤島に住む燈台守もあり、千尋の底にアワビを捜す海女もある。地球上、海に生業を營む人類は中々に多い。殊に環海國たる我日本の如きは海人と陸人との比率は他國に遜色ないものと思はる。然り而してとカタ苦るしく云つても、云はなぐつても、正直な處海人は澎湃たる風濤の大自然力に直面して陸地を想ふ時、平素餘り氣にせぬ物がクッキリと腦裡に浮むことがある。例へばこれがお前の家族や知己であるぞよと、丁度彫刻を示さるゝやふに、力强く鮮明に家族や知己といふ雛型を神より指示されるやうな感じの湧くことがある。然し海人は此の感じを筆にし口にするものは尠い。之れ海人の一般通有性とも稱すべき何物かゞそこにあるのではあるまいか？。故に海人にして海の生活を誌し或は海を畫いたものは古往今來極めて稀である。稀であるから海人には出來事が尠いのだといふのは間違ひである。

水と雲とに依つて自分と陸とを遠く隔てられたるが爲痛切なる感じは中々に多い。しかし默して之を世間に發表しやうともしなければ、又其の發表する機會も尠ないのである。長い月日の間海上にあつて後初めて綠深き陸地に接するときの土の難有味は、只土を踏むといふことそれ自身が眞に愉快である。又兒犬が走つて居るのを見ても無暗に嬉しい。道行く人は皆親切に見へ、自分を歡迎して居るかの樣な顔に見ゆる。こんな感じを發表した處が餘りに平凡に過ぎるので陸上人は共鳴して呉れないから、遂ひ發表を見合はすことゝもなるのだ。僕は一航海者として海上より見たる陸興味を、左に二三述べて見たいと思ふ。しかし或は前述のやふに土を踏む喜びの類に終るかも知れないのを恐れる。

（つゞく）

◎平山式食堂

石川利夫

總督府醫院前に立派な洋式食堂が出來て、入院者や通院者に多大の便利を與へてゐる。安くつてウマイといふ評、平山牛乳王の經營。

迷想冗記

——參政權要求——

藤村德一

故閔元植（國民協會長）氏に依りて首唱せられた參政權附與の運動位矛盾した得手勝手の要求はないであらふ。

それに近來は內地人で識者を以つて自ら任じ居る堂々たる人物まで之れに共鳴せらるゝに至れるは少々怪訝に耐へないのである。

權利を主張せんと欲せば須らく先づ自己の負擔に屬する義務を完全に履行した後でなければ其要求の妥當ならざる事は今更私の呶々するまでもなく千萬御承知の事と惟はれます。

衆議院議員として國政に關與するものは國民としての納稅や、徵兵の義務あるものゝ有すべき權利であつて、年々內地より多額の補助を仰がなければ何事も爲し能はざる實狀なるのみならず、萬一日本帝國が戰亂の爲めに危急存亡の秋に當りても自ら進んで干戈を取りて君の馬前に否國家の爲めに屍を曝らすべき義務なき朝鮮人士が國政にのみ參與せんとする事は餘りに蟲の良き蝦魚で鯛を釣る以上の所謂『ヤラズブッタクリ』主義ではあるまいか。

殊に何千何萬といふ人の連署したる請願書なるものは果して各自に署名捺印したるものなるや否や眉唾ものではあるまいか、私は多數の請願人中には無學文盲のものもあるべく、或は有名無實の假裝人間も皆無とは信じられませんのである。

それは兎も角假令千八百萬の鮮人擧つて請願書に署名捺印したればとて、根本問題の解決せざる裡は到底不可能の事と惟ふ。教育程度、衞生思想、其他諸般の重要問題等をも比較研究し些の遜色なきを認められたる後始めて起るべき性質のものではあるまいか。

兵役の義務は別として、せめて財政にても獨立し得る程度に到り朝鮮議會の設定を請願するとせば多少意義ある樣にも感ぜられざるにあらず、乃ち他外國の植民地にも類例ある事なれば政府に於ても議會に於ても大に傾聽すべく決して今日の如く徒らに敬遠主義を以て體裁良く刎付けらるゝ事はなからふ。

請願者並に共鳴者諸君、若し萬一政府に於て之を採用し實現したりと假定せば諸君は果して如何なる事を議論せらるゝ考なりや、斯く實際問題に逢着直面して考究せらるれば問題は自ら氷解するであらふ。恐らく一事一項直接痛痒を感ぜざる換言すれば他人の頭痛を痛氣に病むの類ではあるまいか。

多數の鮮人中卓越せる識見家、或は稀に觀る博學多才の人、若くは熱烈なる忠君愛國の人士も必ずしも皆無といふにあらざるも、そは蓋し曉天の晨星と均しく極めて少數であらふ。故に此の少數の先覺者は先づ多數の低級幼稚なる同胞を指導訓育して他日に備ふる事に努力せられんことを希望して止まないのである、時に或は脾肉の嘆に堪へられない事もあらふけれども是れ卽ち先覺者としての當然荷ふべき國家的義務ではあるまいか。

一切萬事順序を追ひ階梯を踏んで孜々として倦まざるに於ては必ず彼岸に到達することは疑なき所である、乃ち諸君の希望せらるゝ問題も決して前途暗澹たるものにあらずして早晩解決實現すべき時日の問題である。

參政權問題の解決以前に要求すべき必要なる問題は自治制の復活である、之れは數十年來孤立無援の下に吾人の苦心經營に依りて漸次圓滿に發展しつゝありしものを寺內總督時代に蹂躙破壞せられたのであるにも拘らず、國策遂行上、の犧牲と諦め暗涙を飲んで隱忍自重沈默を守り以て今日に至れるにあらずや。

時勢は轉換せり人心は進歩せり何日までも併合當時の政策を墨守し舊政に追隨すべきにあらず、最早や一日も猶豫遲疑するを要せないのである、宜しく旗鼓堂々陣容を整へ、內鮮一致して復活を要求すべき緊急問題ではあるまいか。

◈聞くがまゝ

山口のぼる

○總督府の平井三男さんが讀書家であり、雄辯家であることは、改めて書くまでもないことだが、元來同氏の姓は前田で、平井といふのは養家の姓。

○おぢいさんになる人がエライ人で、雅號を案山子といひ、前後を通じて十六七年間、代議士をつとめた名望家である。この人はまた大變な雄辯家で、五六千の聽衆を向ふに廻して、活殺自在の辯鋒を揮ったもの。

○漱石の名作『草枕』はこの前田家を中心として、周邊の空氣を書いたもの。それを讀むと、平井さんのおぢいさんの面目は躍如たりとは、工藤武城さんの直話。

杉浦君の追懷

谷多喜磨

昨年京城大洪水頃迄京城府廳に極めて素朴な風貌をした勸業係長があつた。之が我が敬愛する杉浦又次郎君である。

君は朝鮮に約二十年一貫して勸業事務に當つて所謂勸業の生字引であつた。私が初めて同君を識つたのは大正二年であつたが、君は非常な讀書家で殊に漢籍を多く藏し又各方面の新刊の書籍も多く購讀して居たので非常に博識であつたが、又非常な謙遜家で默々として何事も知らぬ顔をして唯時々詩を賦しては自ら樂しんで居た。當時君は酒を嗜んで友あれば必ず簡素な肴で酒を酌んだ。炒豆を咬んで淺酌酒を賞するのが君の最も好きな所で、醉中能く『不如生前一罈酒』を微吟して居つた。極めて名利に淡泊な稀に見る高潔な士であつた。

十年を經た大正十二年私は京城府に在勤することゝなつたが、府の勸業係長の更迭の際不圖君の事を想ひ出した。當時君は忠淸南道廳に十數年一日の如く勸業事務に精勵して居つたので事務に堪能なことは勿論であつたが、併し事務以外に君に期待して居つたのは君の金玉の文字錦繡の名文であつた。曾て忠淸南道廳で百濟の故都扶餘の案內記を編纂した事があつた。編者は云ふ迄もなく杉浦君であつた。德富蘇峰氏が其の詩文を見て僻陬の地此の名文章家あるかと驚いた相である。

京城府廳では、式辭とか祝辭とか云ふ類のものを朗讀せねばならぬ場合が多かつたが、杉浦君は暗記して居るものでも書く樣な調子で名文を綴つて呉れた。當時能くあれは誰が書いたものかと尋ねられた事があつたが、私は自分が讀んだものは勿論自分が書いたものだと威張つて居たが、實は皆杉浦君の手に成つたものであつたことは言ふまでもない。

大正十三年の初頭官界大嵐の際、君は同僚の多くが退官するのを見るに忍びずとして退官を申出てたが、君に退かれては困るのみならず當時私は京城府史の完備せるものなきを遺憾として居つた際であり、杉浦君は此の事業を擔當するには得難き人であると思つたから此の事業を畢生の事業として完成して呉れまいかと委囑した。君も此の事業には意大に動いて兎も角退官の上府吏員として採用することゝなつたが、其の時持出した條件が面白い。高級でならば御免を蒙る下級でならば御厄介にならうと云ふのであつて、杉浦君の面目躍如たりである。そこで條件通りに下級の府吏員に採用された。然るに其の後府協議會の席上近頃府吏員採用の高級に過ぐるを非難する論議があつた。勿論杉浦君に關する論議ではなかつたのであつたが、恰度君も會議の席上之を聽いて居たので現地位に在るを潔しとせず直に職を辭せんことを申出でた。此時は色々と慰撫して一時辭職を思ひ止まらせた。丁度昨年六月私は平北に轉勤を命ぜられた其時君は次の詩を私に餞して呉れたが間もなく京城を去つた。『負軍使君赴邊境、就輕老僕退家鄉、海山一路三千里、何若綿々別恨長』君は鄉里湘南の地に歸臥した、其の後今年になつても數度の消息を得たが、近時其の音信を絕つこと數ケ月、何となく氣になつて近況を問合はせたが直に例の麗筆で八月十日附の返信が來て不相變頑健幸に讀書と草花に無聊を慰めて居ると云ふのであつたので意を安んじて居たが、何ぞ圖らん僅に二週間後の八月二十四日に未だ春秋に富む身を以て卒然として長逝せんとは。併し君の一生は高潔淸廉眞に士人の生涯であつたと思ふ。今君の靈は必ずや白雲に乘じて悠々天上に在ることであらう。

遙に其の崇高な人格に敬慕の意を表する。

柿盗人

小水眞二

空に星のキラ〳〵と輝いてゐる或秋の夜の事である。一軒の茅葺の百性家の墻の邊りに村の若者二人、赤く實つた柿を指さして話合つてゐる。百性家の主人は年奇と見え、時折コポンコポンと咳をしてゐるのが、手にとるように聞える。ランプの光は淡く煤けた障子を照らしてゐる。家の中では夕餉が終つた頃らしい。

若者一。他を憚るような聲で、『オイ今夜此處の甚六爺とこの柿をやつてやろうか』

若者二『爺の奴め今年は豐年じやで一本十五圓とかいつてゐたで、なんでも明日賣るとかいふ話だぜ』

若者一『それなら猶面白い、一つあの强慾爺の鼻をあかしてやろう、爺だつて村の柿を若い時分にや大分荒したそうだ。今一緒になつてゐる婆は其時分惚れ合つたものだとかいふ話だ』

若者二『じや一つ今からやろうじやないか、袋があるかい』

若者一『此處にあるよ』懷から出して若者二に渡しつゝ『今日は貴公樹にあがれよ』

若者二『馬鹿いへ、昨夜八平の樹へあがつて酷い目にあつた、今日は貴公だ、俺いやじや』

若者一『昨夜は同情するが實は俺先つきから腹が痛くて見張りならするが』

若者二『嘘いへ、今の今迄柿を食つていたくせに、今日の變言者は誰じやい、男らしく今夜は樹に上り分捕るんだよ』

若者一『仕方ないな、然し責任は折半だぜ』

若者一は袋を腰につけ、手と足につばをつけスル〳〵と樹へ上ぼつてゆく。若者二は物置の隅に身を隱して見張りをしてゐる。

突然

村の人『あゝ甚六さの柿よく出來た早くとらんと悪いがな』

村の人『早く賣ればよいのにあまり慾すぎる。あゝやつて置きや若衆の娯しみになつてしまふにな』

上の方を眺めてゐる、若者一は柿の木の反對側へ身をかくしてゐる。若者二は物置の後へ隱れる。

村の人『今年や柿の豐年じやの』

村の人『全くだ、俺のとこのあの畑の木一本で八圓だつた』

村の人はこんな話をしつゝ通り過ぐ。

甚六爺『婆聞いたか今の村の衆の話さ。明日はどうしても、賣るぜ』

婆『二三日まてば二三圓は上るから待たつしやい』

甚六爺『其んな事いはずに賣るよ今夜でも村の餓鬼共に上がられりや元も利もないからさ』

此話をきいてゐる樹上の若者は笑をこらへて柿をとつてゐる。矢鱈につめこんだため袋の重味とからだの重味で樹の枝を踏み折つた。

ミチリ!!

若者二はサア困つたと思つて障子があきはせぬかとハラ〳〵して其方を見てゐる。若者一は身をかゞめて下りる仕度をする。

甚六爺『誰だつ、柿盗人は』

其聲を聞いた樹上の若者はどうしても無事に逃げられぬと覺悟し柿の一杯はいつた袋を下へむけて投げ降した。

ドシーン!!

地響がしてから可成り時がたつてから家の中で小聲がする。

甚六爺『誰か落ちたやうだ』

婆『爺に叱かられてビックリして踏みはづしたのだろう』

甚六爺『いやな事になつたな』

婆『知らん顏してゐたがよい懸り合になると困るでのう』

甚六爺『じや床へはゐるかな』

若者二人は今にも障子をあけて飛びだしてくるかと思つたが障子があかぬばかりかランプの火が消えたからこれ幸ひと柿の袋をかついで一目散に逃げうせる。

甚六爺『婆さんどうもおかしいな落ちた音はしたがウンともスンともいはぬ。御前一寸提灯つけて見て來てくれ』

婆『いやだよ、死んでもゐたら懸り合になるから』

甚六爺『どうもをかしいな』

ランプに火をともして恐る〳〵障子の隙から見ると、一向人の氣配がない、思ひ切つて障子ひきあけて見ると、ランプの光が庭一面に擴がつて赤い柿の實を照らしてゐる。爺はあちらこちらと見てゐたが

甚六爺『アアッ!!』

婆『爺さん死人かな』

甚六爺『馬鹿!そんなものじやない、大事な柿の木を台なしにした。早く賣れといふのに聽かぬから……』

ブツ〳〵云ひながら障子を閉めにかゝると、遠方にふくろの聲が嘲けるようにきこえる。

雜筆

井上收

正宗の使ひ手

この京城雜筆は、最近まで、天下の政治を談じ、時事を論ずることは、御法度禁物であつたが、三矢宮松氏が警務局長の職を去るに臨んで、一切お構ひなしの自由な他の新聞雜誌と同樣な規則の下に引直して呉れた。

考へて見れば、これも難有いやうな、難有くないやうな話である本誌の主宰者は、正宗や村正の名刀を持つても、容易にその斬味を振舞ふ男じやない。三矢といふ人は、刀劍の鑑賞については、朝鮮一だと評判が高かつたので、正宗の味、村正の歯えが解つたものかも知れない。世の成上り者、教養に貧しい輩は、自己の力量の貧しい爲に、道具を選ぶ。肩書を欲する。せめては、貧しい自己をこれによつて補はふ、付燒刃でもよいと人目をごま化さう、との人間の淺猿しさに出發しての所業でもあらう。

さき頃、西鮮日報の長谷川義雄氏が改題還元の祝賀の意から、私に愚稿を徵せられた際に、その紙上でも述べて置いたが、朝鮮の言論規則といふものは、その規則が無暗に取締るといふが爲に却つて弊害が多い。これは官僚政治、寺内政治の餘病で、寧ろ自由にして置いて不都合なものは取締るがいゝ、正宗といふ切味のよい名刀はうつかり預けると鬼熊に鎌をあづけるやうなもので、何をするか知れない、といつたやうなその筋の考は甚しい謬想である。

永樂町人、松本武正氏が、この雜誌を自由な正宗とするまでには足縣け二年かゝつた。人を見て法は說くべきもので、教養もなく、人格も識見もない者にこそ物騷かも知れないが、この松本氏などは自由な立場になつたとて、政治を論じ、他の悪口を叩く。といふ下卑たことはしない。一個の自由な出版業者であればよい、永樂町人の筆の歯えを見よ、その筆の雫は凝つて國政論となり半島政治の批判となる、などゝいふ片方で拳を振りあげ、片方で頂戴の掌を出して居るなどいふ淺猿しい所業の出來る人じやない。

總督府の言論政策といふのは、一面非常に嚴格に、法の威信を保持して居るが、一面頗るルーズなもので、正宗そのものゝ威力は遺憾なく認めて居るが、その使ひ手の何人たるかには思ひを致す事が尠い。この意味から考へて、この雜筆は、或は自由になつて反つて窮屈な思ひをしなければならぬかも知れない。

何はともあれ、この雜誌は、大正十三年の一月から、三年の年期を勤め、漸く自由な軀になつた。まづ目出度いことである。その國に制限された言論規則のあるといふことは、文化政治の今日、變態現象といはなければならない。出來るならばさうした年期を勤めて自由になるといふやうな廓内の傾城規則のやうな拘束を脫し、到る處に文華の花の咲くやうな時代を早く迎えたいものである。（一〇、一三日）

析々の記

永樂町人

◎朝鮮俳句一萬句集といふのを貰つた。俳句のことは、何んにも判らんが、一圓六十錢とは廉いもんだ。

◎中村玄濤といふ人から、二三度『問題の問題』といふ單行小册子を貰つた。此間の石川君（京日）のことなどは、隨分手きびしいがこれほどの健筆家が、石川君などを、目標にして騷ぐのは、牛刀割鷄で、寧ろ健筆中村君のために、惜しい氣持がせぬでもない。

◎本誌も、政治時事を許されたが、私は箇人の武器として、これを振り廻すことは、一切やらぬつもりだ。本誌は、どこ迄も寄稿家の共同機關でやつて行くつもりだ

◎これを認可するゝに就て、井上收氏には、特に骨を折つてもらつた。そして私は、本誌の立場を善意で、好感で、いやむしろ嚴正に見究めてくれられた、警務局幹部の人々に向つて、深大の謝意を表する。

◎この間工藤武城氏から招ばれて、その新築病院――及び私邸を見せられた。病院の方は、ドクトル工藤式であつて、頗るハイカツもの。私邸の方は、詩仙擔雪式であつて、頗る東洋趣味である。最も眼を引いたのは、我々プロ級に恰好の新借屋が、附隨建物として十餘棟も營まれてゐることだ。併しあれで、傲然として、大家の旦那に豹變してしまふ、我擔雪氏でもあるまい。……失言、失言。

京城婦人病院 訪問の記

酒井一郎

小生無沙汰の餘り京城婦人病院に工藤先生の新築病院を訪ねた。相變らず變人同士の會合なので、何を云ひ出すか、何と答へられるか、餘り無遠慮で、京城雜筆の樣な無禮講の雜誌にさへ出しかねる乍憚或る二三の人丈けにお讀みを否側杖を喰ふて戴く積りである。

初めの改つた挨拶は、先生から始まつた。曰く『不相變閑散だらう』實に先輩の言葉としては、思ひやりのある、僞わらざる眞情のあふれである。大抵の人なれば先づ第一番に『此頃はおいそがしいでしよう』とやる所だが、流石醫者として廿六七年を經、座禪の方でも、先づ猫禪よりは、中橋德五郎の方に近い、狸禪の毛の美しい方である。それから村上と云ふ設計家に紹介を賜はり、次いで庭を拜見した。雄大なる龍が、玆數週ならずしてモーターの作用により落され池に落ち、再び其力に依つて龍上りをやり、落下の法則に從ひ廻轉する仕掛けである。

裏の方が古い土塀で舊ファミリーホテルと境界されたものが、今度は南大門通りから長谷川町へと新道路が出來たので、此所に裏門が出來、永らくの陰は陽と代り、工藤先生の苦節十年の思ひがとゞいて、一躍成金と迄は行かずとも先づ〳〵子孫の爲めには芽が吹き始めたと、後輩たる小生も、何んだか時々申し述べてゐた述懷が達せられて、十餘年前に色々御世話になつた御恩返しに、此んな物でも御召に合ふなら御使ひ下さいと作つて、差上げてお喜びの樣子を目のあたり見る樣に、今日の工藤さんはいつになく晴れ〳〵して見へた。奥さんも何となく若返つて居られる。さびた庭の石や、古木東屋、德利を下げた古狸の燒物が池の上の方に不相變と云つた風に立つて居るのも嬉しい。

新築の病院は實に新式である。小生も物數奇に、內地の諸都會の公立私立の病院を訪問して、凡そ日本現在の新式と云ふ新式は見て居る。勿論京城、否朝鮮の私立病院としては、其の最も目新らしき建方である。

病院玄關を入ると、右側はキルク敷の大なる患者待合である。こゝには先生の生命なる諸外國の珍書が、戸柵に處狹き迄に納められてゐる。それは恰も鮭の產卵時に列をなして、淺き河の砂上に押しよせて居る樣に書物の背中が軍なつて居る。

左手の方は受付藥局であるが、此所もキルク張りの、勿體ない位の室である。玄關の突當りは立派な硝子入りの扉で、これから居間客間の方へ行ける。客間並に次の間の前、卽ち廊下の處はキルク敷の廣いベランダーとなつてゐて、大きな數枚の硝子戸がはまり、居ながらにして幽邃なる庭をながめ箱根あたりの避暑地に在る感が起る事であらう。

床の間には紫檀、黑檀、鐵刀木がつかつてある。何も珍らしい事ではないが、整然たるものだ。欄間の飾板は御自身の筆になる繪畫を、今內地で彫らしてゐるそうだ

待合室の後手を下に行くと一階がある。玄關は一寸上つて二階になつて居る理屈だ。此の第一階はキルク敷の小供部屋で、大分廣い二ケ所程の物置も附いて居る。

藥局の後部は診察室、その隣が手術室、中々どの部屋も明るい。夫れに續いて便所湯殿が配置されてる。便所には淨化裝置が施されてある。何んでも二千兩ほどかゝつたそうだ。

小生も考へた『召使などは何も知らずに居るが、此れ迄とちがつて、患者から附添看護婦に全るまで、何心なく放棄せる下等の品物は淨化され、影も姿もなくなつて他の家の樣に、蠅の媒介で親子食卓の上などで會ふ機會が、萬が一にもなくなつてしまつた次第である、文明の恩澤は便利な樣で、蠅に取つては誠に不幸、最早此家では商賣は出來なくなつた怨がないではない』と。

次に臺所に行くと、煮物は總て山崎式である、蒸氣爐用で誠に衞生的に出來て居る。

下女部屋もキルク張の床附である。大に一視同仁振りを發揮してある。云ひ遲れたが、診察所の下の處が下男部屋で、之れ亦キルク式、下男も淨化の恩澤に浴する事勿論である。

手術室の前より三階に行く廻り階段は立派なものである。病室は洋式あり和式あり、何れも美事で他の病院と比しては雲と泥との相異がある。

四階にも部屋がある。先生はこれを借金取の遁げ場所にあてられてあるそうだ。何れにしても、病院の空氣は淨化された。勿論全體に亘り暖房裝置は完備されてある先づ此の普請振りでは、千兩箱を五六十の値は充分と見てとつた。」

京城雜筆

最後に客間に案内され、紫檀、黑檀、鐵刀木の前に所謂上座に就く。茶の饗應を受け四方山の話に入る。蒸氣製置發明家山崎氏も席に連なる。發明家の苦心談、小生は借金の價値に就て、工藤先生はこれに處する對應策、弟君軍雄先生は、發明家に對する批判をやら

新しい東京娘

堀一知郎

△

娘甲『鬼熊つてえのは、どうして人殺しなんかしちやつたの』

娘乙『情婦を取られたからだわ』

娘甲『まあ驚いた！隨分古いのねえ』

是は素より小話では有るが、併し東京の若い女は大分新しくなつて居る。

△

京城の女教員養成所に居る私の娘の友達が、今度修學旅行の爲め上京すると云つて來て居る。處が偶々是も舊同窓の友達が來訪した際、此遠來の舊友を如何に歡待しやうかと、相談したそうだが、

『そうねえ、銀座のカツフエーライオンか何かでご馳走しませうか』

とあつさり云つたとかで、私の娘は後で『ハイカラですわねえ』と感嘆して居たが、彼女の母親は目を圓くした。

△

何日だつたか、私は一友と帝劇に往つた事があつた。其時隣席に連れもない一人の小娘が見物して居たが、夕刻に突然

『御飯をおつきあいくださらない？』

としなを作りながら誘つたには、遺に拙者も度膽を拔かれて了つた

此小娘の正體は、今以て私には『？』であるが、そろりとした裝ひをして居て、數刻後タクシーを呼ばせて歸つて行つた。

△

私の友人が勤めて居る會社の女事務員五六人が、時事批判會と云ふのを作り、晝休の一時間を利用して一室に集り、時々會合してるとの事だが、

『君ッ、彼女等が、戀愛問題か何かを持ち出して、上下してる議論と云ふものは、迚も大膽で素晴らしいものだそうだぜ』

と其友人が話した事だつたが、

『現代の女には、もう貞操觀念はないよ』

と附け加へた。

△

私は東京娘に就て、內面的に見聞した處は極めて少い。併し外面的の象徵からも、其內面を窺ふ事は難くない。

彼女等の服裝は、何處までも華美で、そして其動作表情は、凡て挑發的だと云へる。私は曾て藝者美は男子操縱を目的として育成されたものと思つて居たが、今や東京では、モダンガールは、同樣の目標で娘美を發揮し、殊に發言にまで藝者などが考へなかつた妖味を含ませ初めたのは、私に取つての驚嘆である。れ、時の移るを知らなかつた。小生はふと座敷の前に白檀の大木が型好く植付けられてあるのに氣がつくと、誠に枝振りはよし、發明家の苦心の跡に似た所がある。

午後五時より二時間に亘る世間話で、舌の根も乾ける此邊で切上げお暇申上げた。

◈頬杖ついて

吉田莊一

○

殖銀秘書役の安井さんは、立派な體格をしてゐるが、運動は何もやらぬ。一生やるだけの運動は、これまでに全科卒業となつてゐるさうだ。

○

學生時代には、野球、柔道、相撲何んでも御座れで、盛んにやつたものだが、大事の膝關節を、相撲でポキッと折つてからは、流石の强豪も、豫備役編入――折々野球などを眺めては、脾肉の嘆を漏してゐるさうだ。

○

方台榮さんが、歐洲から戻つて來た。しかも平面的に唯だ廣く歩いて來たといふばかりでなく、重に丁秣に留り、しかも同國の農村を徹底的に調べて來てゐる。だから時日は短くても、氏の旅囊は、どこかどつしりとしてゐる。

○

廣江さんに、御近什は？と伺ひを立てると『ハハア、僕の古代調ですか』と、呵々大笑して

朝鮮神宮

仰ぎ見る鎭めの神の尊さに
千代よろづ代に崇めまつらむ

思慕の情

思ふまじ思はざらめと思へども
思ひあまりて物思ふかな

漢城憧憬

膏の嬉々と樂しきふるさとに
なびてゆかりの兎角うすきや

秋一日

久松前平

◇都會に生活して居る者の樂みの一つは郊外に一日を無心に暮らすことであらう、殊に私共の樣に二六時中働きづくめ稼ぎづくめの者には尙更ら其感を深ふする。特に炎熱に疲れ切り、來る可き嚴寒を豫想して脅威されてる秋の朝鮮の郊外は一しほ懷かしい樣に思ふ

◇幸に機會が與へられた、と云ふのは京城繊業株式會社の年中行事である永登浦の栗拾ひに案内され家内全部で秋の一日を郊外に暮し得たのであつた。

◇それも同社の案内狀に『栗拾ひ、初茸狩、芋堀會を催ふすから家族同伴竹ベラ、信玄袋、或は臥大八車携帶云々』の從憑に興味を唆られたにも依るもので、萬障を排して出席した樣な次第である。

◇十月十日の日曜日、集合時間である午前十時三十分に京城驛に着くと、先着の方々が多く富野專務が一々叮寧に挨拶して應接して居られる。黄色の菊花章を貫つて待つ間程無く同社貸り切りの團體列車に案内され、午前十二時發まも無く永登浦驛についた。百數十人の團體而かも事實に於て家族同伴が實現されて居る爲め、老人も居れば子供も澤山だが少しの混雜も何等の心配も無くして驛から約五丁を離れた栗林と小松原と芋畑のある所に案内された。

◇直にプログラムは開始され、先づ栗拾ひから芋堀りと進められる。老幼男女の區別は無い、吾れ先きにと打ち興ずる所は全くの別世界現出で、愉快此上も無い賑かさである。一行は時の移るも知らずに居ると、午後二時が打つたから食堂に集つて果れとの知らせに丘上に設備された所謂食堂に集る

◇龍山方面は勿論漢江の下流も一望の裡に俯瞰する丘上に新しいアンペラが敷かれ、數へも切らぬ程鋤燒のテーブルが設けられ、一家族毎に其席に着くと云ふ趣向。そして自由自在になつて牛飲馬食を味はれる。松茸飯も出れば、お芋や栗のふかしたのも供へられる其内に主人側の隱藝をきつかけに來賓の囃し藝が百出すると云ふ有樣。名殘を惜みつつ工場の見物を終つて午後五時永登浦驛發の汽車で歸つたが、一同の信玄袋や風呂式は栗と芋とで一杯になつて居る

◇私共は主催者のお骨折りに感謝の言葉が無い位であるが、こんなに家族的催ふしは恐らく京城では他に試みられて居ないと愚ふので紹介する次第である。

◇筆のしづく

山口のぼる

○

齋藤總督の書信が、人情味に富んでゐることは、有名な事實であるが、丁秣遍歷中の方台榮氏に宛てた私信など、ほんとに情味津々總督その人を窺ふことが出來る。

○

ねんごろに、國葬(李王殿下)の平安裡に濟んだ事を叙し、まことに御いたわしいことをしたといひ目下連日豪雨で、漢江は增水し、先年の厄災を再びしないかと、人心惴々で暮してゐる——と結んである。方台榮氏曰く『總督の手紙は、丁度總督にお目にかゝつて、親しくお話を聽く通り、非常におなつかしく感じます』と。

○

筆をとつては、誌上の雄である今本醫院長も、野球となると、氣勢更にあがらない。『醫師團ではどこと試合なさいます』『醫專などとやりますよ』『醫專といふと生徒とですか?』院長ビックリ手を振つて『どうして〳〵、生徒は迚も我々の手にはおえません』

○

何んでも醫師團では、植村博士が非常にうまいさうだ。これは七高在學の當時、所謂花形選手であつて、勇名四方に轟いたといふ話である。

○

三矢前警務局長も、マジメな半面、簡人としては、頗る面白いところがあつて、金東亞日報社長の送別宴の折、主人側がフロックモーニングで、威儀を正してゐると、氏は何所で仕度したものか、頭のテッペンから足の爪先まで、一分の隙もない鮮裝で、ゆらり〳〵と乘り込んで來たので、始めはびつくり。次ぎには一齊に『善哉〳〵』

○

京城局では、十月二日に局員の大野遊會をやつた。溫厚な監督課長や郵便課長が、若い連中と、和氣藹々で、遊びたはむれてゐたのは、よその見る眼も頗る痛快。樺川局長は『何か出來さうなもんですね』と强要されて。

近郊秋色好吟行　一碧天空氣自清
溪畔小丘亭枕水　林間溫酒興更生
いつも作ら、うまいもんだ。

策士

徳野眞士

×

われ〳〵のやうな札附きの凡くらから見ると、とても危くて近よれないやうな橋を、平氣の平左で懷手をして鼻唄か何かで渡つて居る連中がある。之れを私は策士だと思ふ。

×

私の友人が、先日本町通りで數字の符合で開閉する獨逸製の錠前を買つたが、家族全部が覺へよいのがよからうと、私が三九四といふのを撰んでやつた。之れは策士だからよいぜといふと、彼れは一寸人聞きが惡るいねといつた。策士と云ふと、何か惡黨のやうに思はれるが、私は決して惡黨ではないと思ふ。たゞ往々にして策士策に倒れるやうな結果となる場合があるので、結果から考へると如何にも惡黨らしく見へるが、之れは止むを得ぬだらふ。

×

もう四五年前の事だ、私が平壤時代に鎭南浦に遊びに行つて、午後四時頃停車場に驅けつけると、當時の商議副會頭鳥越久則氏が今光州に居る殖銀支店長の白石甚吉氏と二人で、醉步蹣跚たる一人の紳士を、この列車で平壤に行けば北行列車に連絡するよと、出鱈目なことを云つて、無理矢理汽車に乘せて居る。折よくか惡くか、私が其處に行つたので、いや丁度よい御紹介しやうと一所に列車に乘つて平壤までいろ〳〵と話した。

×

名刺を見ると、前代議士近江谷榮次とある。南浦に來た要件は、メキシコから原油を輸入して製油する工場の建設敷地檢分の爲めだと、日墨石油株式會社創立事務所とかいふやうな名刺も持つて居る計畫の大體は鳥越白石兩君に話してあるが、海軍との關係があるので或は鎭海に持つて行くかも知れぬ、何しろ莫大な土地を要するからねと云つたやうな調子である。

×

之れは實に耳よりな話である、久原の製錬所は事業を休止し不景氣の風は遠慮なく各方面を襲つて來るといふ時に、一大工場が出現するといふ事は地方の爲には非常な福音である。こんなお客さんは疎略に扱つてはならぬと、平壤につくと同時に、私は宅から柳屋に電話をかけて、今こんなお客さんが行くから賴むよといつて置いた暫らく、すると、柳屋から近江谷氏が遊びに來いと云つてきた。私が行くと彼れは食事中だつたが、すき燒きの肉を西洋皿にとつて、ナイフとフオークを巧みに操つて、どうだらまいだらうと、御自慢の體であつたが、宿では何か先生の氣に入らぬ事があつたらしく、君が電話をかけて呉れぬと斷はられる處だつたと、ぶつ〳〵云つて居つた。

×

後で聞くと、玄關に彼れが立つた時、女中が居らず女將が迎ひに出たさうだ。彼れはそんな事は知らぬから新らしい一圓札を出して厄介になるよと差出したものだ、女將が大きな名刺ですねと笑つて受けぬので、侮辱されたと思ひ、生憎お部屋がございませぬのでといふ所に私からの電話で、さあどうかお通り下さいといふやうな多少は具合の惡るいこともあつたらしい。チラと見へた處によると、やつと七八枚の新らしい一圓札を彼れは女中にばら撒いて、翌日から南浦の白石氏に電話をかけて、いくらかせしめやうとしたらしかつたが、白石鳥越兩氏は、前夜から翌日の午後四時迄も朝日館で飲まれて居るので、もうてんで相手にならぬらしかつた。

×

二三日後孟中里驛附近の知人を訪問して、柳屋の拂ひも濟ませたので私までやつと安心した形だつたが、其後は京城の朝鮮ホテルに一ケ月も二ケ月も悠々と構へ込んで水野政務總監を訪問したり何かして居た。單にそれ丈の事でも前代議士の肩書のみでは出來ぬ藝當である。その正月には闌に句を書いた年始狀をホテルから寄越した

×

私は近江谷氏のやうな人が策士だらうと思ふ。最近何かの雜誌で小牧近江といふ文士の『鷄を親に持つた家鴨』といふ一文を見たがそれによると、小牧氏は近江谷氏のせがれで、親父は此頃三十萬圓の捕鯨船を建造中で『第一元日丸が出來あがつて、今後どうなるでせうと親類の人が聞くと、船さへ出來れや動くもんだよ』と涼しい顏をして居るさうだ。私は思はず吹き出した、先生此頃は石油を船に乘り替へたなと。

×

策士は內地にも多いが朝鮮にも少なくない、官界にも居れば民間にも居る。だが手際よく成功した策士といふものは極めて稀れだ。雜筆寄稿家の中から誰れか一人位頭ぬけた策士は飛び出さぬか。

眞の雜筆

テザーボール

渡邊晋

近來運動競技が盛んになつたのは誠に結構であるが、それに從事するのがホンの少數の選手に限られ、大多數の見物人が自分の運動に沒交渉である間、いくら運動競技が盛んになつても、國民の體育と、無關係であることは、大相撲協會が隆昌になつても國民全體は健康にならぬのと同樣である。

私は現代人の興味を持つ運動が多くは多數の相手を要し、又は廣大な運動場を要するの缺點が、運動の普及を妨げて居ると思ふ。私は此の缺點を補ふ意味に於てテザーボールを御勸めしたい。

土地の廣さは直徑三間程の丸さがあればよろしい、其の中心に高さ二間半程の桿を立てる。桿の上端に丈夫な細い麻繩を縛りつける繩の下端に網袋に入れたテニスのゴム球を結びつける。球の高さは胸の高さにする。テニスのラケットで球を打つて棒にまきつけるのである。棒を中心として地面に一直線を引く、相對する二人は其線以前には出ぬ樣にする。そして交代に球を一回打つ、敵の頭上を通る時に高く球を上げて敵が打ち得ぬ場合は何度でも球を打つてよろしい。そして球を早く棒にまき付けてしまつた方が勝である。ラケットを誤つて棒に當てれば罰として自分の球を二卷き丈け戻すことにする。

一人でも球を種々の方向に打つて充分の運動になります。

優勝盃

女子の競技の勝者にも此の頃はトロフヰーが出る。未丁年の娘の御褒美に酒飲み大コツプ！。貰つた娘がどんなに嬉しいか想像もつかぬ。

盆栽の種子

外國の貴賓が、震が關離宮に飾り並べてある盆栽を賞讃せられ、此の木の種子を持ち歸つて蒔くと仰せられたと新聞に見る。

絶壁の岩の割れ目に、風雨を凌いだ苦節幾百年の歴史が泣かう。

御かみの誤り

文部省國語調査會が、固有の意味と無關係の漢字の當て字を廢止する改定案を發表したのは至極結構であつて『鳥渡』『變梃』に『誤魔化』したなどと無意味の難漢字を假り用ふる必要は更にないのである。

然るに補則外國語のうつし方第五ジュ、ヂュで書き表はされてゐる左の類の語としてラジューム、イリジュームと書くべき例を擧げてあるが、之は確かに引例の選擇を誤つて居る。ラジウム、イリジウムと發音すべき語であつて、ラ充ム、イリ充ムではない。

衛生第一

ベルギー記者ピエール、デー氏の日本觀察に、暑い日に無作法なほど肌を見せた男の多いのが目に立つ。しかしこれは日本の習慣の方が理窟に合つてゐると思はれる昔から女は羞恥の念に强く雅美であるべきものであるから女が肌を出して平氣でゐる西洋の方が間違つてゐると思ふと述べて居る。

私は衞生健康上の立ち場から、い男も女も季節氣溫の許す限りつまり寒くない限り多く肌を表はしてほしいと思ふ。其の方が人身の抵抗力を增大するのである。風俗とか習慣とか云ふものは約束次第で變更し得るもので、絶對不易のものではない。

激甚な生存競爭に打ち勝つには强健なからだが資本である。つまり衞生第一であるのである。

米の病

宙返り飛行家が、裡里で墜死せられた原因が脚氣衝心と聞いて、誠に御氣の毒に堪えない。こんな飛行機の墜ち方は世界一であらう純白米が人間の食要素として不完全であることは既に醫學上明かな事實となつた。若し純白米飯ならば副食物を餘程氣をつけて多方面のものを食はねば脚氣になることが證明せられた今日吾々も大に覺醒せねばならぬのである。

飛行機の落ち方の世界一はあまり感服したことでない。

◈久米氏の事

石田利夫

○金剛山電氣の久米民之助氏が金剛山に傾倒せることは、實に非常なもので、今度長安寺畔に、約千坪の地所を相し『僕が死んだらこゝへ葬つてくれ』これほどの禮讃者だけに、氏は私産の殆んど大部分を、同鐵道に注ぎ込んでゐるのである。

○紳士將棋では、氏は東京での一方の大關で、何んでも二段とか三段とかの段位を有ち、この間も當地の强雄高橋（章）氏を、大分ちめたとの風聞である。

京城つれつれ草

守屋三葉

○內地地方官更迭の發表を見る誰が何になりたりとてどの縣に轉任したりとて朝鮮の銀行屋さんには別に利害を感ずる節もなけれど運惡しく人事を扱へばそこばくの感興なきにしもあらず。

○身分により地方により活字など特に大きくしたる味氣なし、おしなべて浮世の戲むれと思えばそれ迄なれども氣持よき亭主もあるべく心うら寂しき女房もあるべし

○ズラリと並べられたる榮轉左轉の後に、休職仰付けらる、依願免官など嫌な文字の列ねられたる亦味氣なし。榮え行くものよ時めくものよ茂りたる青葉の裡に病葉の二ツ三ツ交るがごと見さらんと欲するもいともひそかに己が心にしのび來る我が凋落の姿を見ずや

○世に浪人程悲しきはなし、停車場を別るゝ時など愈氣樂になりたれば山河風月を友としてなど、いとも呑氣に宣給ふ蔭よりこれは生來正直なる女房の明日の糧を氣遣ひ寄り縋ふ子供の事など想ひわづらひつ意氣何となく昂らぬも哀れなりかし。

○東京には浪人多し、內閣の更迭を待ち親分の復活など夢見つゝ採算を無視して無理から東京に住むなり、退職給與金のつくる頃ひ休職滿期の聲をきくころ漸く吾に歸りてそこそこと郊外に借家を物色し門構ひより長屋に移るも珍らしきためしとにはあらず、其昔自動車に葉卷を燻らしたる主者の民衆に交りて電車の吊皮にしがみつきたる、本所深川の『アニイ』にさへ蹴擲されつゝわびしく歸る夕暮はいかに寂しき。

○浪人の浪人らしきはよし、浪人の前官めきたる鼻持ちならぬ沙汰なり、或る人の『ゴルフ』に通うに浪人になりたればとて電車の通ずる限りすゝむるも自動車に乘らぬは餘りに固苦しき心地はすれど、この心先づ學ぶべきことなりかし。すべて浪人はうらぶれたるがよし、さはれ人に憐れみを乞へとの謂にはあらず、心內にあれば態自ら外に定まるべし、此の種の人眞に灰汁ぬけて物腰なべて爽かなり。

○如何に浪人なればとて浪人の翌日より一文なしの天神となるも考物なり、人は程々に金は持たまほしきもの哉。浪人の品位も金ありてこそ保ため、さりとて在職の間餘りに吝なるも亦考物なるべく金を惜む人に限り早々と浪人となるも妙ならず。

○浪人になるが悲しとて餘りに現職にへばりつきたる又味氣なし人望既に去れるを氣づかず乃公なくんばなどのぼせ上りたるこの世のさがとも覺えず。友情を漁り官邊に取入り只管身の安固を計りて餘念なき樣側の見る目も氣の毒なり。自己存續の價値位は大體自ら見當がつくべし、目に見えぬ人氣が六官に感ずるは人間の特性なり己を極度に愚にするにあらずんば人は必らず出所進退を謬る能はず

○浪人は故郷に歸るかよし、土產の土にさかるが、人生『さもしさ』の初めとは知らずや、いかなる山河風月なればとて吾が半生の思出と結びつけたる自然にしかめや。

◎京大だより

吉田壯一

○

此春政治科の生徒が、懇親會を開かうといふ時、高橋博士が發起人を呼んで『何處でやります？』『南山莊で！』『そこで、會費は？』『一人前五圓！』すると博士は『フーム、學生としては、少々贅澤だな』言いまだ終らず一學生進み出でゝ『しかし本件は、高橋君が第一番に贊成しました！』いふ所の高橋君とは、實に博士の令嗣なのである。すると博士は瞑目一番『この間やつた我々（教授）の宴會さへ、一ツ金六圓である。諸君、親の心子知らずとは、ほんとによくいつてあるね……』

○

民法の藤田先生は、熱情の人である。その講義は、眞に熱烈火の如く、力强き記銘を學生に與へてゐる。面白いのは教授が教室に臨むや、必ず給仕が土瓶を下げてその後に隨從する事である。そして博士は、熱辯縱橫、土瓶の水を傾けつくして『諸君、これでこらえてくれ給へ、もう聲が出ない！』

○

心理學の早速先生、電車の隅で瓜を囓つてゐる。先生と默想とは異體同心なのである。

○

哲學の安部教授が、頭に油をつけてゐたのは唯一回。始業式の時である。頭も、齋物も、教授に於ては一切無、一切空。

懐來の秋

戸田直溫

汽車は北京を後に、北へ〳〵と走つて行く。秋は野に山に滿ち高粱も已に刈り取られて一望其切株のみ殘され茅芒は所々に白き穗を風に靡かせて居る。國民軍と奉天軍との關係が切迫して居る時で、馮玉祥は張家口に其本據を置いて居るので、北京と張家口、歸化城等をつなぐ此京綏鐵路は、國民軍の將卒や要人の往復が頻繁である。今私の乘つて居る車も軍人や張家口通ひの人が重な者で馮玉祥の噂を頻にして居る。服裝の餘り宜しからざる人相も卑しき二人連れの客は不作法に此車に席を占めて居つたが、車掌に切符を調べられて懐より半紙大の紙に大きな印がべた〳〵押してあるのを出して傲然と示して居る。國民軍の何れかの隊長から出した無賃乘車の命令書見たいなもので、車掌に對し何だか言ひ爭つて居つたが、遂に銅貨を百枚近く拂つて居つた

畑には其邊の農夫であらう馬車に豆穀や薄を積んで之れを牽く驢を逐ひ行く。黄ばめる楊樹の蔭には驢馬を傍に憩つて居る。毎年の戰禍に家財は掠奪せられ畑は荒されるのも忘れて彼等は戰亂の終ると共に、何處よりか荒れ果てたる家へ歸つて來て不平な顏もせず土の壁を直し畑を耕す。車内の兵隊を忘れて窓外を見れば實に平和な秋で軍匪の跋扈など考へ得られぬ。何の時か彼等に眞の和平を望み得るかを想へば實に同情の念に堪えぬ。沒法子と諦めて居るのであらう。

强胡の禦ぎに備えし萬里の長城は、峻險なる山嶺を蜒々として走つて居る。崎嶇たる山嶺、相迫れる溪谷を過ぎて八達嶺を超ゆれば、其處は已に懐來の高原地帶であつて河畔の楊柳は凡て黄に已に半ば落ちて、柳葉は翩々として風に飛ばされて居る。鶴の群れが翼然として中空に鳴いて居るのも見える。今超えし八達嶺の峻峯上の長城は重疊たる連山と共に起伏し、遂には遥に雲際に沒して居る。前は開けて一望の高原。其間を永定河が流れて居る。流石に水は黄ろく濁つて居る。斯る濁流であつても支那の風物は其趣を害はぬ、清流の潺々たるよりも四邊と調和して居る樣にも思はれる。槐樹や楡や楢凡て黄葉して萬物皆黄である其處に紅葉を見出し得ぬ。風の來る度に落葉は中空に飛んで舞て居る。私は山間溪谷相迫つて紅に黄に彩れる秋の美よりも悠久の氣分に富む高原の秋を好むのである。そこに千變萬化はなく色の複雜さに缺げて居つても、高原の秋には雄大なる何ものかがある、平和なる或るものがある。都會の强烈なる刺戟に責められ煩雜なる日常の生活に倦きて居る私は、高原に於て悠々として其自然を思ふ趣味ひたい。此點に於て朝鮮では洗浦附近の高原の憧憬者である。

汽車が懐來の驛に駐まれば顏馴染の苦力は直にやつて來て荷物を下したり何呉れとなく世話をして呉れる。驛前で驢馬を傭つて一頭には鞄や獵銃や毛布などを附けて、私は他の一頭に跨り、苦力と雜談をし乍ら馬を進めて行く。懐來は北京より張家口に行く街道筋の一城下で、城壁は後の小丘を超えて町を圍んで居る。東門に於て之れを護る兵士に護照を見せ、銃など調べられたが無事通過して城内に入る、一客棧に休んで其處で米やら野菜やら肉やら醬油迄二日分の食糧品を買求めて驢馬に乘せたる上三十清里程離れた一小村に向ふ。

支那の道とて支那馬車を漸く通ずるに足

る位で、轍の跡は深く落込んで而かも處々路は畑の中を隨便に走つて居る。永定河の支流に或は沿ひ或は離れて行く。行き遇ふ農夫は皆平和さうな顔をして居るが此見なれぬ旅人を不思議さうに後振返つて行く。

黄葉半ば落ちたる太き柳樹の林を拔ければ、數百の羊、山羊の群は一人の牧童に護られて甘き草を求めて野に徘うて居る。崖上の廢寺には半ば野生となれる家鴿の群が其寺門の上を飛び交ひ、河の彼方には雁が幾群れも飛び去り飛び來る。今私は浮世の何物をも忘れて此高原の秋の中に同化されて居る。馬夫と苦力は無言に跟いて來る。驢馬は頸を垂れ長き耳を振り立て乍ら細き徑を――時には畔位の――獨りで進み行く此靜寂を破る者は右又は左への馬夫の驢馬への掛聲のみである。馬上の私は高原の秋を恣にし乍ら悠々として乘せられて行く。

村へ着いてとある一農家に入り假の宿を賴めば、主人は快く承諾して呉れて其離れたる納屋へ導いて呉れる。小なる農家とは云ひ乍ら周圍に土塀を廻らし、前庭には黑き豚が鼻をうごめかし、飼犬は其住家として居つた納屋に異樣なる人間の這入つて來た事とて怖ろしげに吠えて居る。隣近所の女房や子供は皆集つて來て私を取り卷き物珍らしげに見て居る。私は家のお神さんに晩の飯を賴み、連れて來た苦力と荷物を整理し毛布など敷かせて寢る所を作る。文明は斯る田舍にも侵入して居つて石油燈があり主人は卷煙草を吸つて居る。私は炕に火を燃かせて薄暗き燈火の下でお神さんの手になつた田舍式の支那料理に舌鼓を打ち、毛布にくるまつて横になつた。土間には粟や高粱穀が堆ねてあり屋根裏には豆穀などが吊してある。私は此中で鳴き渡る雁の聲を聞いては明朝の寒況を考へ、又書通つて來た高原の秋の氣分を想ひ出し乍ら靜かなる夜を過さんとする。天地は靜寂で只何者かに驚かされる犬の吠ゆるのと雁の聲が此靜けさを破るのみである（一〇、一一）

秋日雜吟

鈴木孫彦

月山をはなれる
木々のかげあり落葉掃く
雨空高く雨降らす
無心いはれた手紙をたゝむ
懷ろ手してガラス窓に鼻つける
重ねた冷めたいあしがある
妻傷枝一本で迷つてゐる
くらい机のもの探ぐる
あすは日曜更けさせてゐる
床屋の鏡菜ッ葉畠映させてゐる
鶏みんなたべてゐる
掌のなかの蟲で動く

十句の秋

仁川　吉岡久

菌

菌山やゝ寒み松に傾く日
潮燒けの松あからさまや菌山
茸狩や夕月を吹く松の風
松の雨のぬくさに菌育ちけり
厨人に菌匂はしく灯りけり

蜻蛉

蜻蛉すい〳〵薄照山の起伏して
あはたゞしく兒等去れる日南蜻
蛉かな
風の中にホテル白々と蜻蛉かな
朝晴れや蜻蛉に光る海遠し
暮れかねて蜻蛉に風の募るなり

金六夜話

廣江澤次郎

大和ホテル

澄みわたる秋空の滿洲は風光又格別だ、沃野千里の滿蒙は宛然之れ神經衰弱の療養所だ、此ノンビリした氣分、何處となくユトリのある滿洲は、一度足跡を此地に印せし者の等しく激稱禮讚する處である、特に瀋陽の都――此奉天は滿蒙の總中心點、歐亞大幹線路の樞要地點、マツタ中華民國の大御所――好運の典型たる作霖張雨亭將軍の鎭坐ます處として、現在の繁昌は當然、將來多々益々有望は保險附だ、有爲の實業家はドシ々來滿し、現在の活動、將來の計劃に寧日なし。

大和ホテルに滯在の青年實業家二人、A君とB君はホテル生活に若干の寂寥を感じてか

A『オイB君、ホテルの洋食も少し飽いたネー、久し振に今晩は十間房へ泳ぎ出し、金六で松茸めしでも炊かして喰つて來ようじやないか』

B君は一議に及ばず無條件共鳴、即時大賛成、自動車を飛ばして金六に着いたのは、日もトップリ暮れた晩の八時頃。

金六の坐敷

A君もB君も、チョイ〳〵來るのと元來が頗る快活な、竹を劃つた樣な氣象の青年とて仲居とも至つて別懇、お互に氣兼や遠慮はなく、戯談や與太を飛ばし、坐敷はイツも大揚氣。

A『オイ、ゴ馳走は、簡單でよいが、松茸めしを喰はして呉れ、松茸めしを！藝者は一流のパリが一人居れば澤山だ、ビールはいらぬ、酒だ酒だ、早くしてお呉れ！快々的！』

性急で、ブツきら坊のA君は燗んに仲居をセキ立てる。

仲『マタAさんのセツかちが、始まつた、ゴ馳走は直ぐ持つて來るが、今頃だしぬけに來て一流のパリが來るもんですか、だから私が平素修業が足らんと云ふのよ、AさんやBさんが來たと云へば、宙を飛んで騙けつけ、ソバを離れぬ樣なパリをお作りなさいよ、ゴ維新當時の豪傑連も、美人と酒の力で成功なすつたじやありませんか！』

仲居は書生流でカタ造の、AとBを世間なれさせ樣と挑戰する、藝者は兎に角アキ書きの筆頭二人を是非もらいで呼ぶ事にした。

A君の逆襲

負けじ魂のA君は、仲居の運ぶ料理を片ッ端から平らげ且つ飲み乍ら、仲居に逆襲戰を始めた。

A『オイ々々、若い者に悪い事を敎へるなよ、君達の樣な千軍萬馬組に懸つちや、ウブな世間見ずの僕等は兜を拔ぐよ、無條件降伏だよ、併し藝者がゴ維新當時の樣に意氣がある？、仁俠に富み、此人の爲ならと思へば水火も辭せんと云ふ、熱烈振りを見せるなら、僕等も首ッたけになるんだが、ソンな白拍子は大正の今日では藥にしたくもないわい』

才氣煥發、覇氣縱橫のA君の論鋒益々鋭い、雄辯滔々更にまくし立てる。

『オイ、今の藝者も考へて見ると可愛想だネー、一流のパリだと威張つて行くにや、小使錢も切詰めて一ヶ月百圓は入る！中元と年末の特別賞が貳百圓に五百圓、チョツト一ヶ年に貳千圓は余計なお金がいるよ、是だけの負擔はゴ親類筋のお客に負擔させにやならんが、此世智辛い上不景氣のドン底じや、注文通りのお客は見當らない、偶見當つても永續きがしない、どうしても三人か四人に割附けにやならんが、コレが亦氣苦勞な者さ、土地のお客で二人と旅のお客で三人位と云ふ配置にして、ガチ合はぬ樣に、ウマク操縱するのだ』

遺かの仲居も煙に卷かれて、眼を丸ふして謹聽し、B君も感心して耳傾けて居る、A君は得意になつて益々長廣舌を揮ふ。

『此外に又拔荷賣をやるのさ、此ヌキ荷賣は藝者の自發的と云ふよりも料理屋や仲居の半ば壓迫もあるのさ、來客の筋合によつて、お酌に來とる一流藝者の内に白羽の矢が立つた時、上手に是を斷る事が出來ぬ場合が生ずる、前述の現役お客に知れぬ樣に、此臨時客にヌキ荷を賣るのさ、土地柄によつて藝者に權威があり、斷々乎拒絶するのもあるが、大抵は料理屋や仲居の壓迫で云ふ事を聞くのさ』

呆れ顏で聽いて居た仲居は、A君を睨み附け乍ら

『マア呆れた！、Aさん何處で修業してゐらしたの？、オホホ、、、是でウブの世間見ずですつて！マア呆れるはよ』

B君は粹人

溫厚練達のB君は、悠然たる態度で、徐ろに話頭一轉に努める。

B『併しA君！それは世間一般的の藝者の裏面さ、何ぼ花柳界で

も例外はあるさ……金六の樣に？……率天の一流藝者の中でも××や△△の樣に今どき珍らしい、意地ッ張りの白拍子も居るわい、兎角花柳界の裏面は見ぬが花だよ、お菓子でも造る所を見ると喰ふ氣になれぬと同樣さ勿論藝者にも熱烈な深刻な戀もあれば純眞な情愛もあるよ、アハハ……』

Bさんは近來なか〳〵話せる樣になつたと、仲居は大悅び！舞台は廻つた、A君もB君も熾んに飲み始めた、Aは思出した樣に

『何處へ行つても金六の仲居さんの樣に、善い客も惡い客も萬遍なく公平に、歡待して呉れるのはないね、心持がよい、愉快だ〳〵』

ブッキラ坊のA君が、大傑作のお愛嬌を振まき、且つ萬年筆を走らせて、金六の料理と坐敷を禮讃の鴨綠江節を作つた。

『瀟陽の花の都の、アノ金六は料理りや滿洲一、部屋も亦ヨイショ、意氣な坐敷でヨ、粹人はヨ、誰れでもマタ、滿足して歸りやはる。』

仲居も是はいゝ、有難ふ〳〵と急に惠美須顏！B君も傑作〳〵と拍手喝采！

懸賞で狂歌

婦人畫報の口繪にでも出て居る樣な美人、五月信子式の妻味のある素敵なハイカラが『今晩は』と丁寧に挨拶して這入つて來た、仲居は百萬の味方を得た樣な輝いた顏附で

『千代龍さんゴ苦勞さんでした今晩のお客さんは迎も雄辯家揃ひよ、サア二人してウント苛め返してやりましようや』

AとBと仲居で大騒ぎの所へ又壹台、千代龍と云ふ颱風機が舞ひ始め談論益々風發、嵐の如く暫くはハシやき拔いたが初秋の夜は深沈として更けて行く、注文の松茸めしが來た、無邪氣なAもBも、コリヤ美味い〳〵と、おかわりの三四杯も平らげた、頭腦明敏機智湧くが如きB君は萬年筆を走らせ

ゴ親切アナ有難や松茸の
御はんの味は天下一品

アラ！Bさんは狂歌がウマイよ、私にも一つ作つて頂戴と千代龍が云ふ、B君聊か得意

『君は恐ろしくツムジ曲りの意地ッ張りださうだが、親孝行で信心家で藝達者で、其上アマリ發展せぬと云ふじやないか、感心な女だ、本名は……よし子？生れは……廣嶋？』

B君は冥想一瞬立所に一首

名前よし藝筋もよし顏もよし
心根もよし運勢もよし

千代龍は大滿足、仲居も面白がつて、金六には、お仲、おとく、おうの、おいまの四人居るが、此名前を狂歌に直ほして見よと難題を吹かける、意地惡の千代龍も手を拍いて此難題にケシかける、Bはニヤリ〳〵と笑つて居たが、歌の出來がよければ、何でも僕の云ふ事きくかと、千代龍に念押し乍ら當意卽妙、また一首

今すぐにその謎とくと仲居なく
君が言ふ事聽くぞ嬉しき

滿坐感嘆拍手大喝采。

龍岡雜詠

——父の看護に從ひて——

西崎千枝子

白銀に尾花は光る一面のすゝき廣野にうすづく陽かも
人の子の家もまばらや龍岡のいで湯の村に秋風ぞ吹く
龍岡の湧湯さびしく秋さりて宿のえぞ菊すこしいためり
西陽さす部屋の溫みにとび交へるこゝだ秋蠅われ捕り歩く
蠅叩きばつと下せばかそかにも蟲が立てしほこりわびしも
ちゝのみの父のいたづきやゝ少し癒ゆるときけば心なごむも
かたことと玻璃戸は鳴れり風やゝにつのり來らしも夕かたまけて
自働車の時たま通る田舍路めづらしみわが立ちて眺むる
湯あみする事より他に仕事なき身の所在なさ日永をかこつも
目さやる物とてもなき一面の廣野はろ〴〵空につゞけり
風なぎを趨へるがにも一面の穗すゝきなべてそよともせず
客足もいまは稀なる湯の宿の眞晝しづけく蟲をきくかな
吾が身いま遠く離れ來て吾が背子の家居いかにと思ひつゞくる
夕雲はから紅にたなびきてそゞろに遠き人の戀ほしも
住み馴れていまは親しき此の庭の淀菊の花咲きかわりつゝ
えぞ菊の花うつろへどみゝのみの父のいたづきいまだ癒えずも
夜となれば宿のをんながともしゆくランプわりなや影もさゆれて
夜くだちて寒さはそゞろ身にぞ泌むランプの匂ひたゞよふ部屋に
父と子が言葉すくなきこの部屋にランプは大き影を落せり
朝日は赤の飯炊くこの宿に家居ひとしき親しみの湧く

回想

永樂町人

○

私の少年期に、岡山の文壇で、盛名を馳せたのは、鷹取田一郎氏である。

岡山の文壇には、曩に志賀重昂氏が來り、後に田岡嶺雲氏が聘せられたりなどして、相當賑はつてゐたが、鷹取氏を壓倒するほどの人物は、遂に出現しなかつたやうに思ふ。

鷹取氏は、辯難攻擊に長じてゐたが、一面には、隨筆紀行にも獨特の才華を示し、その『宇甘川の上流』などは、縣下の讀者を熱狂せしめたほどの名文であつた。

私は一度學友に伴はれて、この鷹取氏を訪問したことがあつた。屋敷の陋隘なのには、先づ一驚したが、それよりも氏が一箇粗野、平凡な一田舍漢であるのには、再驚を吃した。先生は、尻ハシ折つて、自轉車の稽古をしてゐたが、我々の面前で、意氣地なくも三四回も轉倒し、見苦しい所を屢々見せるのであつた。學友があれを見ろといふから、先生の後頭部を注視すると、大きい禿げの中に『鷹取』と、まざ〳〵と入墨してゐるのであつた。次に、その木棉の紋付を見ると、椀大の紋どころに、これも肉筆で『鷹取』と大書してあつた。それでも我々は、この一代の文豪に、接見出來たことを、無上の光榮とし、一層の熱度で、鷹取氏の文章を、諷誦したことを記憶してゐる。

その後、鷹取氏の妙文は、一切紙上に見られなくなつた。我々はどんなに寂寥を感じたことか。學友に訊くと、氏は去つて、朝鮮の水原で、豆腐屋を始めてゐるとのことであつた。後年私が朝鮮に來て、同鄕の某氏に、氏のことを質すと、豆腐屋をやつてゐたのは事實だが、今は去つて、臺灣にゐるとの話であつた。

何を思うて、筆を捨てたのであらう。何を感じて、豆腐屋を始めたのだらう。少年時代を追憶するたびに、この鄕土の大きい文人のことが、思ひ出される。

○

阿部雪香といふ人物があつた。筆を執ると、硬軟併せ善くし、實に立派なものを書いたが、働くのが嫌ひで、とう〳〵校正係に貶謫せられ、藥鑵に冷酒をしのばせて朝からほろ醉いで、赤筆を揮つてゐた。

月給日になると、下宿の婆さんが、會計に行つて、そつくり財産を差押へる。

女房は東京にゐるとの噂もあつた。本人は、いゝや、俺は天涯の一孤客だと傲語してゐた。

初心な私達は、阿部氏から氣焰まぢりに、此所は斯う來なくちやと、自分の文章の不備を指摘せられ、親切なお爺さんだと、たよりに思つてゐた。

阿部氏が馘首せられた朝、それが文選女工某と通じたのに依ると聞いて、變に寂しい氣持がした。

○

北村馬骨といふ人があつた。その頃某新聞を罷めて、下宿でごろ〳〵してゐた。訪ねて行くと『今朝から胸がむか〳〵してね』といふ。『どうしたんです』と訊くと『たべ物がないから、枕をほぐして、中の赤豆を炊いて見たが、さすがに脂臭いので』といふ。『なぜ下宿の物をたべないんです』といふと、まぢ〳〵と私の顏を眺めて『なるほど、君は若いなあ、そんな糧道は、ふた月も前に絶へてしまつた』といふ。

細君は、小學校の教員をしてゐた。しかし先生のだらしなさと、無茶苦茶なのに呆れて、二三年前別れてしまつたのである。

私は紅葉や、水蔭や、眉山や小波やの手紙を示され乍ら、ほこりかに『江見の奴が』『巖谷の奴が』といつてゐるのを聞いて、一種味氣ない氣持になつたことを覺えてゐる。

◈餘白に一言

一記者

○地方の誌友に、小社屋を計畫してゐることを、手紙のハシで知らせた所が、Fさんから丁重な御手紙と金一百圓とを贈られた。それからiさんは、その店の人にことづけて、金百五十圓を本社に届けられた。謹んで御高情を深謝いたします。

○井上收さんの『半島に聽く』を、どうぞ御讀み下さい。讀者はお馴染であり、寄稿家は同じ道を樂しむ人々であるから、どうぞ是非一本を購つて下さい。氏が文に雄であることはいふまでもなく、一文一章何等か哲學的暗示を與へてゐる。お忙しい方にはなほ〳〵御一讀をお勸めする。

○平山正氏外兩三氏から到着した原稿は、メ切後であつたので殘念乍ら次號に。

【五四】

風樹の嘆

中島司

大分の義弟から『母危篤、お出で待つ』と電報が來た時、品川の我が家では、十一になる次男が、盲腸炎の上に腹膜炎まで起しかけて、その看病に手こずつてる最中であつた。母はその姉、私にとりて母方の一番年上の叔母、の病氣見舞かたがた、九州の親戚まわりをして、大分の義弟の家に滯留中この夏かりそめの病で床に就いたのが、實はかりそめでなく、醫師はひそかに胃癌と宣告し、其の死は時の問題で、恐らく秋までの壽命であらうと斷定した。

炎暑も次第に薄らぎ、蟬の聲が遠ざかつて虫の音がしげくなつた初秋九月の二十日、いよいよ絶望との知らせに心を曇らせた私は、その朝家を出で特急列車で東京驛を發した。痩せ衰へて床に小さく横はる病兒の顏を、出立のきわにのぞいては、どうぞ死んでくれるなと心に念じたことであつた。東京を發した特急列車が、品川驛を素通りにして、速度を高めつゝ我が家に近い御殿山の崖下を走り過ぐる時、私は胸のとゞろきをどうすることもできなかつた。後ろに重態の兒、前には危篤の母、越し方も暗い、行く先きも暗い、後ろに殘した心配は遠ざかるほど增して來る、前に控えた心配は近づくほど加はつて來る、汽車は無關心に快適に走り行く、私は心配から心配へと胸を痛めながら、移り變る窓外の初秋の清景を賞づる餘裕も持ち得ないで、東海道から山陽道、海峽を渡つて豐州路を搖られて行つた。

× × ×

危篤とはいふものの、よもやと一縷の望みをつないで來た。しかし遂に獸目であつた。大分驛のプラットフォームに下りた瞬間に、母は昨日の午前九時最後の息を引き取つたと告げられた。私が東京驛をたつて御殿山の崖下を胸とゞろかせつゝ過ぎた頃は、すでに母は瞑目して居たのだ。道は遙けく最大急行で駈け付けながら、臨終にあはなかつたことは、殘念の極みだが、これも運命で何とも致し方ない、たゞあきらめるより外はなかつた。悲しみのうちにも義弟は私の到着を喜んで佛間に案内した。其處には母が寢棺の中に北枕に眠つて居られた。私は布をかゝげて現世における最後の母の顏に見入り且つ見納めた。死のまぎわまで意識がはつきりして居たさうで、到底永もちはすまいが、かう急に逝かれうとは思はなかつたと義弟は言つて居た。

着いた日の夕、大分の本光寺といふ寺で告別式を行ふた。式の濟んだのは暮れがたであつた。私は義弟達と共に棺に附添うて寺からすぐに火葬場へ行つた。寺から二十數町大分郊外にある火葬場までは可なりの道のりであつた。日は途中に暮れて、十五夜の名月が團々と東の空に浮び出て居た。喪主だから仕方もないが、燒き場で讀經の聲のうちに、焚き口へまはつて、母の骸を燒くべく松葉へ火をつける役目は、私にとりてつらかつた。

翌日の朝母は骨となつて一抱への壺に納まつて歸られた。その遺骨のお伴をして二十三日の早朝私は久留米へ赴むいた。久留米には私の父が居る。父は德雲寺の墓地に安らけく眠つて居る。その寺にこの母を、父のそばに眠らすべく私はお伴をするのである。父の命日は六月の二十日である。月は異なるが母も同じ二十日に死んだ。まだ、息のある間、母はたびたび『二十日』といふことをつぶやいて居たさうだ。そして二十日に死んだ。

× × ×

二十三日午前四時に眠をさました私は檐端に雨の音を聞いた。私と義弟達親戚の人々七人が大分驛をたつたのはまだ明けがたの、電燈のついて居た一番列車であつた別府を過ぐる頃には雨がやんで、東の空は雲が薄らぎ、鶴見嶽あたり白雲が湧き上つて居た。小倉で鹿兒島行に乘りかへる頃はすつかり晴天になつた。その代り車中は可なり蒸しあつかつた。筑後川の鐵橋を渡る時、肥前境の長堤に子供の時から見なれた杉の林が、三十年後の今日もやはりなつかしく眺められた。久留米は私の生れ故郷だ、しかし生れた家は今はない。

德雲寺では豫て通知してあつたから無庵老師が待つて居られた。親戚緣者の誰れ彼れもすでに集ふて居た。三時に鐘の音で本堂に居並び型の如く葬式が始まる。大分の告別式は母最近の信心が本門であつたから法華で行なつたが、家代々禪宗だから久留米は禪で本葬をした。老師が法衣の袖をかきあげて木鍬を片手に突つ立ちあがり鍬の先きで新佛を撫でるやうにして、大喝一聲引導を渡すのが、私には悲さの中の痛快さでたまらないのである。

式が濟んで、墓地に骨を納めたつい此のあいだ改葬した累代の墓には父も納まつて居る。その壙穴の中へ母の骨壺を箱のまゝ納めた穴の中は淨らかで、空氣が冷やりとして居た。陽は傾むいて林には法師蟬が頻りに鳴いて居た。

母を葬むつてしまつた私は、香煙立ち昇る墓前に瞑目一番、これで自分は完全に親なき身となつたといふ、當り前のことながらさすがに淋しい感じを、はつきりと持つた。親にたよるといふ心は素より今更もたないが、いくつになつても親は親で、長上が居てくれるたゞ生きて居てくれるといふことだけで、何とはなしに私は心强さを覺えて居た。これから先きは自分が長上になるのだ、と思ふと何かしらん妙な氣もちにならずには居れなかつた。

× × ×

其の夕直ちに久留米を辭して途中日田に一泊し、翌日耶馬溪を素通りして大分へ戻り、初七日の法事を濟ませて、別府から海路神戸へ渡り、三の宮から特急で二十八日の夜品川へ歸つた。行く時はあの通り重態だつた病兒は、とんとよくなつて居た。まだ床については居たが、醫師の言葉ではもう大丈夫、ほどなく全快とのことであつた。此の兒は母が生前私の三人の男兒中一番可愛がりいつくしんだ兒である。この兒若し斃れたとせば、母は劫なき者を冥土への途づれに得たことを果して喜ぶであらうか。（大正十五年十月十日午後三時品川にて）

記者白す　中島さんの御母堂は今春來大分の客寓に御療養中、とう〳〵悲報に接する事となつた。玆に謹んで御敬悼申上ぐ。

雜筆と寄稿

一、原稿は毎月十日締切ます。
一、しかし成るべく五日頃までに頂いた方が好都合です。
一、出來るなら一頁以内にお書き下さい。
一、御名前を出すことの出來ぬ原稿は、お載せいたし兼ねます。
一、お願ひした時は、どうか努めて御執筆下さい。お願せずとも、お心つきのことはどうかお書き下さい。
一、雜筆は事實上寄稿家及び讀者の共有物であります。

編輯後記

一記者

◇平北の谷知事から、珍らしく原稿がとどく。雜筆を忘れないでゐてくれる所が、うれしい。

◇といふと、お隣りの靑木さんは、どうしたんだ。マサカ妓生の本場だけに、盛んに秋色を探ぐつてゐるといふ、寸法でもあるまいに。人間は時々雜筆を書かぬと、渡邊（東拓）さんのいひ分ぢやないが『頭腦化石となるの件』になりますよ――これは裡里の佐々木さんや、仁川の後藤（一郎）さんまつた鎭南浦の川本（電氣）さんにも、こゝで同文で告知しておきます。

◇別項でも書いたやうに、本號では『ミダシ』を一段組とし、少しでも餘計に這入るやうにしたが寄稿家のお氣に入らねば、スグ復舊するつもりである。尙ほこゝでなるべく百行（十五字詰）以内にお願ひしたいことを、申しそへて置きます。

細工の御用は本町
德力へ
電本三九三九
京城
德
金銀白金
地金ノ御用ハ
京城明治町
德力本店出張所
電本一五七二
一〇八八

大正十五年十月廿八日印刷
大正十五年十一月一日發行
一部定價金四十五錢
京城府和泉町一六四
發行兼編輯人　松本武正
印刷人　石川利夫
印刷所　京城日報社
京城府和泉町一六四
發行所　京城雜筆社
電話光化門三〇六

頭の先より足の先まで

と云ふ趣意にて洋裝に必要な附屬雜貨部を開設致しました、實用向から高級品迄ズット取揃へ、確かな品を極めて潤利で御便利に御提供申します、何卒『丁子屋の洋服』同樣御評判の程御願申上げます。

▲雜貨部品目

帽子、ワイシヤツ、カラー、ネクタイ、ボタン類
メリヤス、セーター、沓下、手袋、首卷、ズボン
ツリ、ハンカチーフ、小供セータ、下着類

毛布新着

有名なロシア毛布各種、旅行用として最も妙
日本毛織特製茶毛布各種、寢具用として必需品

京城南大門通り

丁子屋洋服店

電話本局 長二四六三 / 二一一九七 / 一〇九〇三 番

休日無し毎日夜九時迄營業
御用の節は店内雜貨部御呼出被下度
市内は御一報次第現品持參貴覽に供し申候

京城日報

每日申報

井上收著

半島に聽く

著者より讀者へ

いよ〳〵出づ

曩に私がこの著作の豫告をすると、遠近各方面の同情者より本屋を開業したその店開きを祝ふ旨のお言葉を澤山頂きました本屋を始めたのでは、さら〳〵なく、自費出版をして、扶持に離れた償ひをしやうといふのですから、應分の御同情を願ひたいのです、いづれは筆の力でなければ生きる道のない私です、その内必ずや筆政壇上に甦生の日があらうと存じます。

本書は朝鮮出版界のレコードといひ得るに十分な體裁内容と編纂上の技巧を用ひ、六百餘頁に、諸先輩の漫畫筆蹟を挿入したゞけでも、高いものではないと思ひます、文學愛好の青年男女へも、教育の庭にも、家庭へも、倫理教育のテキストブックではありませんが、きつと何かの贈物をなし得るものと思ひます。

江湖の熱讀を待つ

定價金三圓五十錢也

京城雜筆（第九十三號）

大正十三年一月二十九日第三種郵便物認可
大正十五年十一月一日發行（毎月一回一日發行）